ユネスコスクールの今

ひろがり つながる ESD推進拠点

UNESCO Associated Schools in Japan as Bases for Promoting ESD
– Current Status and Way Forward

ユネスコスクールの今

UNESCO Associated Schools in Japan as Bases for Promoting ESD

ACCU

ISBN: 978-4-946438-95-0

ACCU
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター

ユネスコスクールの今

ひろがり つながる ESD 推進拠点

UNESCO Associated Schools in Japan as Bases for Promoting ESD – Current Status and Way Forward

はじめに

本書は、2005 年からの「国連 ESD[1]（持続可能な開発のための教育）の 10 年」が、2014 年 11 月に愛知県名古屋市で開催された「ESD に関するユネスコ世界会議」で終了し、後継プログラムである「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」が正式にスタートしたタイミングで、日本のユネスコスクールが取り組んできた ESD 実践の特色を探り、これまでの成果を整理するとともに課題についても明らかにしつつ、今後 ESD 実践の質を高めていくための参考としていただくことを目的として発行されます。

「ユネスコスクール」は ASPnet（UNESCO Associated Schools Project Network）に加盟している学校の日本での呼称です。ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現する学校であり、それらの学校の、世界にひろがるネットワークです。文部科学省および日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールを ESD の推進拠点と位置づけています。

現在、世界 181 の国に 10, 000 校を超えるユネスコスクールがあり、世界でも有数の学校ネットワークを形成しています。日本国内の加盟校数は、「国連 ESD（持続可能な開発のための教育）の 10 年（2005 年 ~2014 年）」を契機に飛躍的に増加し、平成 26 年 10 月現在で 807 校となり、1か国あたりの加盟校数としては世界最大となっています。今後、日本のユネスコスクールが各校として、またネットワークとして ESD の推進にさらなる貢献をしていくことが期待されています。

本書は、「ESD に関するユネスコ世界会議」のステークホルダー会議として開催された「ユネスコスクール世界大会」に関連して行われたふたつの事業を活かして構成されています。

ひとつは、『2014 年ユネスコスクール世界大会記念　ユネスコスクール ESD 優良実践事例集』の発行です。この優良実践事例集発行のために、全国のユネスコスクール及び加盟申請中の学校から、ESD 実践の事例が、数多く寄せられました。本書は、これらの実践、特に、優良事例集に掲載[2]された事例を、日本のユネスコスクールの現在の活動の特徴を示す貴重な資料と位置づけ、活用しました。

1　Education for Sustainable Development
2 「ユネスコスクール世界大会　全国大会宣言起草・事例選考委員会」による審査によって、応募校のなかから事例集掲載校が決定されました。同委員会は、「ESD 推進のためのユネスコスクール宣言（ユネスコスクール岡山宣言）」の起草にもあたりました。公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は同委員会の事務局を務めました。

もうひとつは、ユネスコスクール世界大会の一環として行われた「第6回ユネスコスクール全国大会」（2014 年 11 月、会場：岡山大学）参加者によって採択された「ESD 推進のためのユネスコスクール宣言（ユネスコスクール岡山宣言）」の起草と採択までのプロセスです。宣言の起草と採択の過程でユネスコスクール、その支援者によって議論され、整理されたユネスコスクールの成果と課題が、本書の構成に活かされています。

ユネスコスクールは、学校種、立地する地域、ユネスコスクールになったきっかけや ESD 実践へのアプローチなどにより、多様な活動背景と実践を持っており、総体としてその活動の特徴を捉えることは容易なことではありません。しかし、優良実践事例集の作成にいたるプロセス、また、宣言起草と採択のプロセスは、日本のユネスコスクールが「国連 ESD の 10 年」の間に到達した成果とともに、今後さらなる取り組みが待たれる課題についても明らかにする貴重な機会となりました。

本書は、これまで長くユネスコスクールの活動支援を行ってきた専門家の論考、および ESD を実際にすすめる立場から学校長・教師による論考を、上記のふたつの事業から浮かび上がったテーマにそって取りまとめたものです。

ユネスコスクールは、学校自身の努力はもとより、保護者や地域の協力者、教育委員会、学校を様々な立場で支援する多く組織・団体によって、仲間を全国に増やしてきました。ユネスコスクールがそれぞれの学校として、また世界のネットワークにつながる日本のネットワークとして、これからも ESD を推進し、持続可能な社会の実現にむかってその活動の質を高めていくために、本書が一助となれば幸いです。

また、本書は、日本語・英語両言語で発行されていますので、国外のユネスコスクールや関係者に日本のユネスコスクールについて理解していただくための資料としても活用していただくことを期待します。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、ユネスコスクール事務局としてユネスコスクールの加盟申請や加盟後の活動支援を行ってきた経験、ユネスコのプロジェクトとして国内外のユネスコスクールの国際協働学習プロジェクト（ESD　Rice プロジェクト）の運営などの経験、さらに、海外との教職員交流プログラム運営の経験などを活かして、今後もユネスコスクールの活動とそのネットワークの広がり、ESD の推進に貢献していく所存です。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目次

序言

第 1 章：ユネスコスクールの ESD －外観

7　日本のユネスコスクールにおける ESD の特色　住野　好久

第 2 章：ユネスコスクールの ESD- 成果と課題

16　ESD カリキュラムの開発と実践　及川　幸彦

26　ユネスコスクール　ESD で育てる能力・態度について　棚橋　乾

31　教師の意識変容と学校変容、地域変容　住田　昌治

38　ESD と自己肯定感の向上　中澤　静男

43　ユネスコスクールの学校間交流　市瀬　智紀

48　学校間交流と「ESD Rice プロジェクト」　望月　浩明、半澤　ゆかり

51　多様な地域の主体との連携における学校の役割　鈴木　克徳

54　震災復興と ESD　及川　幸彦

60　ESD と教員養成　加藤　久雄

64　世代間の学びの喜び　浅井　孝司

67　ESD を持続的にすすめる仕組み　－学校における視点から　鈴木　克徳

70　ESD を持続的にすすめる仕組み　－社会的側面から　中澤　静男

74　学校評価 －永田台小学校の事例から　住田　昌治

78　ESD の視点を活かした学校づくり　～教育効果を高める指導と評価の一体化を目指して～　徳山　順子

82　それでも「持続可能な未来への希望」をつくる ESD 学習 = 評価活動　～証拠・証言としての「当事者記録」を書く～　成田　喜一郎

第 3 章：ESD 推進のためのユネスコスクール（ユネスコスクール岡山宣言）

87　宣言本文

92　「ESD 推進のためのユネスコスクール宣言」から読み解く日本の ESD の成果と課題　永田　佳之

103　国連 ESD の 10 年の成果とユネスコスクールの課題　手島　利夫

106　「これからのユネスコスクール」を考える　米田　伸次

資料

109　データで見る日本のユネスコスクール

111　ユネスコスクール公式ウェブサイトの活用

●本書に掲載された論考は、それぞれの筆者によるものであり、事業委託元、発行者の意見・立場を代弁するものではありません。
●本書に掲載の写真のうち、特に断りのないものは著者提供によるものです。
●著者所属・役職は執筆当時のものです。
●英文の筆者の氏名は、姓、名の順序で記載しています。
●本書のオリジナル原稿は日本語です。英語はその翻訳です。一部論考では、英語版では、図表を省略しています。

第１章

ユネスコスクールのESD －概観

「ESD に関するユネスコ世界会議」(2014 年 11 月 10 日～ 12 日) に向けて、日本における ESD の優良実践事例を国内外に広く共有することを目的として編集された『2014 年ユネスコスクール世界大会記念　ユネスコスクール ESD 優良実践事例集』に掲載された 84 校の実践を分析・検討し、日本のユネスコスクールにおける ESD の成果とその特徴を示す。

日本のユネスコスクールにおける ESDの特色

岡山大学大学院教育学研究科
住野好久

1. 日本のユネスコスクールとＥＳＤとの出会い

2008（平成 20）年、日本ユネスコ国内委員会はユネスコスクールを ESD 推進の拠点と位置づけ、ユネスコスクールの加盟を促進する方針を提起した。これによって日本のユネスコスクールは、国際的なネットワークによる学校間交流だけではなく、地球規模の諸問題に取り組み、持続可能な社会の実現の担い手を育てる ESD の教育内容や手法の開発に取り組む役割を担うこととなった。

こうして ESD の担い手となった日本のユネスコスクールは、2008 年 1 月に 24 校だったが、2014 年 10 月には 807 校に増えた。

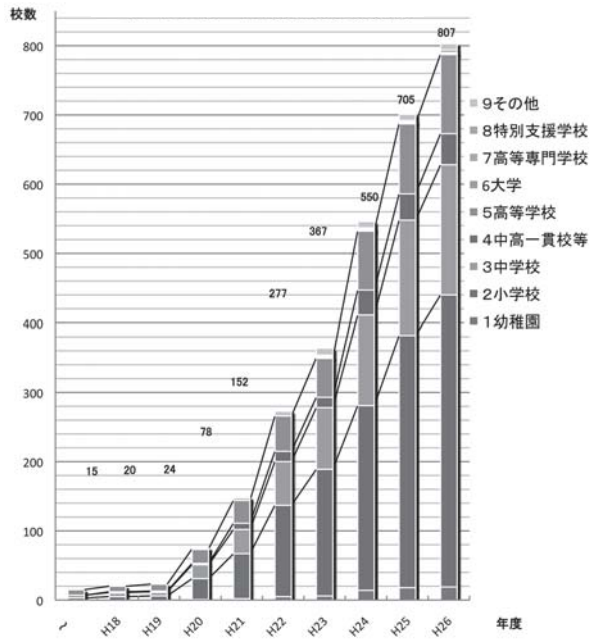


図１　ユネスコスクール加盟校の推移（文部科学省資料）

では、ユネスコスクールの量的な発展に伴って、ユネスコスクールのESDはどう発展してきたのか。ESDの10年で蓄積・発展してきた日本のユネスコスクールにおけるESDの成果とその特徴を示したい。そのために本稿では、「ESDに関するユネスコ世界会議」に向けて、日本におけるESDの優良実践事例を国内外に広く共有することを目的として編集された「ユネスコスクールESD優良実践事例集」（ユネスコスクール公式ウェブサイト http://www.unesco-school.jp からダウンロード可能）に所収の84校の実践を取り上げ、分析・検討する。

2. 学校教育課程におけるESDカリキュラムの位置づけ

❶「総合的な学習の時間」を軸としたESDカリキュラム

日本のユネスコスクールにおけるESDの多くは「総合的な学習の時間」を軸にして実践されている。「総合的な学習の時間」は、日本の学校の教育課程の国家基準である学習指導要領が1998年に改訂されたときに、小学校（３年生から）・中学校・高等学校・特別支援学校に創設された。「総合的な学習の時間」は、それまでの日本の学校の教育課程が教科毎の系統的な教授で構成されていたのと異なり、地域や学校の実態に応じて設定された教科横断的・総合的な学習課題を生徒が自主的・共同的に探究する時間である。学習指導要領では国際理解、情報、環境、福祉・健康という４つの学習課題が例示され、各学校はこれらの課題を位置づけたカリキュラムを開発して実践してきている。

日本のユネスコスクールにおけるESDカリキュラムは、この「総合的な学習の時間」を軸にして開発されている。従来の総合的な学習の時間のカリキュラムは、地域の自然や歴史・文化・産業等を教材とし、地域人材の活用を図り、体験活動・実践を重視するものであった。日本のユネスコスクールは、これらの特徴に加え、持続可能な社会づくりの担い手に必要な資質・能力の育成という目標を位置づけ、学際的な探究活動と社会参画と学校間ネットワークという視点を加えることで、ESDカリキュラムを開発してきた。そして、小学校１・２年に開設されている「総合的な学習の時間」と同様の性格を持つ教科「生活」を加えて、小学校１年生から高等学校３年生までの１２年間を通じて、ESDカリキュラムが構築されている。

さらに、これらの「生活科－総合的な学習の時間」を軸にして、他の教科、領域（道徳、特別活動等）とを関連づけながら、学校の教育活動全体を通じたESDカリキュラムが構築されている。それを構造的に示したものが「ESDカレンダー」である。「ESDカレンダー」は、東京都江東区八名川小学校長の手島利夫らが開発したもので、学年毎に一年間の教育の中で各教科、総合的な学習の時間、特別活動等がどのように結びついているのかを各単元を色分けして線をつなぎ、その関連を分かりやすく示したものである。さらに、福山市立駅家西小学校はこれを発展させて、各単元が何でつながっているのかを明確にした「ESD関連カレンダー」を開発している。こうした工夫によって、学校全体を通したESDが具体化されている。

❷教育課程の国家基準（学習指導要領）におけるESDの位置づけ

日本のユネスコスクールが「生活科－総合的な学習の時間」を軸にした教科・領域横断型のESDカリキュラムを構築できるのは、教育課程の国家基準である学習指導要領において各教科・領域の目標・内容にESDの理念・内容が位置づけられているからである。日本の学校教育は、国家基準にそって教育課程を編成して実施すれば、すべての学校において最低限のESDが実践される構造になっているのである。

■小学校総則
道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心をもち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。

■小学校社会第１ 目標
社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

■小学校理科第１ 目標
自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに、自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。

■中学校社会地理的分野
地域の環境問題や環境保全の取組を中核として、それを産業や地域開発の動向、人々の生活などと関連付け、持続可能な社会の構築のためには地域における環境保全の取組が大切であることなどについて考える。

■中学校社会公民的分野
持続可能な社会を形成するという観点から、私たちがよりよい社会を築いていくために解決すべき課題を探究させ、自分の考えをまとめさせる。

■中学校理科第１分野及び第２分野
自然環境の保全と科学技術の利用の在り方について科学的に考察し、持続可能な社会をつくることが重要であることを認識すること。

■高校地理歴史世界史A
現代世界の特質や課題に関する適切な主題を設定させ、歴史的観点から資料を活用して探求し、その成果を論述したり討論したりするなどの活動を通して、世界の人々が強調し共存できる持続可能な社会の実現について展望させる。

■高校地理歴史地理A
環境、資源・エネルギー、人工、食料及び居住・都市問題を地球的及び地域的視野からとらえ、地球的課題は地域を越えた課題であるとともに地域によって現れ方が異なっていることを理解させ、それらの課題の解決には持続可能な社会の実現を目指した各国の取組や国際協力が必要であることについて考察させる。

■高校公民現代社会
持続可能な社会の形成に参画するという観点から課題を探求する活動を通して、現代社会に対する理解を深めさせるとともに、現代に生きる人間としての在り方生き方について考察を深めさせる。

図２　出典：『ユネスコスクールと持続可能な開発のための教育』、日本ユネスコ国内委員会、2008年(2014年改訂版)

また、現在の学習指導要領は「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」を育成し、学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を養うことを求めている。

すべての教科・領域において主体的に課題に取り組む資質・能力を育成することも、学校全体を通したESD実践の展開をもたらしている。

❸高等学校におけるＥＳＤカリキュラムの特色

小・中学校は義務教育学校であり、全国的な均一性が高いのに対し、高等学校は多様な専門学科があり、教育課程を比較的自由に編成できる。そのため、高等学校ではESDを実践するための教育課程も多様に工夫されている。

一つは、学科の特色を生かしたESDカリキュラムである。例えば、秋田市立秋田商業高等学校では、商業教育とESDとを融合させた「エコロジカル・ビジネス」をテーマにしている。籾殻からつくったボードを販売する企業や廃タイヤからマットを再生し販売する企業など県内のリサイクル製品業者と連携し、「環境保護にもなるし、利益も出るような商品の開発」に取り組んでいる。筑波大学附属坂戸高等学校では、農業・工業・福祉・商業に関する専門科目を開設する総合学科の多様性を生かして、国際交流している学校のあるそれぞれの国の環境問題や持続可能な社会づくりについて協働学習している。

もう一つは、学習指導要領にはない学校独自の教科・科目によるESDカリキュラムである。例えば、大阪府立佐野高等学校では国際教養学科に学校設定科目「国際理解」を開設し、環境・貧困・紛争など世界で起こっている諸問題について学び、世界の多様な文化や歴史を尊重し、かつ自らを主張できる国際感覚を身につけるESDに取り組んでいる。北海道斜里高等学校では総合学科に学校設定科目「知床自然概論」を設定し、この科目を軸に世界自然遺産である知床の環境保全に関するESDカリキュラムを開発している。岡山県立矢掛高等学校では地域の自然環境を考える「環境」と地域の持続可能な社会づくりを考える「やかげ学」という2つの学校設定教科を軸にESDカリキュラムが構成されている。広島大学附属中学・高等学校では「総合的な学習の時間」の一部を「ESD研究」と名付け、各教科の教員が持続可能な発展をテーマにリレー形式で授業を行い、複数の科学的な根拠から持続可能性について総合的に思考し判断する力を育成するESDカリキュラムを開発している。

3. ESD実践で取り上げられる学習課題・内容の特色

❶自然環境学習の特色

日本のユネスコスクールにおけるESDは、社会の持続可能性を脅かしている様々な課題に取り組んでいる。日本では、図のような課題が想定されている。

なかでも、環境学習に取り組むESD実践が多い。地域の植物や動物の実態を調査し、そのすばらしさと課題に気づき、保全に向けて実践する。その際、多くの学校が着目しているのが「田んぼ」である。「田んぼ」には子どもたちにとっては身近な自然であり、多くの生き物が調和的に生息し、生物の多様性や生物間の関係について学ぶことのできる絶好の教材である。さらに、「田んぼ」は米作り＝農業の場であるため、生物と人間社会・生活との関係、地域の産業・経済の問題についても学ぶことができる。つまり、「田んぼ」を通して生物の多様性と生態系、自然環境と人間社会・生活との関係、食育（何をどのように食べて生きていくべきかを考える教育）などについて考えるESDカリキュラムが構成されている。後述する「ESD Riceプロジェクト」を通じて国際的な視野から「田んぼ」や米作りについて学習している学校もある。

また、地域の自然環境の実態を調べるだけではなく、それが地球温

図3　出典：『ユネスコスクールと持続可能な開発のための教育』、日本ユネスコ国内委員会、2008年(2014年改訂版)

暖化や地球規模の生態系の問題とつながっていることに気づかせ、自然環境破壊の背景には自分たち人間の生活やエネルギー問題があることへと学びを発展させている。これによって、環境学習はESDの理念をもったものへと発展している。

さらに、我が国は2011年に東日本大震災という未曾有の自然災害にあった。この体験から、自然はただそのまま維持すればいいというものではなく、自然環境保全と地域社会の持続性とをどう共存させていくか、自然の恵みを維持しながら自然の恐怖をどう抑制するかといった、自然と人間社会とのつながりを考えるESDが追求されている。

❷国際交流・多文化理解教育の特色

日本のユネスコスクールにおけるESDは、まだ国際的なユネスコスクール・ネットワークとのつながりが十分ではない。が、「優良実践事例集」に所収された学校では国際的な学校間交流が豊かに行われている。例えば、小学校35校のうち13校が何らかの形で諸外国との交流を図っている。小学校での国際交流には、それを支える組織やプロジェクトの役割が大きい。

その1つに、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）がユネスコ事業として取り組み、宮城教育大学などのユネスコスクールを支援する大学間ネットワーク（ASPUnivNet）も協働して実施されている「ESD Riceプロジェクト」がある。アジア太平洋地域にお米を通じたESDの推進を図るために、日本を含めて、米を主食とするアジアの6カ国（インド、インドネシア、韓国、タイ、フィリピン）の学校がESDを共同実践する。大崎市立大貫小学校、神奈川県立有馬高等学校、筑波大学附属坂戸高等学校などが参加している。また、ジャパンアートマイルによる「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」では、海外の学校との協働学習の成果を一枚の壁画として共同制作するもので、多摩市立南鶴牧小学校、東浦町立緒川小学校、神戸大学附属中等教育学校、岡山一宮高等学校などが参加している。また、民間企業が実施するＣＳＲ（Corporate Social Responsibility）活動に参加することで、国際交流に取り組む学校もある。

高等学校では、ネパールで現地のＮＧＯの支援を受けながら、現地での生活を体験しながら多文化理解・持続可能な社会の担い手に求められる態度と資質を高めるスタディツアーを実施する大阪府立佐野高等学校、ＮＰＯの協力を得てバンコクで貧困層自立支援のための海外建築ボランティアに取り組む立命館守山高等学校、世界の18の国・地域の21校の姉妹校とともに地球規模の環境問題とそれぞれの地域での環境問題・エネルギー問題について学びあう盛岡中央高等学校など、国際的なESD実践に取り組む学校がある。

4. 地域社会での体験活動・実践とそれを支える仕組み

❶地域社会での体験・実践を位置づけたESD

日本のユネスコスクールにおけるESDは、地域社会とつながり、地域社会の持続可能な発展の担い手を育成するという課題を重視する。そのため、特に小学校では、地域社会のすばらしいところを探し（宝探し）、そのすばらしさを実感し、自分たちが今住んでいる地域社会に対する誇りを持たせることを重視する。そのために、地域社会の自然環境（植物・昆虫・動物等）の実態を知るだけではなく、その自然環境の中で生物多様性が保たれていることの価値を学び、「地域の自然を守りたい！」という意識を高める。地域の文化遺産（伝統芸能や歴史的建造物）について学び、体験し、「地域の文化を引き継いでいきたい！」という意識を高める。中学校では、地域の持続可能な発展のために提案し、自分たちもできることを実践する。高等学校では、より科学的な地域調査やより学際的で地球的な視野をもった考察をし、地域社会変革の担い手として実践に取り組む。

地域社会の自然・文化を取り上げる代表的なものが、地域社会にユネスコの世界自然遺産・世界文化遺産のある学校による世界遺産学習である。例えば、世界自然遺産に関するESDに取り組んでいるのは、小笠原諸島にある母島小学校・小笠原小学校、知床にある北海道斜里高等学校。世界文化遺産に関するESDに取り組んでいるのは、富岡製糸場周辺の絹産業遺産群にある藤岡市立美久里西小学校、古都奈良にある奈良市立済美小学校・済美南小学校などである。

❷地域社会と連携したESDを支援する仕組み

このような地域社会でのESDを可能としているのは、地域社会にそれを支援する仕組みがあるからである。

第一に、地域社会の自然環境保全や文化遺産の継承、国際的な支援や交流事業等に取り組んでいる地域住民の組織やＮＰＯ等の支援である。学校で「ゲストティーチャー」として指導をしたり、地域社会での体験活動や社会的実践の中で支援したり、学校での学習が終わった後に地域社会において実践を続ける機会を提供したりしている。

第二に、地域住民やＮＰＯ等の活動拠点としてその地域にある公民館や公共施設もまた重要な役割を担っている。学校教員は異動があり、学校のある地域社会の歴史や現状について十分な知識と経験をすぐに獲得することはできないが、公民館には地域社会の歴史や現状についての情報が集積しており、それを教授できる人材がいる。公民館は成人を対象としたESDの拠点となり得るだけではなく、学校におけるESDを支援する役割を担っているのである。

第三に、その地域社会の教育行政機関である教育委員会による支援である。気仙沼市、多摩市、岡山市、大牟田市などでは、市内の多くの公立小・中学校をユネスコスクールとし、学校間のネットワークをつくって、その地域社会に必要なESDの推進を政策的に図っている。そのために、市内の小・中学校合同のESDに関する教員研修会を実施したり、ESDの成果を子どもや教員が相互に、そして地域住民に発表する場をつくったり、ユネスコスクール間の交流やネットワークづくりを支援したりしている。

第四に、各地の大学や研究機関等が地域社会での調査や考察を深めたり、ESDカリキュラムの構成に貢献している。特に、「ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）」に加盟している大学は、各地の学校のユネスコスクールへの申請を支援したり、ユネスコスクールにおけるESD実践の支援をしたり、ユネスコスクールと諸団体、ユネスコスクール間の連携・交流・共同を構築する役割を果たしている。

以上、日本のユネスコスクールにおけるESDの特徴について述べてきた。この日本のユネスコスクールの取り組みが世界のユネスコスクールにおけるESD実践モデルとなり、そして、世界の持続可能な発展にユネスコスクールが貢献することを期待している。

第２章

ユネスコスクールのESD
－成果と課題

ユネスコスクールが「国連ＥＳＤの１０年」の間に到達した成果とともに、今後さらなる取り組みが待たれる課題について、１５のテーマからまとめた。

ESDカリキュラムの開発と実践

日本ユネスコ国内委員会委員
宮城教育大学協力研究員
及川幸彦

1 はじめに

日本では、「国連・持続可能な開発のための教育の 10 年（DESD）」の提唱国として、この 10 年の間に、飛躍的に加盟校が拡大したユネスコスクールを中心に、学校教育における ESD に関する様々な実践や、それを支える ESD カリキュラムの開発が行われてきた。ここでは、これらの実践の蓄積をもとに ESD を学校の教育課程に組み込み、効果的な取組がなされるためのカリキュラム開発の手法について考察する。

2 ESD のカリキュラム開発の基本的な考え方

まず、各学校において ESD を推進する際には、これまでの教育を変革する教育の理念と手法として ESD をとらえ、以下の点を認識し、それを踏まえて ESD のカリキュラム[1] やプログラム[2] を開発・実践していくか考える必要がある。

❶地域の文脈に適合し、持続可能性（SD）を見据えていること

ESD は、何より地域に根ざした学びであることが大切である。地域のよさ（光）や課題（影）に向き合い、地域の持続可能性（SD）を常に視野に入れ、その実現に貢献する教育活動を展開する必要がある。

❷学び手の行動の変革を促すこと

ESD は、習得型・伝達型が主流であったこれまでの学校教育の現状を変革し、知識が生きて働くように体験と探究を重視し、持続可能な社会の担い手に資する能力・態度を養うことによって、学び手の意識と行動の変革をもたらすこと、すなわち、持続可能な社会の実現に向けて具体的な実践を促すことを目的とする。

1　ここでは学校全体又は各学年の年間の教育課程をさす
2　ここでは単元レベルでの指導計画をさす

❸人間の営みを中核に据えた学際的な学びであること

ESD は、従来の各教科や領域の縦割り的な学びではなく、地域や社会の持続可能性を志向し、環境、経済、社会、文化を融合・連関させながら、その中核に持続可能な人間の営みを据えた学際的な学びでなければならない。

❹多様な学習方法が保障されていること

ESD は、学習内容や領域のみならず、その学習方法にも多様性が保証されていなければならない。体験的、探究的、問題解決的な学習活動や交流、参加型の学習場面を意図的・計画的に設定し、持続的な社会の実現に向けて学習者主体の学びを創造していくことが重要である。

❺教育活動全体に統合されていること

ESD は、既存の教科領域の中で持続可能性の要素（構成概念）や育成すべき能力・態度位置付けながら実践することも可能であるが、より効果的に取り組むためには、教科・領域の枠を越え総合的な学習の時間等を活用しより体験的で探究的な学習を推進することが重要である。さらには、学校経営や教員研修、地域との連携など学校教育全体で取り組むことによってより日常的で学校文化に根付いた ESD の推進が可能となる。その一方で、学校教育（Formal Education）の枠だけではなく、社会教育（Non-formal Education）や生涯教育（Informal Education）との連携も大切となる。

❻価値を志向し、教育の質を高めること

ESD は内容ではなく、「価値」を重視する教育と言われる。何（内容）をではなく、何のために（目的）学ぶか。知識（量）ではなく、持続可能な価値観に基づいた行動様式や生き方（質）を求める学びとしてとらえなければならない。

❼国際的な視野と連携を育むこと

持続可能な社会の実現を阻む要素は、地域や一国内で解決されるものばかりではない。私たち人類は、地球温暖化や生物多様性の危機、紛争や貧困など、地球全体で解決されなければならない数多くの課題に直面している。このような地球的な広がりを見せる諸課題(Global Issue）に対して、ESD は、持続可能な社会の担い手に地球的な視野を育成し国際的な連携のもとに、課題解決に向けた知恵と方策、連帯を育成していかなければならない。

3 日本における ESD のカリキュラム・プログラムの特徴

これまでの日本のユネスコスクールを中心とする学校教育における ESD の取組をカリキュラム・プログラムベースで分類すると、以下のタイプに類型化できると考える（表1）。

表1　学校教育おけるESDプログラムの類型

ESDのタイプ	代表事例・GP	長所
教科連携型	・ESDカレンダー	◎教科との関連が分かりやすくESDの意識化が図れる
プロジェクト型	・D-Project ・ESD Riceプロジェクト ・RICEプロジェクト	◎ミッション・方向性がはっきりしている
テーマ型	・世界遺産学習 ・平和学習	◎地域の良さ（遺産）や課題をアピールできる
総合カリキュラム型	・ESDプログラムチャート ・多摩一型問題解決学習	◎地域に根ざした体系的・探究的なプログラム開発が可能
クラブ活動型	・ユネスコクラブ（高・大）	◎取組が長続きしており，ユネスコ活動とのつながりも強い

❶教科連携型

これは東京都の東雲小学校で開発され、その後全国に広がった「ESD カレンダー」[3]に代表されるように、ESD の視点から単元配列表の各教科や領域の単元及び題材を国際理解や福祉、環境等の分野ごとに色分けし、それらの関連を線でつなげて示したものである。その長所としては、教育課程全体を ESD の観点から俯瞰し、一見して教科・領域間、そして単元相互の関連がわかりやすく、教育活動全体で ESD の意識化が図られることである。ESD を新たに始める学校にとっては、全体像をイメージしやすく ESD の入門編として大変有効なスキームである。しかし反面、ESD の学びで重要とされる探究的なストーリーや問題解決のプロセスが見えにくいこと、また、地域が異なっても、同じ教科書や単元配列表であれば、類似した ESD カレンダーが作成される例があることから、地域の課題や学校の個性に応じた特色ある ESD カリキュラムの開発という点では課題があると言える。

❷プロジェクト型

これは、ESD の学びを一つの「プロジェクト」として展開する手法であり、子供たちにとっては、学習活動の目的や方向性、そのミッションが明確でわかりやすい。また、それを実現したときの達成感も大きく、子供たちの取組へのモチベーションを喚起しやすいという利点がある。特に、教科担任制である中学校や高等学校において、このプロジェクト型は生徒と教員が参画しやすく有効である。ユネスコ活動と連携した「D-Project」[4]や ACCU が実施するや「ESD Rice プロジェクト」[5]、宮城教育大学が実施「RICE プロジェクト」するなどがその事例といえる。その一方で、一部のプロジェクト学習では、一過性のイベントになりがちであったり、ESD のカリキュラムとして教育課程に位置付けることが難しかったりするなどの課題が指摘されている。

❸テーマ型

自分たちの住んでいる地域のよさや課題を前面に打ち出し、それをテーマとしてハイライトした ESD のカリキュラムが「テーマ型」である。奈良の「世界遺産学習」[6]のように自分たちの地域に残る文化遺産の価値を再評価して最大限アピールしたり、広島の「平和学習」、水俣の「公害学習」のように地域の教訓や負の遺産を後生や他地域に伝えようとしたりするなど発信力を持っている。しかし一方では、ESD として考えた場合に、そのテーマ以外の持続可能性に関わるアプローチや分野をどのように学習に包含するか、あるいは、テーマの中に統合するかという課題に直面している。

❹総合カリキュラム型

これは、日本がもつ「総合的な学習の時間」を最大限活用し、それを基軸に ESD で重視される体験的、探究的、問題解決的な学習を十分に保証し、地域に根ざした創造的な ESD の学びを実現しようという試みである。もちろん、その中では各教科との関連を意識したり、外部との連携を図ったりしながらカリキュラムが構築され推進されていくが、その原動力は、各学校が個性的かつ創造的にデザインした子供が主体となる体験的かつ探究的・問題解決的な学びのストーリーである。DESD 以前から ESD に取り組んでいる気仙沼市の面瀬小学校の「ESD プログラムチャート」[7]や東京都の多摩第一小学校の「多摩一型問題解決学習」[8]がその事例と言える。前者は、特に体験的・探究的な学習を重視し、後者は、問題解決的なプロセスを重視している。

3　東雲小学校・八名川小学校（2014）「日本と世界の学校教育を活性化する ESD カレンダーの開発と普及」，『ジャパンレポート』，「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」関係省庁連絡会議編，P42・43

4　D-project プロジェクト 2014，http://www.d-project.jp/2014/unesco/index.html
5　ESD Rice Project，http://esdriceproject.com/
6　奈良市教育委員会他（2009）「奈良大好き世界遺産学習」
7　気仙沼市教育委員会他（2009）「メビウスー持続可能な循環 2002 − 2009」，及川幸彦編集
8　多摩第一小学校（2014）「持続可能な社会づくりの推進に向けた、問題解決力を身に付け自立できる子どもの育成」

しかし、これらのカリキュラムを開発し実践するためには、児童生徒の発達段階や学年間の系統性を考慮する必要があることから学校内での協働体制が不可欠である。また、地域素材の教材化やフィールドワーク、探究的・問題解決的な学びのマネジメントは、教師の高度なスキルが必要であり、地域や専門家との連携、そして教員研修等が不可欠である。さらには、時々刻々と変化する児童の実態や地域の状況を踏まえつつカリキュラムをどのように改善していくかも持続的な取組にむけた課題である。

❺クラブ活動型

ユネスコ活動に取り組んでいたり、ユネスコスクールに加盟したりしている高等学校、大学の中には「ユネスコクラブ」を保有しているところがある。これらは、クラブ活動としてUNESCO活動やESDの実践をしており、中には、長い歴史を持っているクラブもある。このユネスコクラブの特徴としては、クラブ活動であることの利点を生かして、活動ベースでESDに取り組んでおり地域とのつながりも深い。特に、地域のユネスコ協会と連携を図りながら草の根活動として、持続的な活動を行っている団体もある。反面、クラブ活動の性格上、学校の正規の教育課程（カリキュラム）に位置付けられてESDを実践しているところはほとんどなく、Non-formalとしての活動となっているのが現状である。

4 ESDカリキュラム開発のための3つのアプローチ（防災の視点を中心に）

学校教育においてESDを教育課程に組み入れ、ESDを正規の教育活動として実践するためには、以下の3つの手法（アプローチ）が考えられる。一つは、既存の教科・領域の中にESDを組み入れ実践する❶融合的な手法（Infusion Approach）であり、2つめは、各教科の関連を図りながらも総合的な学習の時間等を活用して統合的にカリキュラムを組み立てる❷統合的なアプローチ（Integrated Approach）である。そして、3つめは、カリキュラムにとどまらず、学校経営や教員研修、地域の連携等を含め、全校的にESDを推進する❸全体的なアプローチ（Holistic Approach）である。これらを学校の実情や教育課程の編成状況を踏まえて段階的に取り入れることで、ESDのカリキュラムが学校全体の教育課程や教育活動の中へ組み込まれ、日常的な取組へと普及していくものと考える。

❶融合的なアプローチ（Infusion Approach）

この手法は、既存の教科・領域に内在するESDに関する学習事項や内容をハイライトし、ESDで育むべき能力・態度を整理して、既存の教科指導の中でESDの学びを推進しようとするものである。これは、既存の教科内容の枠組みを変えるのではなく、それをESDの視点で捉え直し、教科の目標を達成しつつもそれと共通するESDの能力・態度を意識化したり、学習をESDとして深化・発展させたりすることでESDを既存の教科に溶かし込んでいく手法である。国立教育政策研究所の「学校教育における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究」も基本的にはこの手法に立ったものである。

例えば、図1にあるように、小学校の6年生の既存の教科・領域には、防災に限定しても、それに関する学習事項・内容が数多く含まれており、これらを防災教育の視点でとらえ直し、相互の関連を図りながら持続可能な社会を構築するという方向で学習を組み立てることでESDとして防災の学びに発展することができる。（図1）

しかしながら、融合的なアプローチでは、ESDのカリキュラムとしては十分とは言い難い。既存の教科の教育課程の枠組み、すなわち目標や指導内容、時数等に制約・制限されESDとして必要な内容や活動が保証しにくい場面も想定される。実際に、実践している教員にも教科の目標とESDのねらいのどちらを優先したらよいかとの迷いが生じている例も見られる。本来、この2つは相反するものではなく相互に補完し合うものであるが、日常の授業の中でその関係を整理しながらESDを推進するのはなかなか困難である。そして何より、この手法では、教科の枠を越えてダイナミックにESDが重視する探究的なストーリーや問題解決のプロセスで学際的に学ぶようなカリキュラムを構築することは難しい。

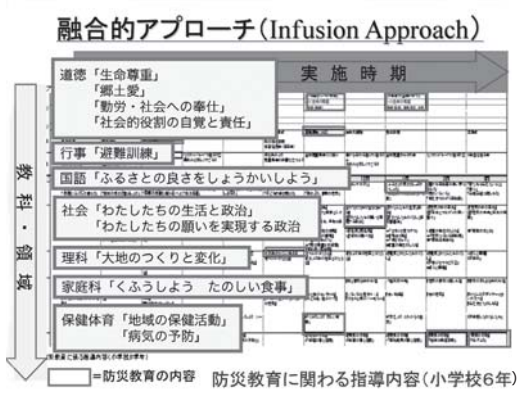


図1　融合的なアプローチ（Infusion Approach）

❷統合的なアプローチ（Integrated Approach）

融合的なアプローチが教科での実践が主体なのに対し、教科の枠を越えて探究的ストーリーと問題解決的なプロセスを保証し、ESD としてカリキュラム構築する手法が「統合的なアプローチ」である。教科の枠内では、保証しきれなかった ESD として大切な学習内容や活動を「総合的な学習の時間」等を活用して統合的に組み入れて、カリキュラム化していくことで、問題解決やつながりを重視した ESD らしいカリキュラムが構築できる。

例えば、防災の視点からカリキュラムを開発しようとした際に、図２に示すように「地域防災」や「防災マップづくり」、「異学年や家庭での防災学習」などは、既存の教科・領域の教育課程では扱われていないが、防災教育としては大事なコンポーネントである。また、「災害後の未来に街づくり」も教科書には出てこないが、災害後の「持続可能な街づくり」という ESD の視点では必要不可欠なものである。そのような防災学習のコンポーネントを新たに開発し、総合的な学習の時間等でストーリー性を持ってカリキュラム化することで、子供たちの問題解決能力や、他者や地域とのつながりの意識が強化される（図２）。

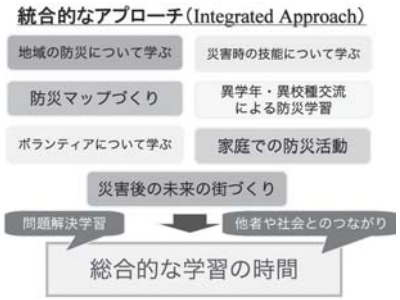


図２　統合的なアプローチ（Integrated Approach）

このような統合的なアプローチで ESD カリキュラムを開発するには、教師には、地域の諸課題やよさを踏まえ、児童の興味・関心や発達段階、学年間の系統性を考慮しながら学際的で探究的なカリキュラムをデザインする創造的な能力が必要となる。その際には、地域や専門家との連携や教員研修が有効であるが、カリキュラムデザインを支援するツールも必要である。気仙沼市教育委員会では、教師の ESD のカリキュラムデザインを支援するために「ESD カリキュラムガイド」[9]や「メビウス」[10]（図３）、「防

9　気仙沼市教育委員会他（2010）「気仙沼市 ESD カリキュラムガイド＜第３版＞小・中学校編」
10　気仙沼市教育委員他（2009）「メビウス～持続可能な循環 2002 － 2009」

図３
ESDプログラムチャート
（面瀬小学校６学年の例）
出典：「メビウス～持続可能な循環 2002－2009」
（気仙沼市教育委員会他、2009）

災学習シート」[11]（「震災復興と ESD」参照）を作成し各校に配付している。教師は、これらの支援ツールを活用することで、各学校の実情に応じた ESD のカリキュラムを開発し、実践することができる。

❸全体的なアプローチ（Holistic Approach）

さらには、ESD をカリキュラムとしてだけではなく、学校経営や教員研修、そして地域との連携においても ESD の理念を取り入れ、全体的なアプローチ（Holistic Approach）で全校的（Whole School）に ESD を推進する体制を整備していく必要がある（図４）。これにより、ESD が学校教育の中でより日常化し、保護者や地域にも波及していくことにつながる。学校自らが ESD 推進の地域拠点となり、持続可能な地域づくりの原動力として貢献していくのである。なお、これについては、名古屋で開催された「ESD ユネスコ世界会議」で、発信された Global Action Programme（GAP）[12]の優先行動分野の２つめに明記されており、今後の学校等の機関の ESD への包括的な取組が期待されている。

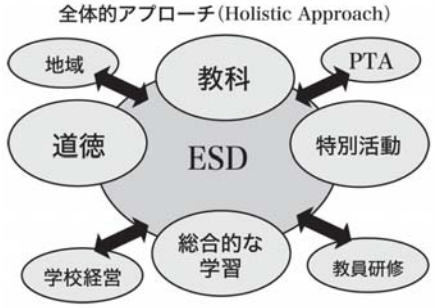


図４　全体的なアプローチ（Holistic Approach）

11　気仙沼市教育研究員（2014）「防災学習シート」気仙沼市教育委員会他、
12　UNESCO（2014）「UNESCO Road map for implementation the Global Action Programme on Education for Sustainable Development」

5 ESD カリキュラムにおける能力・態度の明確化

ESD のカリキュラムを開発する際には、学習の目的や方向性を確かのものにするためにも、また学習を通して児童の変容を評価するためにも、育成すべき能力・態度を明確に設定する必要がある。現在の日本の学校教育において、各学校が掲げる「ESD の取組で育成すべき能力･態度」は、大別するとおおむね次の３つのパンターンに分かれる。

一つは、学習指導要領で定められた既存の教科・領域の目標と評価の枠組みである。特に各教科の３つの能力・態度、すなわち、①「関心・意欲・態度」、②「思考力・判断力・表現力」、③「知識・理解」（教科により表現、枠組みは多少異なる）の３観点である。ESD においても、この従来の観点で目標を立て評価している学校はいまもある。また一方で、各校が独自に定める「総合的な学習の時間」の能力・態度、例えば「コミュニケーション能力」や「問題解決能力」等で能力・態度を設定し変容を評価している学校もある。

もう一つの能力・態度のパターンは、日本ユネスコ国内委員会が示している「ESD により育みたい力」[13] である。内容としては、①持続可能な開発に関する価値観（人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等）、②体系的な思考力（問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方）、③代替案の思考力（批判力）、④データや情報の分析能力、⑤コミュニケーション能力、⑥リーダーシップの向上である。

３つめとして、近年、学校現場に急速に普及している国立教育政策研究所が提案した「７つの ESD の能力･態度の例」[14] である。これは、上記の学習指導要領の評価の観点やユネスコが示す能力・態度、OECD のキーコンピテンシー等を総合的に勘案し、７つの能力・態度に分類したものである。具体的には、①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑤ 他者と協力する態度、⑥つながりを尊重する態度、⑦自ら進んで参加する態度を提案している（表２）。しかし、これはあくまでも例であるので、一連の学習ですべてを網羅して達成をめざすのでなく、各学校が子供の発達段階や学習の内容に応じて、焦点化したり選択したり、

13 『我が国における「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」実施計画』（H18 年決定 H23 年改訂）

14 国立教育政策研究所（2012）「学校教育における持続可能な発展のための教育（最終報告書）」

あるいは補足したりして自校化し、実際のカリキュラムに適用させていく必要がある（表3）。

表2 キーコンピテンシーとESDで育む能力・態度

カテゴリー	コンピテンシー	ESDの能力・態度
1.相互作用的に道具を用いる。	・言語、シンボル、テクストを相互作用的に用いる。 ・知識や情報を相互作用的に用いる。 ・技術を相互作用的に用いる。	① 批判的に考える力 ② 未来像を予測して計画を立てる力 ③ 多面的、総合的に考える力
2.異質な集団で交流する。	・他人とのいい関係をつくる。 ・協力する。チームで働く。 ・争いを処理し、解決する。	④ コミュニケーションを行う力 ⑤ 他者と協力する態度
3.自立的に活動する。	・大きな展望の中で活動する。 ・人生設計や個人的プロジェクトを設計し実行する。 ・自らの権利、利害、限界やニーズを表明する。	⑥ つながりを尊重する態度 ⑦ 自ら進んで参加する態度 ⑧ 自ら考え行動しようとする態度（※気仙沼市オリジナル）

国立教育政策研究所 最終報告より

表3 発達段階で育みたい能力・態度の焦点化（ 例）

6 結びにかえて～子供と教師が共に紡ぐ ESD カリキュラム

学校教育における ESD のカリキュラムを開発する際の考え方や手法について、日本の ESD の実践の状況をふまえながら述べてきたが、ESD のカリキュラムづくりにとって大切なことは、ただ活動や諸能力を盛り込んでカリキュラムとしての形や体裁を整えることではなく、実際に子供たちが主体的に課題を追求するための探究的な学びのストーリーを如何につくるかである。そのためには、子供たち自らが地域のよさを実感し、課題と向き合い、様々な素材や人々とつながり、存分に体験を積みながら自然や地域、社会、そして世界と共に生きていくための知恵と術を自ら獲得して、それを主体に実践していくような学びをめざしていかなければならない。子供も教師もわくわくするような、必要感や切実感のこもった ESD のストーリーを共に紡いでいくことが、教育を通じた持続可能な未来への道である。

ユネスコスクール ESDで育てる能力・態度について

全国小中学校環境教育研究会会長
棚橋乾

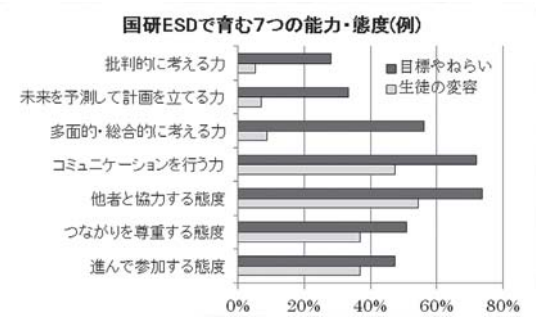
1 ESD で育む能力・態度について

持続可能な社会をつくるための実践には、能力や態度の育成が必要である。ESD を発達段階で捉えると、小中学校で指導する ESD では、能力・態度（学力）の育成という視点は欠く事ができない。また、OECD の国際学力調査 PISA 以来、国内外の学校は「学力向上」が大きなミッションとなった。学力問題を抜きに、教員が教育活動（ESD を含む）に価値を見出すことは難しい。能力・態度の視点は、ユネスコスクールの質的向上と共に、ESD 実践校を増やす上で重要なポイントである。

「ESD に関するユネスコ世界会議」全体会合の冒頭、ユネスコのイリナ・ボコバ事務局長は、ESD は質の高い教育であることと、抽象的で分かりにくい教育であり、具体的で分かりやすいことが課題だと語った。また、評価も課題と指摘された。分かりやすさとは、育む能力・態度と、指導方法を明確にして指導することである。また、能力・態度の定まっていないと評価はできない。目標を定めた実践と評価を繰り返すことで、ESD も教育としての深まり＝質の高い教育となると考える。

2 ユネスコスクールの現状

全国小中学校環境教育研究会では、平成２６年夏に、全国のユネスコスクール小中学校全 530 校にアンケートを送付して回収・集計した。回収率は３８％であった。❶ESD と学校経営❷各校の ESD で育む能力・態度と児童生徒の実態について調査した。右上のグラフは中学校の❷の項目と結果の一部である。小学校も概ね同様の傾向であった。悉皆調査ではないことを考慮する必要はあるが、批判的思考や多面的思考、計画力が低い結果であった。全体を見るとユネスコスクールとして能力・態度の育成が十分でないと危惧される。ユネスコスクールは質的な向上を常に図る必要がある。各学校が ESD で育む能力・態度を明確にすることが、その第一歩である。



3 ESD で育む能力・態度とは

国立教育政策研究所が示した能力・態度（例）は、批判的思考力など、これまで日本の学校教育で意識して指導していなかった内容がある。そのため、これらの指導方法が定着していないこともあり、分かり難く、成果が上がり難い結果となっている。

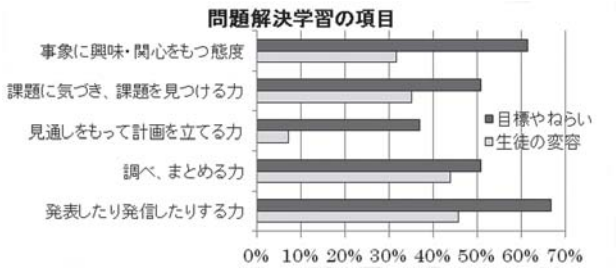
日本ユネスコ国内委員会[1]が示す ESD で育む力には、●持続可能な開発に関する価値観●体系的な思考力●代替案の思考力●データや情報の分析能力●コミュニケーション能力●リーダーシップの向上が示されている。OECD のキー・コンピテンシーも含めて、持続可能な社会づくりのための学力や２１世紀型学力といわれるこれらの能力・態度は、言葉のままでは分かりにくさ、指導の難しさがある。

持続可能な社会をつくるためには、いくつもの問題解決を図る必要がある。そこで、育成する能力を問題解決能力とする。これまで

1　出典元『我が国における「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」実施計画』（H18 年決定 H23 年改訂）

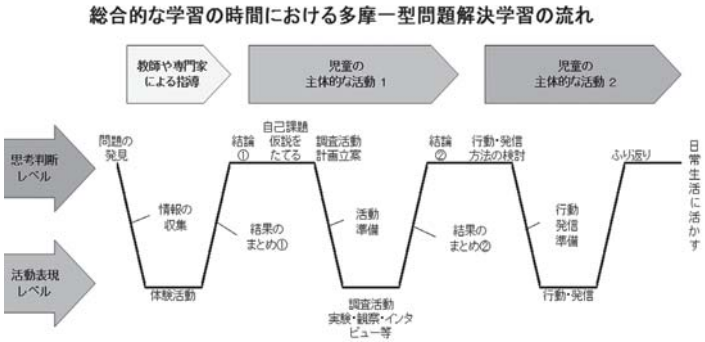
学校教育で重視されながら実践が十分でなかった問題解決学習のプロセスで指導し、思考したり話し合ったりする中で、能力・態度が育成されると考えると分かりやすい。このようなことから、小中学校で実践するESDで育む能力を、問題解決能力の●課題を把握する力●計画する力●調査・実践する力●結果をまとめる力●結果を発信する力とし、態度として、●協力する態度●活動に意欲的に取り組む態度●行動や生活に活かす態度とする。

ではユネスコスクールは、問題解決学習のプロセスにそった指導をしているのだろうか。アンケートでは問題解決能力についても、活動の内容に合わせて調査した。計画立案は低い結果であった。



4 具体的で分かりやすい指導方法

小中学校のESDでは、環境教育、国際理解教育や情報教育など地域と共に実践することが多い。しかし何をやるかではなく、どう教えるかを大切にしたい。そのための指導方法は、前述した問題解決学習のプロセスにある。私の勤務校である多摩市立多摩第一小学校では、問題解決学習の流れを以下のように設定している。児童にもこの図を示して、活動に見通しをもたせている。



【指導事例】

ゴーヤープロジェクト　小学校４年生　総合的な学習の時間　25時間

理科の授業で植物の発芽と成長にゴーヤーを使う。このゴーヤーを牛乳パックの植木鉢で育てた。ゴーヤーについて調べる中、グリーンカーテン用のゴーヤーが不足していることが分かった。そこで300鉢を市民に配布することにした。配布に向けて、計画を立て、実際に配布することを児童が主体的に取り組むように指導した。栽培、袋詰め、栽培方法の説明書、駅前での配布方法、人を集めるためにエイサーを踊る、看板を作るなどすべて児童が話し合って決定した。また同時に東日本大震災の義援金も集めることも話し合って決めた。配布は学区の駅前で実施し、30分ほどですべて手渡すことができた。義援金は気仙沼市に送った。「子供にこんなことができるとは思わなかった。」という感想の通り、活動を通して小学生が社会の役に立っていることは、児童に高い達成感をもたせることになり、様々な活動に主体的に取り組むよう変容した。

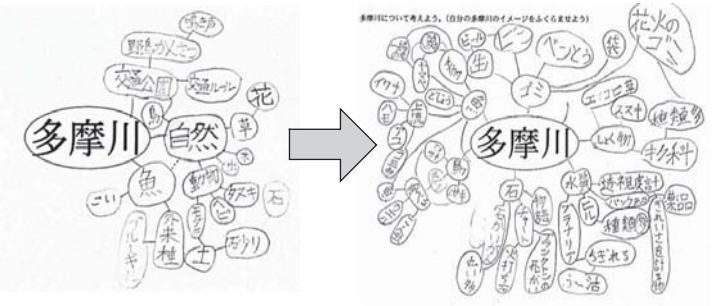
5 ESDの評価のあり方

問題解決能力は評価が難しいが、評価なくして工夫も改善もない。数値や記号での評価は適切ではないため、能力・態度の向上を見取るための方法を工夫する必要がある。問題解決能力をそれぞれの段階に分け

て、見取るようにして評価方法を工夫する。以下の３点は取り組みやすい。

❶毎回の活動後に、活動の振り返りカードに活動内容と気づいたことを記録する。

❷活動の最初と最後でイメージマップを書かせ、言葉の量や言葉のつながりの複雑さを比較する。課題をつかむ力や知識、事象の関係性への理解も評価する。右図は多摩川観察の前後のイメージマップ。



❸ポートフォリオ[2]を使った評価は重要である。活動で使ったプリントや資料、絵や作品から児童・生徒の変容を評価する。計画、調査の実施、 まとめ、発信の評価に有効である。ポートフォリオは、学習者自身に活動を振り返らせ、内容への理解が深めるのにも有効である。

2　ポートフォリオについては、84 頁にも記載あり

教師の意識変容と学校変容、地域変容

横浜市立永田台小学校校長
住田昌治

ESD は、素晴らしい教育ビジョンであり、すごい力を秘めている。その魅力は「変容」であり、持続可能な未来社会を構築する人づくりには、資質・能力の開発だけでなく、意識改革が欠かせない。講演や研修会で最終的によく聞かれる質問は、「ESD の教員研修はどのようにやっているのか」「教職員の意識を変えるためにはどうすればいいか」という内容である。学校における ESD 推進の成否は「先生のやる気次第」と捉えられているのである。

国の教育振興基本計画にも ESD を推進することは明記され、具体的方策にも示されている。もちろん学習指導要領にも盛り込まれ、ユネスコスクールのみならず、全ての学校で ESD に取り組むよう文部科学省からも実施計画が示された。それにも関わらず、ESD の認知度は低く、取り組む学校も限定的であるのは、その魅力である「変容」を明確にし、伝えてこなかったことも原因の一つと考えられる。

ESD でどのような成果や効果があったのか、ESD の魅力として、教師、学校、地域の変容を示し、持続不可能性が持続可能性になるように、一人一人が考え（いつでも常に）、行動を起こし、行動し続ける意志を育み、自分がつくりたい未来を描き、ESD の有るべき姿を示す必要がある。

そこで、ESD を実践することによってどのような変容があったか、第 6 回ユネスコスクール全国大会に参加した方々から聞いた。しっかり変容が語れる方は、ESD の魅力を実感している方である。

教師の意識変容

「授業を通して、生活を通してつながりを感じられるようになった。教科間のつながり、人とのつながり、地域とのつながりに、今まで気付いていなかったけれど意識できるようになった。そして、未熟な自分に気付き、もっと知りたいと思えるようになった。少なくとも自分は変容したと思う」

「教師が失敗することを恥じなくなった」
「『与えて　させる』指導から『聞いて　助けて　見守る』指導に転換することで、教師はファシリテーターに変わり、そのことで子どもが主体的で、大人の論理ではなく、子どもの論理で協同的に活動するようになってきた」
「ESD について話すことで自分が変われる。他人事ではなく、本気で考えている大人の方々と話せて、自分の視野の狭さを感じた。実際にもっともっと実践していきたいと思うようになった」
「ユネスコスクール間のネットワークにより異文化理解が進むと共に、情報発信の楽しさを感じている」
「大人が変わると子どもの姿に表れる。教員が ESD とは何か。自分に何ができるか。本気で考えるべきだと思った。大人は、物事を捉える視点が広がった」
「ESD の視点を取り入れたことで従来あった人権や環境などをつなげて考えられるようになった」
「職員間のネットワークの大切さが分かった」
「子どもも大人も仲良くなった。真剣に自分事として取り組むようになった」

学校の変容

「学校のいわゆる伝統的な古い枠組みが緩まった。みんながやっている枠組みを利用してつながるのではなく、もっと自由になれたらいい ESD になると思う」
「学校は、人と地域とつながる団結力が強まった。閉じたチームではなく、開かれたチームになった」「学校はきれいに明るくなった。きっと、ゴミを拾う、掃除をしっかりやるからだと思う」
「必ず味方がいる環境の学校になった」
「学校はいいところが増えた。おそらく、先生たちの学校を見る視点が増えたのだと思う。学校が変わったわけではなく、教師が変わったからだと思う」

持続可能な社会をつくるために
・変わる可能性をもっていると信じること。
・同じ時代に生きる大人と子どもの心の垣根を取り払うこと。
・自分以外の人にも物にも行事にも感謝、尊敬すること。
・他者とのつながりを意図的にもつこと。異業種、異年代、異文化。
・子どもの心を忘れないこと。素直に・・・喜び、感謝、反省、感動。
・他者理解。押し通さない、歩み寄る、受け入れる。
・自分ごととして考え、プラスに捉えること。
・我々が変化の担い手を育てるという意識をもつこと。
・「とにかくやってみよう！」の気もち。
・何でも言い合える雰囲気（困っていることや弱さの開示）
・永田台小学校から他の小学校へ異動した方が、新たな学校で火付け役となってESDをどんどん広げていく！

「学校がモノクロからカラーに変わったように見えて輝いている。子どもにも先生にも活気がみなぎっている。いつも花があるし、学校がきれいになった。関わっている人が明るく元気になった。どの先生もあいさつをよくしてくれるようになった。」
「学校の正門をくぐる時に、今まで以上に、活気が伝わってくる様な感覚を覚える。感性で感じる、これこそが本物の活気かも知れない。顔を合わせた全ての生徒さんが挨拶をしてくれるようになった。子どもたちが、真剣に話を聞くようになった。距離を置かれる先生方が多かったが、現在は、積極的に関わってくださる教職員が増えてきた。授業を、知識を伝える場という捉え方から、本気で生徒さん方の人としての成長を望む思い、姿勢、行為が、今まで以上に見えてきたのを感じる」

地域の変容

「教師・保護者・地域の大人が協力するようになった。みんな、自分のふるさとを思い出し、自分にできることを考え、実行しようとしている」
「学校の良さを多く知るようになり、学校を応援しようという気持ちが高まった。」
「地域によく出てくれるようになった。地域の課題について一緒に考えてくれるようになった。学校でやっていることがよく分かるようになった」
「子どもたちが地域のことを調べたり、地域の人とよく関わるようになり、地域で学校のことをよく話すようになった」
「学校が地域の課題に目を向け、課題解決に向けて取り組んでくれるようになり、地域住民に笑顔が増えている」
「学校の生き生きとした取組を見て、地域も刺激を受け、元気をもらい活性化してきた」

変容　実践例

❶横浜市南区は生ゴミ排出量が大変多いということを知って、調べていく中で、さらにこの地域の生ゴミ排出量が多いことが分かった。生ゴミを減らすために、どのような方法や工夫があるのか、学校・家庭・地域でアンケート調査をし、冊子にまとめて配ったり、区役所の方の協力を得ながら生ゴミを減らす方法を実際にやってみたりした。さらに、

その報告を地域に向けて行うことで、生ゴミワーストワンから脱出したいと考えた。このように地域の課題を学校で取り上げて学んでいくことで、地域への愛着や地域社会をよりよくしていこうとする思いをもつ。それは、持続可能な社会の担い手となるための大切な意志を養うことになる。地域の方々も、学校が地域の課題に取り組むことは大変歓迎されるし、学校が持続可能な地域のコアとして機能するようなビジョンをもつことができる。学校・家庭・地域の連携が文字通りの形として表れた。

❷南永田団地は、横浜市の中でも最も高齢化が進んでいる地域。「認知症になっても安心して暮らせるまちづくり」を区役所でも考えている。地域や区役所の方々の協力を得ながら、「認知症キッズサポーター講座」を受けた子どもたちは、認知症について知り、高齢者との関わり方、自分の将来の生き方について、関わってくれた人々と何度も話し合った。休みの日には、地域の講座へ出かけていって、寸劇をして見せたり、学校での取組を紹介したりした。介護に関して地域の多くの方々が支えてくれていることに気付き、そのことを家族に教えたり、自分が高齢者に対して理解を示したりする姿が見られるようになった。学校と地域が信頼関係を深めた実践である。

❸社会科で鎌倉幕府と武士について学んだ子どもたちは、鎌倉武士と自分たちとの命のつながりを感じ、さらに鎌倉について学びを深めたいと考えた。北条政子ゆかりの弘明寺や鎌倉街道が近くにあることから、ユネスコスクール支援大学間ネットワークで交流している玉川大学との協働プロジェクト「いざ鎌倉プロジェクト」を立ち上げ、学生と数回鎌倉でのフィールドワークを行った。鎌倉の町の人と関わったり、鎌倉市役所や横浜市役所の世界遺産推進担当の方との意見交換会をするなど、現場での精力的な課題解決学習を行い、鎌倉と周辺における歴史と文化について考えを深めることができた。その中で、大仏切り通しを清掃するボランティア団体と出会った子どもが、休みの日に仲間と共にボランティアに出かけるようになった。そして、さらに仲間を増やし学年全体での活動へと広げていった。社会科の学習から世界遺産学習へ、そして、仲間集めをし、環境保全へのボランティア活動へと行動化した。つながりを大切にした学習マインドが、子どもたちの中にしっかり息づいていることを実感できる取組だった。メディア等でも大きく取り上げられ、鎌倉の方々にも大変喜ばれた。地域の方々は、自分たちの活動の意義を見直し、さらに継続していく意欲が高まったということだった。世界遺産に登録されなくても日本の文化や遺産は、心ある人たちによって守られ、未来に残していくことができる。どこにいても自分の住む町の魅力を見つけ、好きになり、行動を起こすことは、持続可能な未来社会をつくっていくことにつながる。

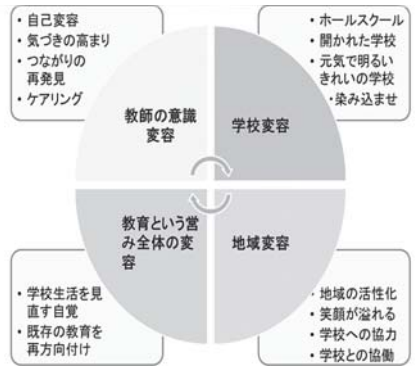
文化遺産登録応援　大仏切通で清掃活動

「世界の鎌倉へ」児童ら願い汗

南区・永田台小の6年生

（東京新聞　平成24年1月31日(火)）

ESDは「つながり」を大切にする教育スピリットである。教師は、つながりを意識することで、気づきが高くなり、今まで見えなかったつながりが見えてくる。自分の心が拓かれ、他者とコラボレーションすること、そのためにマネジメントすることを面倒くさがらず、主体的に行うようになった。その成果は、子どもの学びの拡がりと深まりとなって表れる。その姿を見た教師は喜びを感じ、さらにつながりを広げようとするようになる。そのような教師が学校内に増えていくことによって、学校は常に開かれ活性化が図れる。つながりは、地域にも積極的に向けられることになり、地域の課題にも気付き、



学校で取り上げて考えたり、学校と地域が協働して課題解決に向けた取組を行うようになる。学校の活性化が地域の活性化という形となって地域変容が実現する。ESD は、ダイナミックな教育ビジョンであり、自ずと学校・家庭・地域の好循環につながっていく。ESD は、すごい教育なのである。

ESD のおもしろさを実感している学校は、外部の様々な方に関わってもらうことによって、エネルギー問題・ゴミ問題・防災・高齢化問題・・・地域の課題に取り組むことが、地球の課題にもつながっていることに気付き、自分の生活や生き方そのものを見直し、未来社会の担い手としての自覚をもたせている。ESD は、子どもも大人も、同じ立場で考え、社会づくりについて意見交換できる学びでもある。教師および学校は、排他的でなく心を拓き、壁を取り払う必要がある。まず教師がサステイナビリティー（持続可能性）を理解することによって、より多くのサステイナブルな人を育てていくようになる。

自己変容と社会変容

Learnning to transform oneself and society

特に校長は自らが変化の担い手であることを自覚し、質の高いＥＳＤを推進するために、情熱を持って気付きを高め、常につながりを意識して、自ら変容することが求められる。

これまで、理論や方法論や出来栄えに終始し、ESD の魅力を目にすることが少なかった。確かに、今まで日本の学校でやってきた実践は素晴らしいものだったが、今までと同じ考えのもとでは持続不可能性は拡大する。子どもはどんなことを言ったり、したりするようになったのか。教師や学校はどのように変わったのか。これまで ESD の本質を理解し推進してきた学校は、初めて ESD に出合った人が、内発的・主体的に ESD に取り組んでみようと思うように、取組を通して「こんな変容が学校で見られた」「こんなに組織が活性化した」「先生が生き生きしてきた」「不登校の子どもが減ってきた」「いじめがなくなってきた」・・・そういった事例を ESD の魅力として積極的に伝えていくことを確認したい。

おまけ・・・社会変容

毎年、東京ビックサイトで行われるエコプロダクツ展。多くの企業ブースがきらびやかに立ち並ぶ中、

「こんにちは、少し話を聞いてもらっていいですか」「私は（私たちは）、こんなことに取り組み、それを通してこんなことを考えました。どう思われますか?」　通りかかった大人を呼び止め、自分の調べたことや考えていることを伝える。（永田台キャッチ方式）

大人は、子どもから元気をもらう。大人は、自分の生き方を振り返り、行動の後押しとなる。子どもにとっては社会との出会い。社会を変える子どもたち！

ESDと自己肯定感の向上

奈良教育大学　次世代教員養成センター　専任講師
中澤静男

2014 年 6 月に奈良教育大学で開催された第 24 回日本国際理解教育学会の「ESD と国際理解教育」をテーマとしたシンポジウムにおいて、ESD を推進して子どもにどのような変容があったのかという質問がありました。その際、シンポジストである浅井孝司岡山市 ESD 世界会議推進局長が一番にあげられたのは、自己肯定感が向上したということでした。ESD と自己肯定感の向上についての調査結果は今のところありませんが、多くの方が、文部科学省そして岡山市において長く ESD 推進に関わって来られた浅井氏と同じような感想をお持ちなのではないでしょうか。

自己肯定感とよく似た言葉に、自尊感情やセルフ・エスティームがありますが、ここでは、自分自身を好きだと感じ、価値ある存在だと感じる感覚を自己肯定感とし、自尊感情やセルフ・エスティームとの区別はつけません。教育心理学者である蘭千壽氏は、「子どもたちの高い自尊感情の形成のためには、彼らの自己概念の形成と変容を促すことが重要である。」[1]と指摘しています。ここで形成と変容を促される自己概念とは、自己に対してプラスイメージを持つということでしょう。そして、自己概念・自尊感情は、「同一視に基づく取り入れ、役割遂行やさまざまな経験による気づき、他者からの評価・承認による気づき、の主に3つの要因から形成される。」[2]と述べています。同一視による取り入れとは、他者と自分を同一であると考えることで、優越感や安定感を得ようとするもので、例えば自分が応援するチームが勝つことで、優越感を感じたりするものです。役割遂行やさまざまな経験による気づきとは、活動そのものから得られる感覚で、例えば努力したことに対する満足感、よい取り組みに従事できた喜びのようなものです。そして他者からの評価・承認による気づきとは、活動や結果に対する他者からの評価に基づくものです。

ここでは ESD と自己肯定感の向上をテーマに、先述しました蘭氏が指摘する自己概念・自尊感情に関する3つの形成要因にふれながら、次の3点から考察します。一つ目が ESD と自己概念の形成と変容の機会について、二つ目に ESD の学習内容と自己肯定感について、三つ目が ESD の学習方法と自己肯定感についてです。

ESD と自己概念の形成と変容の機会

一つ目の ESD と自己概念の形成と変容の機会についてですが、蘭氏は子どもの自己概念の形成・変容過程は、重要な他者から評価されることで、自分の能力をどのように自覚するようになるかに大きく影響されている[3]というブルックオーバーとエリックソンの研究成果を紹介するとともに、クーパースミスとフェルドマンの「教師は子どもたちに学業達成の機会を多く与え、彼らの経験を肯定的に解釈させることが重要である」[4]という言葉を引用しながら、子どもが自分の能力に対してプラスイメージを持つ上で、教員の果たす役割が大きいことを指摘しています。ただ、ここで述べられているのは、学校の教室という閉じられた空間での学習を前提とした意見だと思われます。しかし、ESD の学びは、教室だけで、あるいは学校だけでとどまるものではありません。ESD では文化遺産や自然景観といった地域の宝物を発見することで、地域を大切に思う気持ちや、次世代を担うものとしての当事者意識を養いながら、環境課題や過疎化、高齢化、人権問題など、地域と地球を串刺しにするような課題について探究することで、持続可能な地域社会の担い手を育んでいきます。そこではおのずから、保護者や地域住民、専門家といった多様な方々の協力を得ながら学習が進められることになります。つまり子どもは教員だけでなく、保護者や地域住民、専門家など、様々な人たちと出会うことができるということです。そして学習中には、協力していただいた方々から、子どもたちへ色々な言葉かけがあるでしょう。この多くの方々との出会いと、子どもの学習活動への評価・承認は、子どもの自己概念や自尊感情の形成に効果があると思われます。

1　蘭千壽「セルフ・エスティームの変容と教育指導」、遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編『セルフ・エスティームの心理学』、ナカニシヤ出版、1992 年、p.201
2　同上、p.200
3　蘭千壽「セルフ・エスティームの形成と学校の影響」、同書、p.179
4　蘭、前掲書、p.201

ESD の学習内容と自己肯定感

二つ目に ESD の学習内容と自己肯定感についてです。ESD の目標は、持続可能な社会づくりに積極的に関わっていこうという意欲と行動力を持つ人材の育成です。そこで想定される人材には、高効率な製品開発に取り組む技術者や環境保護や人権擁護を推進する政策を立案する政治家といった専門家もあるでしょうし、高効率な製品を購入したり、持続可能な社会づくりをうったえる政治家に投票したりといった、専門家を支える市民も含まれます。持続可能な社会づくりに参加・参画する態度を育成することには、持続可能な社会づくりを尊重する価値観を持つことと、その価値観に基づいて社会づくりに積極的に参加・参画しようとする意欲や態度を持つことが含まれます。

この積極的に参加・参画しようという意欲や態度が養われる場面を、学校の授業で考えてみましょう。現在、日本中の学校で毎日行われている授業スタイルの主流は一斉授業です。教員が黒板を背に立って話し、生徒は黒板の方を見て座って、教員の話を聞いて、ノートをとるというスタイルです。この授業スタイルの背景には、授業とは知識の伝達である、という考え方があります。確かに、知識を持つ教員から知識を持たない生徒への知識の伝達方法として、一斉授業は効率的で、優れた効果を発揮します。特に中学校や高等学校では、教員が一方的に解説し生徒は黙々とノートをとるといった授業をよく目にします。しかし、ESD においては、このような知識の伝達に偏重した一斉授業は成立しません。なぜなら壊れかけた地球の治し方は誰にもわかっておらず、教員もそれについて生徒に伝達すべき知識を持っていません。つまり正答がないためです。

学びについて研究する認知心理学者である佐伯胖氏は、日本語読み書き学級の授業実践を紹介ながら、授業とは、そもそもどういう意味を持つものであるかを次のように述べています。「こういう彼の学びを一言で言えば、「共同体の実践に参加した」という以外にない。「みんなの学び合いに、自分も、自分らしさを発揮しつつ、参加した」のである。彼自身、「なってよかった自分」になれたと同時に、末方学級に「よいもの」を遺し、末方学級全体が「よりよくなる」ことに参加、貢献した。」[5] つまり授業とは、自分一人が何かがわかったり、できたりするようになるためのものというよりは、みんながよりよくなるための協同的な営みであるということです。この佐伯氏の授業の捉え方は、ESD の授業の捉え方と同じであると言えるでしょう。佐伯氏の言葉を ESD の授業にあてはめてみると、授業は単なる知識の伝達ではなく、持続可能な社会づくりを目指そうという協同的な実践であり、そこに自分らしさを発揮しつつ参加し、自分自身が持続可能な社会づくりに関わる価値観や能力を獲得することで、なってよかった自分になれたと同時に、学級全体が持続可能な社会づくりの担い手になることに参加、貢献するという営みということになります。OECD は世界標準の学力であるキー・コンピテンシーを見い出すために、すべての国や地域で大切にされている価値観を抽出しました。その時に中核的価値とされたのが、民主主義、人権の尊重、および持続可能な開発であった[6]ことからもわかるように、ESD の学習内容は、現在だけでなく将来も含めてすべての人類にとって価値あるものです。そのような価値ある学習への参加は、蘭氏の述べる「役割遂行やさまざまな経験による気づき」を促し、自己肯定感の向上につながるものと思われます。

ESD の学習方法と自己肯定感

三つ目の ESD の学習方法と自己肯定感についてです。先ほども申しましたが、ESD では一斉授業は成り立ちません。教員も「先生」という殻を破って、持続可能な社会づくりを探求するという一市民という立場で、地域社会の持続可能性に関わる課題の発見、調査活動、調査結果を踏まえた協議、そして留保条件付きの課題解決へと至る一連の課題探究型の学習を、生徒と協力して遂行するという協同的な学びが求められます。授業スタイルとしては、応答的なグループディスカッションに基盤を置く、小集団協同学習となるでしょう。蘭氏は「小集団協同学習によって多くの学業達成の機会を経験することと、協力的相互作用によって学業達成・能力および対人関係の諸能力に関する肯定的自己概念を育てることになる。そして彼らはこれらの自己概念を育む。さらに彼らはこれらの自己概念を肯定的に受け入れることによって自尊感情が高まる。」[7] と

5　佐伯胖「文化的実践への参加としての学習」『学びへの誘い』佐伯胖・藤田英典・佐藤学、東京大学出版会、1995 年、p.21

6　ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク編著『キー・コンピテンシー ー国際標準の学力をめざしてー』立田慶裕監訳、明石書店、2006 年、p.105

7　蘭、「セルフ・エスティームの変容と教育指導」、p.209

述べていますが、これはすべての生徒に役割が明確に与えられるという少人数グループの学習環境が「役割遂行やさまざまな経験による気づき」を促すとともに、小集団であるがゆえに個々人の活動が互いに把握でき、それが相互の評価や承認の機会を多くするという意味で、「他者からの評価・承認による気づき」をも促進するということです。

以上見てきたように、ESD の学びはこれまでの授業と一線を画するものであり、その学習内容と学び方、そして地域社会を巻き込むという広がり方が、学習者の自己肯定感の向上を促します。2014 年 11 月 8 日に採択された「ESD 推進のためのユネスコスクール宣言（ユネスコスクール岡山宣言）」に「私たちは、日本の教育を変えていく原動力として ESD をこれからも進めていきます。」[8] という一文がありますが、この一文に、ESD を契機として、すべての授業の捉え直しが行われ、学習者主体の学びが展開されるようになることを期待します。

8　ユネスコスクール世界大会－第 6 回ユネスコスクール全国大会（岡山市）－参加者により採択「ESD 推進のためのユネスコスクール宣言（ユネスコスクール岡山宣言）」、2014 年 11 月 8 日、p.2

ユネスコスクールの学校間交流

宮城教育大学国際理解教育研究センター教授
市瀬智紀

ユネスコスクールは、そのグローバルなネットワークを活用して、世界中の学校と交流し、生徒や教員がお互いに情報や体験を分かち合うこと、そして、平和や人権、持続可能性の問題など地球規模の諸問題の解決に取り組むことを主旨とした学校です。

こうした、国際的な学校間交流を、DESD が始まる以前から先駆的に行ってきた実例としては、大阪のユネスコスクールを挙げることができます。大阪のユネスコスクールは、2001 年からネットワークへの加盟が広がり、平和の構築や持続可能な社会の実現といったユネスコの理念に基づく実践を行ってきました。

その成果は、2008 年の「アジア・北欧 7 か国 ESD 高校生国際会議」や、2011 年 8 月行われたアジア 4 カ国の小中高大生による「アジア / 太平洋 小中高大学生 ESD 国際ワークショップ」、そして、2013 年の「日韓中 ESD 高校生フォーラム 」「アジア太平洋 8 カ国高校生 ESD フォーラム」の開催へと発展していきました。

これらの実践では、「若者世代」自らが「未来」について考えることを大切にしており、DESD の最終年である本年は、高校生自身が運営し、高校生自らが成果を共有するという手法による「ユネスコスクール世界大会　Student(高校生) フォーラム」の開催を実現しました。フォーラムでは世界 32 カ国 40 チームの高校生が参集して「持続可能な発展と理想の未来を実現するために、ユネスコスクールの生徒として、私たちは何をすべきか」について討論し、「高校生フォーラム共同宣言」がとりまとめられました。

学校間交流といえば、この高校生フォーラムのような国境を超えた国際交流を代表として、学校が存立する学区内で行うもの、近隣の地域間で行われるものから、国内の離れた地域で行われるもの、海外と交流するものがあります。文部科学省・日本ユネスコ国内委員会は、平成 25

年２月〜３月にユネスコスクールを対象とした、アンケートを行っています（国内の ASPNet 加盟校 550 校のうち 466 校 84.7%が回答）。そこで本稿では、こうしたアンケートを参照しながら、ユネスコスクールの学校間交流について考察し、今後の展望について述べてみたいと思います。

1 学区、地域、国内における学校間交流

図１：ユネスコスクールの学校間交流（国内）

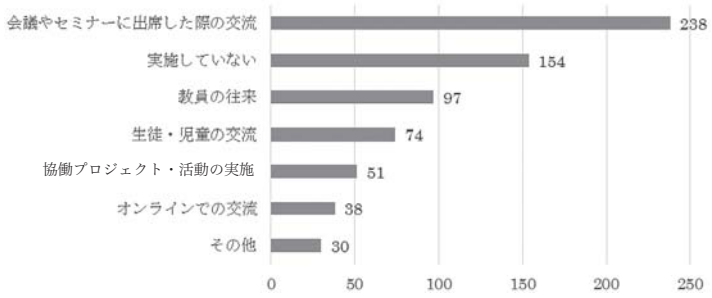


図1は、国内のユネスコスクールの学校間交流について質問したものです。アンケートの回答からわかることは、国内の学校間交流といっても「ESD に関係する研修会や勉強会での教員間の情報交流」というものが多く、教員の研修会での交流のほかは、「実施していない」としている場合も全体の 33%を占めています。

その中で、国内における学校間交流の自由記述を見てみると、市内・県内の幼稚園・保育所・小学校・中学校間で、児童生徒の交流を行っている事例が比較的多く、学級や学年を超えた児童生徒の直接的な交流が展開されています。離れた地域での交流になると、文書、手紙、新聞、DVD、ビデオレター、ホームページ、テレビ会議といった方法が中心になります。ただし、地域を超えた交流でも、修学旅行や宿泊を伴う体験学習などの際に、ユネスコスクール同士が連絡をとりあって、交流学習をしている例がみられます。このような交流学習は、特に、都市部のユネスコスクールと地域のユネスコスクールが交流するよい方法だと思われます。

交流の内容としては、学習成果や研究成果などの発表を通した交流が多くみられますが、そのトピックとしての「伝統芸能」や「和紙」「お米」などについての学習は、ユネスコの世界遺産や無形文化遺産とも関連づけられるほか、自然遺産や、希少生物、渡り鳥など、動植物の保護をテーマとした地域間交流も有意義な活動となります。

学校間交流を通して、体験的学習、プロジェクト型学習、問題解決型学習など多様な学習・教育方法を実現することができるだけでなく、児童生徒の興味関心や意欲、参加意識、協調性、リーダーシップ能力などを養うことができます。

2011 年３月 11 日の東日本大震災に際して、気仙沼市など被災地域のユネスコスクールを支援するために、多くの学校が支援に立ち上がりました。学校間の交流は３年以上たった今日まで続いています。地震、津波、集中豪雨、火山噴火など、自然災害はいつどこで起こるかわかりません。このような交流は、緊急に解決が必要な、持続可能な開発のための教育の価値の本質にかかわる交流であるということができるでしょう。

2 国境を超えた学校間交流

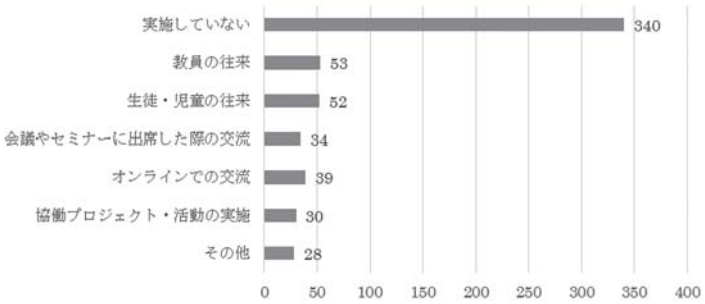
国境を越えた学校間交流は、３つのタイプに分けて考えることができると思います。一つは、高等学校などで姉妹校などがある場合、自治体レベルで海外と姉妹都市交流を行っている場合の交流の在り方です。このような場合には、ユネスコスクールが海外修学旅行や海外姉妹校交流を通じた生徒の交流を行っています。

二つ目は、「アートマイルプロジェクト」、「寺子屋プロジェクト」への参加や、リサイクル活動でエコキャップ換金し、お金や購入した学用品を途上国に送るといった活動に参加するなどして、途上国支援や国際交流を行っているケースです。このような交流では、必ずしも特定の学校同士や個々人が交流するのではありませんが、参加や運営のために、比較的大きな労力をかけることなく、国際的なプロジェクトに参画でき、地球的課題の解決と向き合うことができます。

三番目は、国際団体の活動フレームの中で、海外からの訪問団を学校に受け入れ、交流している例です。姉妹都市からの生徒受け入れ、「ESD

日米教員交流プログラム」視察受入れ、「韓国教職員日本招へいプログラム」[1]への参加、「JICA 研修員」による学校訪問団の受入れなどがそれにあたります。

図２：ユネスコスクールの学校間交流（国外）



一方、上掲の図２を見て分かるように、国際的な学校間交流を実施していない学校は、340 校に達し、回答した学校の 73％を占めています。学校が単独で海外の学校と交渉して、文通、電子メール、DVD レター、テレビ会議といった活動を展開することが、特に難しくなっています。その理由としては、教員、児童生徒の英語力、英語圏以外の国との交流することの難しさ、コンタクトの方法、交流のきっかけがないこと、オンラインでの交流等の技術的な課題や交通費等、予算などハード面での課題があげられています。

こうした中で、ASPUnivNet に参加する地域の大学が、交流先の選定や調整において成果を挙げている事例もみられます。地域の小中学校など個別の学校が、単独で国際交流を行うことは難しいので、地域の大学や、国際交流協会、NPO、NGO 団体などのコーディネートが求められています。

さて、世界のユネスコスクール間では、国境を越えたプロジェクトが盛んに行われています。例えば、バルト海沿岸諸国、デンマーク、エストニア、フィンランドなど 9 か国が参加する「バルト海プロジェクト」や、ラテンアメリカ、カリブ海諸国、インド洋、太平洋、アフリカその他 40 余国が参加する「サンド・ウオッチ・プロジェクト」が有名で、それらのプロジェクトは長期に継続し、たくさんの学校が参画しています。

1　国際連合大学の国際教育交流事業の一環として行われ公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施しています。

これらのフラッグシップ・プロジェクトでは、「課題を設定しそれを解決しようとしている。比較や観察、データ交換など科学的な方法がとられている。DESD,MDGs[2] など、国連のテーマと関連性の高いテーマが設定されている。カリキュラムや教材作りが行われている。広範囲な国や地域、組織とコミュニティの参画がある。」といった特徴がみられます。日本でも 3.11 の東日本大震災を受けて、防災教育におけるアジア太平洋地域のユネスコスクール交流を図る「みんなひとつ連帯と防災プロジェクト（Japan Solidarity Project）[3]がおこなれました。また、アジアの多くの地域の主食であり人々の生活に深く関連する Rice（お米）をテーマとして、アジアのユネスコスクールが、生物多様性や環境問題、伝統文化などについて相互に学ぶ「ESD　Rice プロジェクト[4]などが、現在進行中です。

このような世界のフラッグシップ・プロジェクトに代表される学校間の交流によって、国家や国境を越えた和解と相互理解、そして協働が進むことは、ユネスコスクールに最も期待されている役割であるといってよいでしょう。

2　ミレニアム開発目標：貧国の撲滅やジェンダー平等、環境の持続可能性など 2015 年まで に達成すべき 8 つの国際社会共通の目標。

3　ユネスコ・バンコク事務所と ACCU が国内の多くのユネスコスクール、宮城教育大学を始めとする大学等多くの団体の協力を得て実施しました。

4　ACCU がユネスコ事業として実施している国際協働プロジェクトで、宮城教育大学など ASPUnivNet も実施に協力し活動を広げています。

学校間交流と「ESD Riceプロジェクト」

神奈川県立有馬高等学校総括教諭
望月浩明
同教諭
半澤ゆかり

ユネスコスクールにおける学校間交流には二つのパターンが考えられます。

その1：小学校と高校、小学校と中学校などの異校種間交流 ･･･ **垂直的（縦方向）な交流**

その2：国内の学校と国外の学校間での交流または国内の他地域との交流 ･･･ **水平的（横方向）な交流**

1 学校間交流

その1の例として本校では「服の力プロジェクト」を実施するにあたり近隣の小学校に協力を仰いでいます。高校生と小学生の場合、年齢が離れているので一見、難しいように思えますが本校の高校生たちは小学生達に「なぜ子ども服をアフリカに送るのか」、「地図を使ってアフリカをどうわかりやすく説明するか」など、活動を人に伝えることの難しさや大切さを学んでいました。双方にとって（異年齢集団の）こうした体験は学ぶところが大きいものになると思います。

その２の例として 2014 年度に本校が参加している「ESD Rice プロジェクト」があります。これは日本、韓国、インドネシア、インド、フィリピン、タイの６カ国の小中高校が参加しアジア共通の食材である米について共同研究を行うもので、この協働学習を通じ持続可能な社会の形成について意見交換をしながら考え行動しようという試みです。これはユネスコのプロジェクトとして行われ、ユネスコ･アジア文化センター（ACCU）が事務局を担っています。本校は公募に応じ、プロジェクト校として選ばれました。2013 年 12 月の第１回ワークショップ（タイ）では欧州で学校間交流の先進的活動を行っている「バルト海プロジェクト」担当者のジマーマン氏も参加し、国際協働学習についての説明がありました。

その後、参加者は各国に戻り、メールや Skype[1] を利用しながら活動を進め、９月に第２回ワークショップ（インドネシア）に参加し現地の学校を訪問して生徒達と交流したり、今後の活動の継続などについて協議しました。

次に、その２の水平的な交流（国際協働学習）について ESD Rice プロジェクトを例にして説明していきます。

2 Eメールでの交流

３月に英語クラブの生徒たちが米に関するいくつかのテーマについて英文のフォトシートを作り、参加校にメールで送信しました。ただ、うまくメールが届かなかったりして情報の相互交換はあまり成果を上げられませんでした。メールの場合は添付するファイルが相手方で開けなかったり、メール自体がキャンセルされてしまったりして期待通りの成果が出ませんでした。

3 韓国ドンウォン高校訪問

夏休みにお互いの学校の ESD Rice プロジェクトの進行具合を報告するため韓国ドンウォン高校へ２名の生徒を派遣しました。７月にスカイプでお互いの学校の紹介などを行った後、８月に生徒・教員でドンウォン高校を訪問し、生徒達が実施してきた調査・研究などパワーポイントを使って紹介し合いました。また、ドンウォン高校の生徒たちの案内で有機農法を行っている稲作農家の訪問などを行いました。直接交流相手と話しをすることでお互いの活動をよりよく理解することができ、親交を深めることができました。

4 Skype による交流について

韓国のドンウォン高等学校、インドネシアの SMP　Amalina

1　インターネット電話サービス、Web カメラを使うことでビデオ通話も可能

Islamic、SMA　Negeri 10 Malang の三校と Skype を通じて交流しました。本校 CALL 教室にて英語コースの生徒を中心に、ESD Rice プロジェクトについての発表やそれに関する質問、コメント等を出し合いました。交流後に生徒たちは話が出来てとても嬉しかったと満面の笑みを浮かべていました。授業の合間の昼休みに、無料で、手軽に顔を合わせられるということで、ビデオ会議はとても国際交流を身近に感じることができる手段だと思います。

5 ESD Rice プロジェクト教員の学校訪問について

今年の 11 月 10 日に ESD Rice プロジェクトを一緒に進めてきた各国の先生方が本校を訪問しました。先生方には、特別講義ということで各学校のプロジェクトの進行状況について発表していただいたり、音楽の授業や外国人生徒向けの日本語の授業を参観していただいたりしました。昼休みには、プロジェクトに携わった生徒たちと交流会をしました。生徒たちは恥ずかしそうに自己紹介をしていましたが、もっとお話をしたいという思いから習った英語の表現を思い出して会話をつなげようと努力していました。

6 まとめ

ESD Rice プロジェクトでは水平的な交流活動として国際協働学習が実践されてきましたが、さらにこれを同じ国内で異校種の学校と協働学習を進めることができればお互いの生徒にとってたいへん有意義な体験になると思います。

世界各地域のユネスコスクールでは国を超えた協働プロジェクトを実施しています。こうしたプロジェクトを継続していくためには教師たちのネットワーク作りが重要になります。現在では Skype を始めさまざまな情報ツールが充実しており、それを活用し距離を克服することで今後、さらに国際協働学習を進めることが可能になると思います。

多様な地域の主体との連携における学校の役割

金沢大学　環境保全センター長・教授
鈴木克徳

地域においては地域の活性化や持続可能な地域社会づくりに関する様々な活動が行われており、従来から直接的な関係があると考えられた分野では、情報の交流や連携が図られてきた。しかしながら、ESD の推進という観点からは、地域の様々な主体（ステークホルダー）により多様な ESD 関連活動が行われてきたにも拘らず、それらの間の情報・意見交換は驚くほど行われてこなかった。

学校教育の世界においても、例えば同じ校種である近隣の小学校間でも必ずしも活発な情報・経験の交流が行われていない場合も多く、校種が異なる小学校と中学校の間や中学校と高等学校の間での交流も近年まではほとんど行われていなかった。社会教育の分野においても、博物館や動物園、植物園などの専門機関や市町村の環境部局、教育委員会の生涯学習部局、公民館、NPO／NGO、企業の CSR 活動などで様々な ESD 関連活動が行われていたが、それらは個別ばらばらに行われることが多く、相互の連携・協力や協働が行われることはまれであった。学校教育とそれらの社会教育活動との関連も、一部出前講座などを除けば希薄な場合が多かった。

ESD が進展するにつれ、それらの活動を相互につなぐようなマルチステークホルダーのネットワーク／協働の機会創出のためのプラットフォームづくりが志向されるようになり、ESD に関する地域拠点（RCE）や地域の ESD コンソーシアム造りが進められた。学校は、公民館と並んで地域における重要な活動拠点であることから、それらの仕組みにおいては、学校における ESD の推進が重要事項として取り上げられてきた。学校教育と地域とのつながりを模索し、学校教育に対する様々な地域の主体による貢献を検討することにより、地域と学校とのつながりが図られてきたといえよう。これまでに顕著にみられる取組みとしては、総合的な

学習の時間等のカリキュラムにおいて地域社会について学べるよう、学校側から地域の人々にアプローチするケースがある。例えば街の商店や寺社等の施設を訪問したり、あるいは地域の老人福祉施設を訪問して施設入居者との交流を図ったりしている。また、地域のごみ拾いや清掃活動などを通じて地域社会への貢献を図るケースも見られる。学校の側からは、児童生徒のより良い学びに向け、地域の様々な主体の協力を得るよう努めていると言えよう。

他方、一部の地域では、積極的に地域の人々が学校のカリキュラム作成に貢献し、学校教員とともにカリキュラム作りをしているケースもみられる。学校教育は、地域の様々な主体にとって利害関係なく貢献できる共通の土台を提供していると考えることもできる。

学校は、公民館と並んで地域の重要施設であることから、地域の様々な活動に際し、学校、学校教員、学校の児童生徒が果たし得る役割は大きい。学校における活発な活動は、地域社会を活性化し、将来への希望を生み出す源になり得る。

地域の活性化という観点からはまた、従来のパターンにとらわれない若者たちの柔軟で新しい発想により、これまで見えていなかった地域の良さが再発見され、新たなビジネス・チャンスの創出につながるケースもある。例えば、愛知県豊田東高校では、地域の活性化に向けた地域ブランドの開発を行い、米粉や地域特産の梨を活用した地域ブランドの開発を行った。

東日本大震災のような災害時には、多くの学校は地域拠点として大変重要な役割を担った。災害直後の避難場所として、その後の仮設住宅の建設場所として、さらには復旧、復興に向けた議論のための場を提供するプラットフォームとしてなど、様々な機能を果たしたことは記憶に新しい。東日本大震災は大きな被害の中にあって学校が地域においていかに重要な役割を果たしているか、果たし得るかを我々に再認識させてくれた重要な出来事であったと考えることもできるだろう。

地域連携
～Ｆ級グルメ甲子園～

地域ブランド開発
米粉を使った商品開発

豊田東高校の地域貢献～米粉を使った地域ブランドの開発

気仙沼市～自治会と連携した避難訓練［気仙沼市教育委員会提供］

震災復興とESD

日本ユネスコ国内委員会委員
宮城教育大学協力研究員
及川幸彦

1 はじめに

災害時においては、環境・経済・社会・文化的な「持続不可能性」が複合的にしかも極限的な形で現出する。その危機的状況で「持続可能な開発のための教育（ESD）」とユネスコスクールの取組が、危機管理や防災・減災、そして復旧・復興過程でどのように機能し貢献するのか。2011年3月11日に発生した「東日本大震災」を事例に、ESDの視点ら考察する。これらは、「国連・持続可能な開発のための教育の10年」（DESD）の最終年を迎えるにあたり、日本のESDの成果の一つとして世界に向けて発信されるべき証左である。

2 災害時における危機管理及び防災・復興とESDの親和性（Synergy）

国の教育振興基本計画に記述にあるように、ESDは、新教育基本法の理念と軌を一にするものであり、子供たちに「生きる力」を育み、未来の担い手として育成する重要な教育理念である。そして、これは、東日本大震災においても、震災直後の危機管理や学校再開等の教育復興でも確かに機能したといえる。ESDと危機管理や防災、復興との関連性を考えるとき、次の3つの視点が上げられる。1つはESDの方向性と防災教育の親和性（Synergy）であり、2つめは、ESDが、災害時の危機管理（DRM）や防災・減災（DRR）、復旧・復興にどのように機能するかという点である。そして、3つめは、ESDで育まれる能力・態度が、震災を乗り越える復興への力（Resilience）となるということである。

ESDは、批判的思考やシステム思考、そして、コミュニケーション能力や情報収集・分析力、さらには、意志決定し行動する能力を育む。これらの力は、災害時の危機的な状況においては必要不可欠なものである。今回の東日本大震災においても、各学校は、これらの能力を最大限に活用し困難に立ち向かった。実際、子供たちも、これまでの学習経験を生かし、自分たちができることに精一杯取り組み、地域の復旧に貢献したのである。

また、ESDは、コミュニティーや他地域、関係機関との連携と協働のもとで進められる。これらのESDの絆は、この度の震災でもそれぞれのコミュニティーにおいて、避難行動や避難所経営などの面で効果的に機能した。その中で、地域に根ざし、地域と連携してESDを推進してきた気仙沼市の各学校は、この危機的状況においても地域住民と連携しながら防災や避難の拠点として役割を担ったのである。

防災教育の枠組みを考えるとき、防災教育には「自助」、「共助」、「公助」の3つの段階があると言われる。しかし、東日本大震災では、自助、共助は、ある程度機能したものの、それだけでは長い期間持続しなかった。一方、公助は、広範囲が甚大に被災したため、支援に時間がかかり、それが届かない地域も生まれてきた。その地域、時間の隙間を埋めるための新たな役割を担ったのがNPO、NGOであり、多様な主体や機関のネットワークによる新しい支援であった。気仙沼市教育委員会は、これを「N助」と表現している。

3 ESDの視点からの防災教育の充実・発展

UNESCOは、DESDの後半年で取り組むべき優先事項（Key Action Themes）として、①気候変動（Climate Change）、②生物多様性（Biodiversity）、③防災・減災教育（Disaster Risk Reduction and Preparedness）の3つを掲げている。このことからも防災・減災教育がESDの中でも重要な視点であることは疑う余地はない。しかし、防災・減災だけで、ESDの学びが成り立つ、あるいは完結するわけでなく、上記の3つのアプローチを含めたESDの各要素が連関した学びが構成されてはじめて、有効かつ実践的なESD防災が推進できる。

この意味からも、上記の3つのプライオリティーを連関・統合した形

で防災・減災教育のプロセスを考え、プログラムを開発する必要がある。その開発には、表1にあるように、段階と目的、育成する能力・態度、取り組む内容と ESD の要素との関連を整理して、防災教育を ESD の学びのプロセスに配置していく必要があると考える。(表 1)

表 1 ESD の視点からの防災教育のプロセス

段階	第１段階 気候変動と 災害発生の仕組	第２段階 気候変動と災害の 社会や環境への影響	第３段階 気候変動と災害リスク 軽減への対応と準備	第４段階 被災からの 段階復旧・復興
能力	知識・理解 Knowledge & Awareness for Mechanism	影響・因果関係 Recognition of Influence & Relation	備えと実践 Response & Preparedness for Mitigation	創造と協働 Creativity & Collaboration for Recovery
内容	気候変動や災害の種類や発生のメカニズムを科学的・客観的に理解する	気候変動と災害が人間生活や生物多様性にどのような影響を与えるかを認識する	気候変動がもたらす災害のリスクを軽減するための対応や準備の仕方を理解し実践する	災害による被災からの創造的な復興に向けたプロセスや視点、貢献のあり方を学ぶ
ESD	科学的な仕組 社会的な要因 経済的な要因	生物多様性への影響 社会的影響 文化的影響	インフラの整備 組織力の向上 知恵とスキル	経済的な復興 文化的な復興 精神的な復興

防災教育の充実に向けては、学校教育においても組織的に取り組んでいくことが重要であるが、そのためには、体系的かつ実践的な防災教育の学習プログラムの構築が必要である。その際には ESD の２つのカリキュラム開発手法が有効である。 1つは、既存の各教科・領域の学習内容に内在する防災に関する内容（関連学習事項）を抽出し、それらを連携させて防災を意識した学習を進める手法（Infusion Approach）である。これは、既存のカリキュラムの枠組みの中で、各教科・領域を中心に防災教育を進めようとするものであるが、防災教育としては、内容的にも系統的・体系的にも不十分であることは否めない。

それを補うもう1つの手法は、児童生徒の発達段階と教科・領域等活動場面の相互連関を考慮し、防災教育のプロセスや内容をもとに必要な防災学習のコンテンツを開発・配置して、総合的な学習や特別活動を中心に防災学習プログラムを統合的･総合的に再構築する手法（Integrated Approach）である。気仙沼市教育委員会では、市教育研究員の研究を通じて、震災の教訓や科学的な知見を活かし、ESD の視点から発達段階に応じて各教科、領域等の活動場面で実践すべき防災学習を組織した「防災学習マトリックス」を開発し、防災教育カリキュラムの体系化を図るとともに、それに位置付ける個々の学習内容の実践例を「防災学習シート」として提案することで防災教育の充実・発展を図っている（図1）。各学校では、この防災マトリックスをもとに、児童生徒の発達段階や各校の教育課程の状況を踏まえ、防災学習シートを選択し、既存の教科領域と組み合わせて防災学習の探求的なストーリーを構築し、防災を ESD の学びとして展開する試みを行っている。

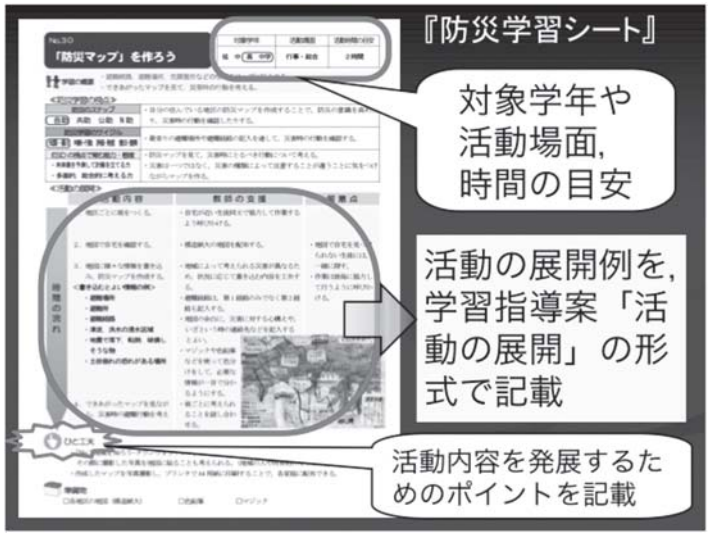


図 1 防災学習シート（気仙沼市教育委員会作成）

4 ESD を基本理念とした復興教育の展開

災害からの復旧・復興へのプロセスにおいても、東日本大震災の教訓を踏まえ、ESD を基本理念に据えて、次の視点から創造的な「復興教育」に取り組んでいく必要がある。

❶自然との共生をめざす教育

東日本大震災では、地震と津波という自然の驚異にさらされ、甚大な被害を受けた。しかし、豊かな自然に抱かれ、自然の恵みを享受して発展してきた私たちは、やはり自然と共生した暮らしや街づくりを志向していかなければならない。そして、その実現に向けては、ESD/ユネスコスクールの活動で、先進的に実践を重ねてきた環境教育や食教育、ふるさと

教育等を基軸とするESDが、今後も重要な役割を担うものと期待される。

❷ふるさとの心を受け継ぐ教育

この度の大震災の津波や火災によって、被災地では、環境や経済的側面だけではなく、人的・物的な被害やコミュニティーの崩壊により貴重な文化財や伝統芸能等、これまでの文化の継承が危機に瀕している。復興の担い手を育成するという観点においては、未来を担う子供たちに地域への誇りや愛着を醸成していく必要がある。そのためにも、震災で被害を受けた地域の伝統や文化の再生につとめ、ふるさとの遺産を大事にしたESDを推進していくことで、一人一人のアイデンティティーを確立していくことが期待されている。

❸地域や国境を越えた学びの共有

震災直後から被災地は全国各地、世界各国からの数多くの支援に支えられ、多くの市民は、自分自身や地域と他地域や他国がつながっているとの認識を新たにした。これまでESD/ユネスコスクールは、その取組を通じて日本や世界のユネスコスクールやRCE[1]などのESDの推進拠点と交流し、ネットワークを構築して、「グローバルな学びの場」（Global Learning Space）の創造に努めてきた。今回の震災を契機に、その復興に向けて今後より一層広い視野で世界との絆を強めながらに歩んでいかなければならない。そのためにも、地域や国を越えて学びを共有する場面を設定して、子供たちにコミュニケーション能力や国際的な視野を育んでいく必要がある。

❹未来をデザイン（想像・創造）する力の育成

復興教育を進める際には、復興を担う子供たちに自分たちや地域の未来をデザインする力を育成することが大切である。そのために未来を「想像」し、「創造」するような体験的活動や交流活動、ワークショップ等の実践的な学びの場が必要である。このような学びを通じて被災した困難な状況の中でも、子どもたち一人一人が、「折れないしなやかな心」、すなわち、「レジリエンス」を高め、未来向かって夢や希望を抱くことができるような教育活動を実現できるよう力を注いでいかなければならない。

1　Regional Centres of Expertise on Education for Sustainable Development
持続可能な開発のための教育に関する地域の拠点

❺結びにかえて〜東日本震災を乗り越えるためのESDの絆

今回の東日本大震災では、コミュニティーと学校がうまく連携しているところは、避難行動やその後の避難所運営、そして、地域の復旧に向けて高いポテンシャルを持っていた。しがたって、ESDを推進することで両者の良好な関係を醸成することは、防災や復興には極めて重要である。一方、海外とのグローバルなネットワークも復興に向けて大きな力となってきた。ESDの推進によって、ASPnet[2]やRCEを通じて絆を強めた世界中の学校や、自治体、国際機関から数多くの支援と励まし、そして様々な学びや交流の機会を得てきた。

今後は、これらのESDによって築かれたグローカル[3]な絆によって、復興を担う次世代の育成を視野に入れ、学校や地域の再生と創造に向けた歩みを進めていかなければならない。

2　UNESCO Associated School Project Networkのこと。「ユネスコスクール」はこのネットワークに加盟している学校のこと。

3　「グローバル」と「ローカル」を合わせた造語

ESDと教員養成

奈良教育大学　副学長（国際交流・地域連携担当）
加藤久雄

「国連 ESD の 10 年（DESD）」の間（2005 年～ 2014 年）、ESD の推進にユネスコスクールがその役割を果たしてきました。ESD を推進させるためには、ユネスコスクールの絶対数を増やすことから始めようという考え方でもありました。2008 年、2009 年に、「幼稚園教育要領」「小学校学習指導要領」「中学校学習指導要領」「高等学校学習指導要領」が改訂されましたが、そこには、ユネスコ国内委員会がＨＰで示しているように、「持続可能な社会の構築の観点」を読みとることができます。このことは、幼小中高の先生には、ESD を理解し ESD を実践する力量も求められていることを意味します。一方、ユネスコの「グローバル・アクション・プログラム」（2014 年）には、「教育者（ESD を実践する教育者の育成）」の項で「ノンフォーマル及びインフォーマルな教育の教員及びファシリテーターと同様、就学前教育・初等中等教育の教員養成及び現職教員研修に ESD を取り入れること。」（文部科学省・環境省仮訳）が謳われています。この両者は、ちょうど紙の表と裏の関係になっています。教育を学ぶ側から言えば、幼小中高の教員は、ESD を実践することのできる能力についても身につけなければならないことになり、教員養成の側から言えば、何らかの形で ESD を実践する能力について養成しなければならないということになります。

ところで、様々な整理の仕方がありますが、ESD の学びで育む能力は、＜体系的な思考力（問題や現象の背景の理解・多面的かつ総合的なものの見方）＞＜コミュニケーション能力＞＜問題解決能力＞＜グローバルな思考力＞＜データや情報の分析能力＞＜リーダーシップ力＞＜代替案の思考力（critical thinking）＞＜自分で感じ、考える力＞＜問題の本質を見抜く力＞＜他者と協力して物事を進める力＞＜持続可能な社会づくりのための考え方（人間の尊重・多様性の尊重・非排他性・機会均等・環境の尊重）＞などであると言われています。どれも、今日の学校教育において取り組まれているものばかりです。また、ESD の学びの特質として、「問題解決能力や参加する態度の育成」「実践・体験・体感を通しての探究」「自発的な行動の引き出し」があげられますが、この学びの在り方は、今日の学校教育においてはさらに推し進めたい部分です。また、何よりも、学びの目標・達成に、「行動の変革」ということが重視されます。知識の理解にとどまるのではなく、自らの行動の変革が求められる教育が ESD であります。これらは、アクティブ・ラーニングの考え方とも重なります。

このような教育を実践する力を育むことを、大学等における教員養成の段階でどのように行ったら良いかについては大きな課題です。教師を目指し大学に入学するためには、知識理解の学びが不可欠ですし、「行動の変革」を目標にする学びの体験は、必ずしも豊かとは言えないからです。2007 年にユネスコスクールとなった奈良教育大学は、「ユネスコスクール推奨授業科目」を設定し、また、次世代教員養成センターには ESD・課題探求教育部門を設け、ESD に取り組んでいます。ユネスコクラブの学生も積極的に活動しています。また、「グローバル人材の育成に向けたＥＳＤの推進事業」（平成 26 年度ユネスコ活動費補助金）のプロジェクトも動いています。また、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）に加盟し、ユネスコスクールの加盟支援、活動支援を行ってきました。そして、また、何より教員養成大学であります。

そこで考えられるのが、ESD に取り組むユネスコスクールである教員養成大学においては、教員養成の教職課程そのものの中に、ESD の要素を内包させてはどうかということです。先に述べた ESD の学びの特質を重視する教職課程の構築、ホール・スクール・アプローチの発想です。ESD についての授業の新設に加え、既に展開されている授業での学びを ESD の学びの特質を活かした学びに変革させることが、グローバル・アクション・プログラムに示された「ESD を実践する教育者の育成」に対する回答のひとつではないかと考えます。そこには、ESD に関する個々の研修では、育むことのできないトータルな実践力の養成があり、一過性のものに終わらせてしまわない ESD の実践者の育成があります。

例えば、教員免許状取得上、教科に関する科目に分類される「国語学概説」において語彙や意味の基礎概念を学ぶ際、次のように「母」と「お母さん」、「父」と「お父さん」の違いについて考えてみてはどうでしょ

うか。国語辞典を用いて、「母：両親のうち女の親」、「お母さん：母親を親しんでいう語」という違いを理解することに加え、実例や内省によって日本語を観察・分析し、その違いを考えようとする方法です。このような観察や内省は、ESD でいう「現場主義（使用の場面を考える）」「当事者意識（自らの言語使用の問題）」に通じるものであり、うまくいけば、「お母さん、ちょっと、来てください。」とは言えても、「母、ちょっと、来てください。」とは言えないことを＜発見＞する学びが生まれるかもしれません。もし、そのことが自ずと生じないのであれば、それをファシリテートすることが重要で、答えを述べ説明することを急いでならないと考えます。そのような学びには発展性があり、「母：お母さん」「父：お父さん」「姉：お姉さん」「兄：お兄さん」が並行的に存在すること、しかし、「妹：Aさん」「弟：Bさん」の「Aさん」「Bさん」に当たる語が存在しないことの発見につながる可能性を秘めています。そこには、「学び続ける・学ぶ喜び」が生まれます。さらには、「おかん」「おやじ」「おふくろ」などの語に観察の目が向かうかもしれません。このような学びの特質を尊重したいと考えます。このような学びが ESD の実践者の育成につながるのではないでしょうか。また、次のような図示（図1）を試みるならば、いろいろな議論が教室で生じるかと思われます。また、英語の「brother」「sister」、スペイン語の「hermano mayor（兄）」「hermano menor（弟）」「hermana mayor（姉）」「hermana menor（妹）」などの図示を試みれば、様々な議論が生まれると思われます。韓国語や中国語はどうなっているのだろうかと考え始める者も生まれるかもしれません。グローバルな視点の誕生です。ポスト DESD（国連 ESD の 10 年）においては、さらにこのような ESD の学びの特質を内包する授業の展開による教員養成が望まれます。それらを体系的に構造化し、（図 2）に示すような「座学」「実習」「交流」を含めた「ESD 特色プログラム」といったトータルな「ESD を実践する教育者の育成」の実現が、ESD に関する「グローバル・アクション・プログラム（GAP）」に対するユネスコスクールである教員養成大学のひとつの答（行動の変革）であり、ESD の実践ではないかと考えています。

図1　兄弟姉妹の関係

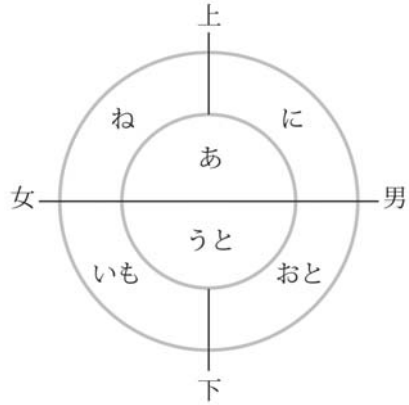


図2　ESDを実践する教育者の育成特色プログラム

学生 / 現職教員		学生・院生			現職教員
プログラム		スタートアッププログラム	プラクティスプログラム	グローバルプログラム	ESD研修
テーマ	実施形態				
ESD（持続発展教育）基礎論	科目	必修	必修	必修	必修
学習指導要領とESD		必修	必修	必修	必修
環境教育とESD	科目	1科目以上を選択	1科目以上を選択	1科目以上を選択	
世界遺産・文化遺産学習とESD					
学びのファシリティ力	科目		1科目以上を選択	1科目以上を選択	1科目以上を選択
防災教育と学校安全					
ICTを用いた学校間交流					
ESDキャンプ	テトラモデル	1つ以上に参加	1つ以上に参加	1つ以上に参加	1つ以上に参加
ESD教材開発セミナー					
ESD連続公開講座					
ESD現地実習（被災地支援）	実習		1科目以上を選択		
ESD現地実習（ボランティア）					
ESD現地実習（教育支援）					
ユネスコスクール交流活動（海外）	交流			必修	
ユネスコスクール交流活動（地域）			選択		
ユネスコスクール交流活動（学校）					
ESD先進地視察	研修				1つ以上に参加
校内研修プログラム					

注：テトラモデルは、学生・院生（修士・教職大学院）・現職教員が参加するモデル

世代間の学びの喜び

沖縄科学技術大学院大学理事長補佐
（岡山市 ESD世界会議推進局　前局長）
浅井孝司

持続可能な社会を築くには、一世代だけでは無理なことは誰にでもわかります。世代を超えた取り組みが必要であり、ある世代から次の世代へと引き継いでいかなければなりません。ESD では、そのために世代間交流を重視しています。

現代社会、とりわけ日本のように核家族化が進んだ社会では、世代間交流を進めることは、それを意図した計画的な試みがなければ容易にはできません。我が国では、寿命が延びることによって、高齢者の単身世帯も増えてきています。また、一人っ子も増えており、夫婦そろって働いている世帯も増えてきていることから、家庭内での親子の対話が減ってきています。そうした状況では、家庭内でさえ世代間交流が行われにくくなっています。

学校生活を見てみると、普段はクラス単位で動きますが、クラブ活動などは学年を越えた交流ができます。それでも自分よりも一、二の年齢差の生徒とのつきあいが普通でしょう。ESD を推進している学校などでは、学校間の交流を進めているところも多くあります。その場合、小学校と中学校、小学校と高等学校といった繋がりによる交流を意図的に行っているところがあります。子供たちにとって、自分と歳の離れた生徒とのつきあいは、普段行動をともにしている同級生とはまた違った楽しさや面白さがあり、とても新鮮で、自ずと確かな学びになっているようです。お兄さんやお姉さんとの付き合い、弟や妹との付き合いができることに喜びを発見することにもなるでしょう。

2014 年 11 月、岡山市で開催されたユネスコスクール世界大会に参加するために来日したルーマニアの教員と生徒たちとともに、岡山学芸館高校の事前交流会に参加しました。この時、ちょうど学芸館高校が恒例としている隣接の西大寺小学校への出前授業があり、ルーマニアの生徒たちとも一緒にその授業に出かけました。高校1、２年生の４名でチームをつくり、小学校６年生のクラスを訪問し、高校生と小学生とが交流していました。高校生たちが、普段の授業にはない貨幣経済のしくみを金融・投資ゲームを用いて、小学生に教えていたのです。小学生たちがどこまで理解できたかはわかりませんが、双方にとってとても楽しい時間になったのではないかと感じました。また、小学校で稲作実習を行う学校もよくありますが、農家の方々に加えて、農業高校の生徒たちが小学生を指導する風景も見られます。小学生にとって、大人から教わるよりは、お兄さん、お姉さんから指導してもらう方が緊張もせず、和やかに学ぶことができるという感じがします。

学校間だけの取り組みだけでは、年齢差にも限度があり、幅の広い交流といっても限界がありますが、そこに生活の場である地域単位の取り組みが加われば、より多くの世代間交流が可能になります。岡山市で行われている公民館を中心とした ESD 活動にその例をみることができます。

京山公民館では、年に２回、春と秋に「環境てんけん」という事業を実施しています。住民たちが、自分たちの住む地域の川の汚染濃度の測定や生き物の調査、大気汚染測定や騒音測定などを行い、環境がどう変化しているかをモニタリングしているのです。一日がかりの調査ですが、地域の高齢者から社会人、大学生、地元の高校生、小・中学生と実に多くの世代が集まり、行動をともにしているのです。共同作業を行うことにより、世代を超えた交流が生まれ、自然に多くの会話が交わされます。こうしたことは、一昔前まではごく普通に見ることができたのかもしれません。

地域における祭りなどの年中行事に高齢者から子供まで多くの方が参

加することも世代間交流の重要な場となります。こうした場で世代間交流が行われることにより、その地域の伝統なり文化なりが引き継がれていくのでしょう。次世代の人々が豊かな生活を送ることができるようにと考えるには、やはり、実際に互いに触れ合うことが必要です。この触れ合いによって私たちは真に次世代のことを考えることができるのでしょう。ESD は地球全体のことを考えなければなりませんが、日本人にとっては、自分の住む地域の持続可能性も真剣に考えなければならない時期が来ており、国民一人ひとりが意識する必要があることなのだと思います。

ESDを持続的にすすめる仕組み－学校における視点から

金沢大学　環境保全センター長・教授
鈴木克徳

学校において ESD を持続的に進めるためにはいくつかの基本的な条件がある。我が国（日本）においては、過去数多くの優れた環境教育・ESD の実践事例が見られたが、その多くは担当教員が異動することにより消滅した。その経験から、ESD を持続的に進めるためには、以下の条件を満たすことが重要である。

- 個別の教員がある特定の学年の特定の教科・総合学習で ESD を実践するだけでなく、学校全体として、すべての学年のすべての関連教科に ESD を組み込むこと
- 地域の人々と連携・協力することにより、地域の人々にも ESD の重要性を認識してもらうとともに、担当教員が変わっても ESD が持続するよう地域からの支援を得ること
- ESD 推進に関する他校との情報、経験の交流

学校全体としての取り組み

学校において ESD を継続的に実施するためには、学校全体として ESD に取り組むこと（機関包括型アプローチ）が重要である。近年のユネスコスクールでは、機関包括型アプローチを実践するために、学校教育目標に ESD を位置づけたり、ユネスコスクールへの参加に際して校内のすべての教員を対象とする ESD 研修を実施し、すべての教員が ESD に対する理解を一定程度以上得るような努力がなされる傾向がある。また、制度的に教務主任の下に ESD 主任を置き、各学年におけるＥＳＤの実施を担保するとともに、学年間の調整を図る学校も増えている。ESD 主任はまた、ESD に関する校内研究の推進を図る役も兼ねている。

校内のすべての教員に ESD を普及させるための手段として、まず ESD カレンダーを作成することにより、今までに行ってきた自らの授業

の中に多くのESD的な内容が含まれていることを認識させるアプローチが多くとられている。

学校の教員は数年単位で異動することから、教員の異動があった際の継続性の担保が重要である。学内的には、ESDに係る単元計画等のファイル化等を通じて、新たに担当することとなる教員に対しても、どのような形でESD授業が行われていたかが明らかになり、ゼロからの再出発にならないようにするための仕組みづくりが重要となる。また、全国的には、他地域を含む様々な類似事例が容易に検索できるようなシステムを構築することが、ESDの持続的な実施という観点からも極めて重要である。

すべての教員がESDに対する一定の理解を示し、すべての学年の様々な授業や課外活動にESDが組み込まれること、そのための仕組みを制度的に構築することが、ESDを持続的にすすめるための学内措置と言えよう。

地域との連携・協力、地域からの支援

教員の異動があった際の継続性の担保という観点からは、地域との連携・協力、地域からの支援も学内措置と並んで重要である。例えば、地域学習として学区内の名所・旧跡や特徴的な店、介護施設等を訪問したり、関係する人たちにゲストティーチャーとしてお話をしていただいたりする場合には、地域の人たちによる力強い協力・支援活動が行われており、彼らの理解が得られない限り、容易に中止等の措置は取れなくなる場合が多い。地域の人々は、中止せざるを得ないと考えるにいたった事情を理解すれば、その解消に向けて人的、資金的な側面を含め、様々な貢献をしてくれる。

このように、地域との連携・協力はESDを持続的に進めるとの観点からも極めて重要であるが、多忙な教員にとって、現実に地域との連携・協力を進めることはなかなか容易ではない。そのためのつなぎ役を務めるのが、いわゆるESDコーディネーターである。学校の教頭や教務主任、ESD主任などがそのような役割を果たす場合があり、その他教育委員会の指導主事、社会教育担当主事や公民館の職員、首長部局の関係者、大学の教員、ユネスコ協会役員、関係NPO／NGOなど様々な人たちがESDコーディネーター役を果たしてきた。地域との連携・協力については、別項で詳しく紹介しているため、本項では以上に留める。

ESD推進に関する他校との情報、経験の交流

多忙な学校教員にとって、ESD推進の重要性は理解しつつも、日常業務に追われてなかなかESDに取り組めなくなってくる場合も多い。そのような際には、他の学校でどのような取り組み・努力がなされているか、どのようにしてESDによる授業改善が図られているか、情報・経験の交流を図ることが有益である。そのような交流により、お互いに元気を分かち合い、更なるESDの推進に向けたエネルギーを培うことが可能になる場合も多い。残念ながら、これまで我が国においては、ユネスコスクール同士の交流は比較的限定的であり、近隣の学校との交流すら十分に行われていないケースが多々見られた。今後は、特に地域におけるユネスコスクール及びその他のESDに関心を有する学校間の対話と交流のためのネットワーク／プラットフォームづくりを進めることが有益と考えられる。

2014年8月　東海北陸ユネスコスクール交流会における経験の交流

ESDを持続的にすすめる仕組み
－社会的側面から

奈良教育大学　次世代教員養成センター　専任講師
中澤静男

文部科学省・日本ユネスコ国内委員会の尽力により、日本のユネスコスクールは800校を超え、さらに増えていく勢いです。日本ではユネスコスクールは学校現場におけるESDの推進拠点として位置付けられています。しかし、この流れでESDが持続的にすすめられるであろう、と楽観視している方は残念ながら多くないでしょう。では、なぜESDが持続的にすすめられると思えないのでしょうか。その要因を次の3点から考えてみましょう。一つ目にESDを指導する教員の力量形成について、二つ目にESDを支援する市民意識の高まりについて、三つ目にESDへの予算的裏付けについてです。これらESDを阻む要因の考察を通して、ESDを持続的にすすめるために必要な仕組みに迫りたいと思います。

教員の力量形成

一つ目のESDを指導する教員の力量形成についてです。ユネスコスクールを支援する大学間ネットワークであるASPUnivNetで、毎回のように議論されているのは、ユネスコスクールの活動の質的向上についてです。公立学校の場合、数年ごとに管理職も含めてすべての教員の異動があります。10年もすれば全員が入れ替わっているでしょう。ユネスコスクールへの申請書を作成した時におられた先生が転勤すると、その学校の取組がトーンダウンするという話をよく耳にします。それはつまり、ESDを指導できる教員が少ないため、持続が困難だということです。現在のところ、ESDの推進に取り組んでいる教育委員会はわずかしかなく、ESDに取り組もうとする教員は、自主的に学ぶ以外に方法がありません。本学でもこの3年間、月1回のペースでESD連続セミナーを開催してきました。仕事が終わってからの7時という遅い時間にもかかわらず、毎回参加していただいている教員の皆さんには、頭が下がります。しかしそれでなくとも忙しい教員の意欲と努力だけに頼っていたのでは、ESDを理解する教員の数が大きく増えることはないでしょう。2011年6月に改訂された「我が国における国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画に「学校教員の資質の向上のため、都道府県教育委員会等の指導主事等を対象に、研修を行い、受講した指導主事等がこれらの内容を踏まえた研修等を各地で行えるようにします。」[1]とありますが、未だに実行されていません。ESDが学習指導要領にも反映されていることを考慮すれば、指導主事等を対象としたESD研修会を早急に行っていただきたいものです。その上で、同計画に記されている「教育委員会等の教育関連部局においては、ESDの視点を取り入れた各種研修会の開催、参加促進、ESDやユネスコスクールの担当窓口の設置など、教育現場へのESDの浸透を図ります。」[2]を実現していただくことが、偏ることなく、日本全体でESDを普及促進することにつながると思います。

同計画のESDの目標に、「環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすことであり、その結果として持続可能な社会への変革を実現することです。」[3]と記されていますように、ESDでは、教育の成果として、下からの社会変革の実現を目指しています。しかし、ESDを実施する仕組みまで「下から」である必要はありません。ESDの後継プログラムであるＧＡＰの5つの優先行動分野の一つが教育者（ESDを実践する教育者の育成）であることからも、教員養成大学においてESDを指導できる教員を育成することともに、教育委員会によるESDに関する現職教員研修を継続的に行うことが求められていると思います。

市民意識の高まり

二つ目のESDを支援する市民意識の高まりについてです。2014年10月27日の日本教育新聞によると、内閣府が全国の20歳以上の3000人を対象に行った「ESDに関する世論調査」では、ESDについて、「知っている（意味もわかる）」が2.7%であるのに対し、「知らない」は79.1%

1 「国連持続可能な開発のための教育の１０年」関係省庁連絡会議「我が国における「国連持続可能な開発のための教育の１０年」実施計画（ＥＳＤ実施計画）」、2011年６月改訂、p.15
2 同上、p.18
3 同上、p.4

であり、ESD の認知度があいかわらず低いということがわかります。このような状況では、ESD を推進することが「票」につながるとは思えませんから、政治家が ESD 推進策を立案するということもないでしょう。ESD を支援する市民意識の高まりがあってこそ、ESD の普及推進が図られるのです。

ESD は行動の変革を求める教育ですが、現在、市民に対してどのように行動することが ESD 的ですよ、ということが明確に示されていません。もっと ESD 的行動の「見える化」を行うことで、市民意識が高まると思います。例えば、環境教育の分野には色々な指標があります。それを用いて、日々の行動が環境に与える負荷を知ることで、環境に対する市民意識は向上するでしょう。フードマイレージを学んだ市民は、地産地消を心がけるようになるでしょう。少なくとも輸入食品の購入は控えるはずです。合わせてバーチャルウォーターを学んだ市民は、肉類の消費を少なくするでしょう。モーダルシフトを学んだ方は、エコレールマークのついた商品を選択するようになるでしょう。毎月の電話料金や電気料金をチェックするのと同じように、毎月、ちょっと行動を変えたことで、これだけ環境負荷を減らすことができたという達成感を感じることができる仕組みができれば、ESD を支援する市民意識が向上すると思います。

予算的裏付け

三つ目の ESD への予算的裏付けについてです。ESD の学びは教室の中だけで終わるものではありません。調査活動するにしても、学校間交流するにしても、お金がかかります。研究発表会を開催して ESD を普及するときも、お金がかかります。ESD を持続的にすすめるためには、持続的な予算的裏付けが必要です。その予算の出所として２つあります。一つは税金です。国や地方公共団体の施策や助成金なども、もとをただせば税金です。もう一つが企業です。今後は企業活動と ESD を結びつけることで、ESD 推進の予算を獲得すべきだと思います。しかし、企業は慈善団体ではありませんので、企業にとっても利益のあるものでないと、持続的に予算化してもらえないでしょう。そこで注目するのが企業活動が環境に及ぼす影響を最小限にとどめることを目的に定められたＩＳＯ 14001 という、環境に関する国際標準規格です。環境に悪影響を与えながら、利益を貪るという企業も残念ながらあるでしょうが、ＩＳＯ 14001 を取得し、環境配慮を行っている企業が、日本には 20000 社以上（2014 年 11 月）あります。ところが、ＩＳＯについて一般市民の認知度が高くありませんから、例えば「ＩＳＯ 14001 を取得した企業の製品を選んで購入する」という流れにはなっていません。環境に悪影響を与えている企業の商品も、ＩＳＯ 14001 を取得した企業の商品も同じように並べられ、値段や機能、デザインだけで選ばれています。市民意識が変化し、ＩＳＯ 14001 を取得していることが売り上げに影響するようになれば、企業活動を見直しＩＳＯを取得しようという企業が増えるでしょう。

一方、ESD は自然環境の制約の中で、社会・文化と経済のバランスを考え、行動の変革を促す学習です。つまり環境だけでなく、文化も視野に入れた学習です。そこで、ＩＳＯ 14001 を取得した企業の中で、文化的行事や文化財保護、学校での ESD に資金援助する企業を ESD15000（仮称）という感じで認証し、広く広報します。広報が行きわたり、ESD15000 認証の企業の商品を優先的に購入する市民が増加すれば、ESD に資金援助することを率先して行う企業も増えていくものと思われます。それはすなわち ESD を持続的にすすめる大きな支援となるでしょう。

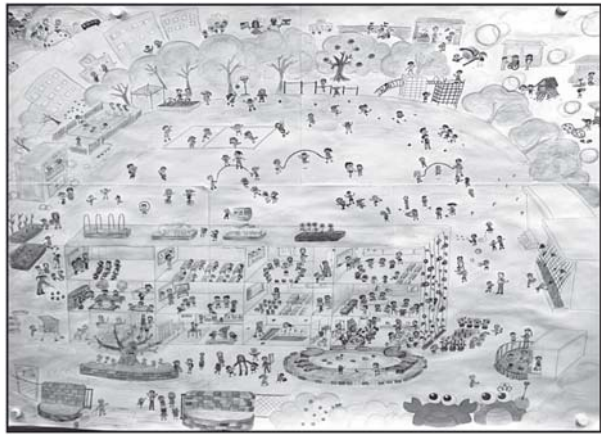
以上、ESD を持続的にすすめる仕組みとして、ESD を指導できる教員を増やすための教員研修、ESD を支える国民意識の向上、企業による資金提供による ESD の予算的裏付け等、システムの確立の側面から考察してきました。ESD を持続的にすすめるための仕組みとしては、他にほめる仕組みをつくることや、ESD センターを創設することなど多々あるでしょう。それらが互いに補完しながら機能することで、ESD が教育の主流になることを期待しています。

学校評価ー永田台小学校の事例から

横浜市立永田台小学校校長
住田昌治

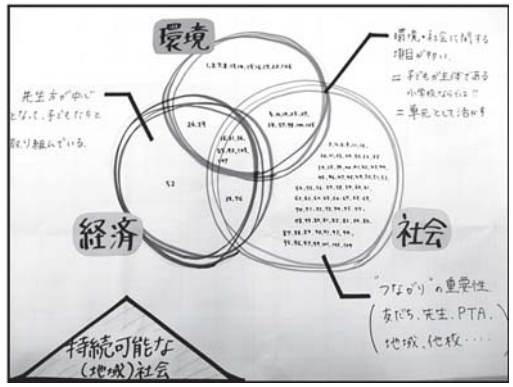
「１００の学校に１００のESD。１００人の教師に１００通りのESD」学校や地域の特色及び課題を把握しESDに取り組んでいるか、学校評価の大きなポイントである。また、優れたESDは、学校に入った瞬間に分かる。排他的でなく、明るく受け入れる空気が学校中に流れているからである。

ESDは、対象が広く、深まりのある教育であり、教育の在り方自体について立ち止まって考え直すきっかけを与えてくれるチャンスである。この機会に、結果や出来栄えだけでなく、プロセスを見えるようにし、そのプロセスを評価することが大切である。また、数値目標や指導項目を掲げるような手法ではなく、本質をしっかり見据えるような手法の開発を求める。それは自ずと、旧態依然として行われてきた教育の「体質」を改善することや、学校の文化や教育の在り方を捉え直すことでもある。そのためには、これまで常識とされてきた制度やしきたり、形式主義、トップダウン（上意下達）、マニュアル化、フレームワーク化、同一化、社会的弱者に対する差別、ジェンダーの不平等などの「体質」を見直さなくてはならない。この「見直し」のために有効な手法が「ホールスクールアプローチ」である。



今、教育界にも複雑に絡み合った様々な課題があり、課題解決も容易ではない。いじめや不登校、問題行動など「簡単にはいかない。どこにでもあることだから仕方ない」というあきらめムードが蔓延している。ESDは、このようなあきらめムードを払拭するチャンス、つまり教育の体質改善のチャンスでもある。ESDを標榜する学校は、サスティナビリティが学校に溢れ、自分の学校が楽しいと感じるようであってほしい。評価においても、外部からの評価に頼るだけでなく、自分の学校で育てたい内容が実現しているか、自らの内なるレンズで見ていくことを主とするようにしなければならない。

※ホールスクールアプローチ：単に学校の全員でESDに取り組んでいるということではなく、全ての教育活動や学級・学年・学校経営等にまで対象を広げたESDの手法である。



サスティナブルマップからの分析〉聖心女子大学生作成

サスティナブルマップの作成と分析による学校評価例

ホールスクールアプローチでESDチャレンジを進めてきた成果をサスティナブルマップとして描いた。まず、「永田台のいいとこ　いろいろ」を教職員からアンケートをとり公表した。さらに保護者や地域からも意見を聞きながら項目を増やし、学校から地域へとマップを広げ、サスティナビリティーがどのように実現しているのか共有した。改善したいところについても、共有しながら即時的に改善を図っていくようにした。我々大人が日常を見直す自覚をもつことによって、日頃気付かないことにも気付くことができるようになった。このマップは、これまでの学校評価でもあり、これから取組を進める上で「良さを持続していくこと」「新たな良さを創り

出すこと」等の指針となるものでもある。現在、サスティナブルマップで「笑顔が絶えない職員室」「誰とでもつながろうとしています」など１００を超える項目を描いているが、その一つ一つを「環境・経済・社会（文化）」に分類し、学校のサスティナビリティーの強みと弱みを明確にすることは重要な評価となる。その分類を基に弱みを強化していくことによって、さらに学校のサスティナビリティーは高まる。

学校ＥＳＤ指標による学校評価例「もみじアプローチ」

７つの段階　学校としての取組内容を明確にし、持続可能性を意識した取組を確実に行うようにする。学校レベルでの取組指標。持続可能な社会に向けた学校づくりにおいては、サスティナビリティーは、教室の中だけのものではない。人・もの・こと、全てはつながっていることに気付くことによって、必然的にESD の対象は広がる。自分の学校の ESD は、現在何を対象に行っているのか把握し、次に対象とすることを明確にして進めていくことが大切だ。

【横浜市立永田台小学校作成】

１　ESDを意識せず、教育活動を行っている段階。

※一生懸命、いい教育実践はしているが、まだ持続可能性には目が向いていない。

２　イベント等を中心に、ESDを意識して取り組んでいる段階。

※将来を見通した未来をつくる、持続可能な生き方等、持続不可能性に気付いている。

３　ESDを意識的に取り組んでいる段階。生活に根ざした○○教育

※環境教育や国際理解教育等を個別に取り組んでいる。

４　持続可能性を教科の中に見いだし（入れ込み）、教科授業を行う段階。

※各教科の中に、持続可能性の要素を加味しながら授業をしている。

５　持続可能性を教科横断でつながりを見つけ、総合的・関連的に授業を行う段階。

※授業計画時につながりを見つけて、柔軟性がある授業をしている。

６　持続可能性を、学校教育全ての場に拡げる取組をする段階。

※学校の課題を解決しようとする方向性。

７　地域や社会の場に、学校が中心となってESDを拡げる取組をする段階。

※地域社会の課題を解決しようとする方向。変化の担い手としての自覚が芽生える。子どもが変わる、教師が変わる、学校が変わるすごい教育 ESD

それぞれの学校や地域、児童等の実態や課題にあわせて取り組んでいることが、学校や地域の持続可能性に寄与しているのか。関わっている人が価値・行動・ライフスタイルの変容を実感しているのか。自分が社会を変革する担い手の一員だと感じるようになっているのか。そういうことを学校として捉えていくことが ESD の学校評価となる。そして、その状況をもとにしてさらに魅力を深化・拡大していくことが、持続可能な未来の担い手を育む教育となり、持続可能な社会の実現に近づくことになるのだと考える。方法論のみを追求したり、枠組み論や数値評価論にとらわれていると、ESD が形式的で主体性を欠いた取組に終わってしまう。一部に「ESD は、総合だ」と言う方もいらっしゃるが、そこで止まっていては ESD のもつダイナミズムは抑制されてしまう。思考も停止し、ますます ESD に取り組もうとする教師はいなくなる。本来、ESD はフレームワークに収まらない内容であるので、教室の授業に閉じ込めておくのではなく、学校教育の有り様、地域の課題、地球の課題と目を向け、取組対象を広げていくことが ESD の力を引き出すことになる。全校で、教育活動全体で、今までやってきたことを持続可能性の視点で捉え直して取り組めば、学校が活性化し、教職員と子どもが元気になる。サスティナブルマップ作成や ESD 指標「もみじアプローチ」を活用した学校評価によって、自校の ESD の価値を共有し、自信と誇りをもった ESD チャレンジの取組が期待される。

ＥＳＤの視点を活かした学校づくり

～教育効果を高める指導と評価の一体化を目指して～

岡山市立京山中学校　校長
徳山順子

1 本校のＥＳＤの特徴

本校では，平成２４年度にユネスコスクールに加盟し、グローバルなネットワークを活用しながら、地域の「人・もの・こと」を活かし、多くの人との「かかわり・つながり」を大切にした、開かれた学校づくりを推進している。そこで「京山から世界へ！つながる願い～この地球でみんながずっと幸せでいられますように～」をキーワードに、ESD を「思いやり･夢･志 共育」と掲げ、グローカルな視点を活かした授業・活動を通して、自然と人間との調和を多面的に考え、思いやり・夢・志を互いに育て合い、学校教育目標「自立と創造へ向かう生徒の育成」の実現を図っている。特に、「環境」「平和」「人権・多文化共生」「キャリア教育」を軸に、３年間を見通して､総合的な学習の時間(１年５０ｈ／２年７０ｈ／３年７０ｈ)の活動内容を整理し、育てたい力を明確にした本校版学習指導要領解説・評価規準表（グレード表）を作成し、指導と評価の一体化を目指す

総合的な学習の時間　評価規準表（グレード表）　［表１］

能力・態度	GRADE Ⅰ	GRADE Ⅱ	GRADE Ⅲ
❶ 批判的に考える力 ＜批判＞	インタビューやアンケートなどで情報を収集し、多様な方法で考えることができる。	様々な方向から客観的な情報を収集し、公平な判断ができる。	他者の意見や情報をよく検討して、よりよい解決策を考えることができる。
❷ 未来像を予測して計画を立てる力 ＜未来＞	他者の意見を共有し、自分たちで未来を予想・予測・期待することができる。	過去・現在からよりよい未来をつくるために、今自分たちができることを計画することができる。	京山地区に住む人々に、より質の高い生活をもたらす提案をすることができる。
❸ 多面的，総合的に考える力 ＜多面＞	地域の良さや課題に気付き、京山地区を多面的に見ようとすることができる。	関係者、出来事、社会情勢、自然などを理解し、多面的に考えることができる。	課題が、社会・経済各面において、複雑に絡み合っていることを理解し、多面的・総合的に考えることができる。
❹ コミュニケーションを行う力 ＜伝達＞	地域のいろいろな人と出会って、積極的に自分の考えを伝えたり、話を聞いたりすることができる。	自分の考えをまとめ、他者の意見を取り入れながら、他者によりよく伝えられる方法で発信することができる。	他者の考えを尊重しながら自分の考えをまとめ、他者にわかりやすく発表・発信することができる。
❺ 他者と協力する態度 ＜協力＞	班内で互いの意見を集約し、協力して取り組むことができる。	地域や関係機関とのつながりを深め、協力して考えを進めることができる。	自分の身近な問題について他者と協力して物事に取り組むことができる。
❻ つながりを尊重する態度 ＜関連＞	地域のことを調べることで、地域とのつながりに気づくことができる。	地域の特徴を知り、地域で役に立つ活動を行うことができる。	地域の課題を見つけ、その解決策について考え、解決に向けて発信することができる。
❼ 自ら進んで参加する態度 ＜参加＞	班内での自分の役割に責任を持ち、進んでグループ発表をすることができる。	まとめた内容に責任を持ち、それらを校内や地域等へ出て発表・発信することができる。	広い視野で私たちの身近な問題と向き合い、解決策を発信したり、解決の活動をしたりすることができる。

とともに、身につけた能力・態度を具体的な行動につなげるための探究活動の質の向上を図っている。また、教科横断的な単元学習プログラムを作成・実践することで、言語活動の充実や思考力・判断力・表現力等を育てる授業改善に取り組んでいる。こうして学校で行うすべての教育活動や委員会活動等を ESD の視点で見直し、特色のあるカリキュラムを構築することで、地域的視野で未来を考える国際人としての基礎を培い、地域に社会貢献できる生徒を育てたい。

2 指導と評価の一体化

❶総合的な学習の時間の本校版学習指導要領解説

３年間を見通して、総合的な学習の時間の活動を整理し、重視する６つの「構成概念（①多様性 ②相互性 ③有限性 ④公平性 ⑤連携性 ⑥責任性）」と７つの「能力・態度（①批判的に考える力 ②未来像を予測して計画を立てる力 ③多面的、総合的に考える力 ④コミュニケーションを行う力 ⑤他者と協力する態度 ⑥つながりを尊重する態度⑦進んで参加する態度）」でまとめ、本校版学習指導要領解説【図1】（81 頁参照）と評価規準表【表1】（78 頁参照）を作成している。こうして３年間を見通した特色あるカリキュラムを作成し、ＰＤＣＡ[1]サイクルを回しながら持続可能な学習としている。

❷ＥＳＤの視点で拡張した教科横断的な単元学習プログラム

教科間の連携を踏まえた単元学習プログラムを構築し、教科の授業改善とタイムマネジメントを行った。また、ESD の視点を踏まえた各教科の評価規準法（グレード表）を学年の発達段階に沿って作成した。単元学習プログラムの事例をいくつか紹介する。一つは、アフリカのスーダンにおける食料問題を、グローバルな視点で多面的に捉え、その問題を自分たちの生活と関連づけ、解決に向けた考えや行動指針を英語で表現する授業。ここでは、ＪＩＣＡ隊員や県環境保全事業団アスエコの職員，農業従事者の方に来ていただき、フードマイレージを算出するワークショップなど体験型プログラムを通して、日本から遠い国の問題を自分

1　Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（評価）→ Act（改善）

自身のこととして捉え、食糧問題解決の具体的な手立てを提案した。他にも、アフリカ４か国の留学生の前で、社会科で学んだ内容をもとに自分でさらに深め，アフリカの魅力を英語でＰＲし、ビデオでアフリカの学校に発信する授業や、パキスタンの少女マララさんの英語スピーチからよりよい社会にするための提案を考える授業など、１１事例を作成している。

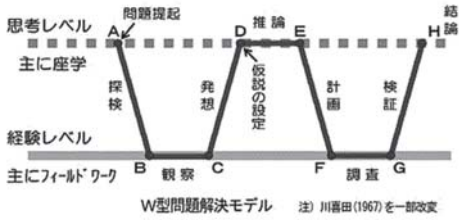
(3)W型問題解決モデルを取り入れた探究活動

課題を設定し、その課題解決のために情報を収集し、整理・分析した結果を、まとめ・表現することで、新たな課題に出会う、再びその課題について探究していくというプロセスを繰り返しながら、より質の高い課題解決へと深めていく探究活動を実践することで、社会貢献・行動化へと結びつけている。総合文化発表会（ＳＫＦ）では、生徒一人一人が設定した個人テーマをもとに探究活動した提案をワークショップや劇、研究発表などを通して、地域に発信している。また，学校間交流では、海外や他県のユネスコスクールとＴＶ会議等を通して「こども未来会議」を開催し、同じテーマで地域を超えてさまざまな視点から意見交換をすることで、生徒に多面的な見方や考え方が生れ、視野が広がっている。

【探究活動の進め方】
探究活動は，単に調べる学習とは違い，次のようなプロセスを経ることが一般的です。

課題設定 → 情報収集 → 整理・分析 → まとめ・表現

課題を設定し，その課題の解決ために情報を収集し，整理・分析した結果を，まとめ・表現することで，新たな課題に出会う。そして，再びその課題について探究していく，というように，このプロセスを繰り返しながら，より質の高い課題の解決へと深めていくことに探究活動の意義があります。
そこで，多様な思考や体験を繰り返す探究活動の例を，W型問題解決モデルに基づいて紹介します。



W型問題解決モデル　注）川喜田(1967)を一部改変

(4)育てたい「能力･態度」を踏まえたESDカレンダー

総合的な学習の時間と教科等との関連や、教科横断的な単元学習プログラムを学年ごとに整理し、各学年の ESD カレンダーを作成した。特に、７つの重視する「能力・態度」を明確にした ESD カレンダーを作成することで指導方法や具体的な手立てを明確にしている。

3 本年度の成果と課題（○成果，●課題）

○ ESD の視点で育みたい能力・態度を明確にした ESD カレンダーの図式化や評価規準表（グレード表）により、指導と評価の一体化を図り、３年間の見通しが明確になった。

○複数教科で学習内容を検討する中で授業スキルを高めることができた。教科を超えた学習連携や同僚性が深まるとともに、教員の発想力や教材研究力の向上、意識の変容につながった。

○W型問題解決モデルを活用した探究活動の充実を図ることで、言語活動の充実や思考力・判断力・表現力の育成につながった。

○生徒の課題意識が高まり、社会貢献や地域ボランティアへの意欲が増した。

●生徒の学びの質や変容を内発的に評価する方法など、ESD の成果をモニタリング評価するような、評価方法の工夫・改善をしていく。

●中学校区での小中の学習連携をさらに深め、小学校の学習内容と育てたい力を明確にして、小中学校９年間を見通したカリキュラムを精査･検証・改善していく。

[図1]本校版学習指導要領解説の一部『京山中の魅力探検～歴史に学び, 未来へつなぐ～』(第１学年)

「探究活動のスキル学習」のねらい
小学校で培った探究活動のスキルを基盤として，生徒の生活の場である中学校や地域を題材としながら，探究活動を行う。３年生で個人テーマ追究に向けて，１年生では身近な題材でテーマも限定することで，グループ内での話し合いや計画・実行がスムーズにできるように方向づける。また，探究活動を通して，周囲や地域の方々との人間的な関わりを深めたり，コミュニケーション能力を高めたりなど，社会性を養うことが大切である。
１年生の探究活動では，具体的な問題に取り組み，それを解決していく活動を通して身につけたスキルを高めて，W型問題解決モデルの問題提起→探検→観察→発想→仮説の設定・推論までを通度できるようにする。

① 『京山中の魅力探検～歴史に学び，未来へつなぐ～』
ここでは，中学校に入学して間がなく，複数の小学校から入学してきた経緯も考慮して，まずは身近な題材で協力して活動させる。共通の目的意識をもって計画を練ったり，進んで意見を述べたりすることができる土壌づくりの場とする。スタディマナーにある「まちがいを笑わない雰囲気をつくろう」「相手に伝わるように発表しよう」「話す人の方を向いて集中して聴こう」を基本とするグループでの話し合いの仕方・活動の仕方を身につけさせるようにする。テーマを９つに絞り，班内でしっかりコミュニケーションを取りながら計画・分担をさせる。情報収集は，資料やインターネットなどに留まらず，京山中学校の先生や地域の方にインタビューするなど人との関わりを通して情報を得るようにする。得た情報を最終的にはパンフレットの形にまとめる。単に文章を列挙するだけでなく，写真やイラストを取り入れたり，タイトルの工夫をしたりすることによって，読む人の興味関心が高まることに気づかせる。

◆持続可能な社会づくりの構成概念から見た「京山中学校」
Ⅰ 多様性 … 京山中学校の特徴（誇れる点，満足している点，反省すべき点など）
Ⅱ 相互性 … 小学校や高等学校とのつながり
Ⅲ 有限性 … 創立の経緯，生徒数の変遷，将来の京山中学校
Ⅳ 公平性 … ３つの保証（安全の保証／学習の保証／人権の保証）
Ⅴ 連携性 … １つの約束（学校・家庭・地域との連携・協働）
Ⅵ 責任性 … ２つの指導（夢や目標をもち，生徒のたくましさを培う指導）

◆本学習で重視する能力・態度
❶ 批判的に考える力＜批判＞ … 多様な方法で情報を収集して客観的に考えることができる。
❷ 未来像を予測して計画を立てる力＜未来＞ … 共通の目的意識をもって計画を練ることができる。
❸ 多面的，総合的に考える力＜多面＞ … ９つのテーマの各視点の大切さに気付き，京山中学校を総合的に見ようとすることができる。
❹ コミュニケーションを行う力＜伝達＞ … 進んで意見を述べ，班内でしっかりコミュニケーションを取ることができる。
❺ 他者と協力する態度＜協力＞ … 班内で分担・協力することができる。
❻ つながりを尊重する態度＜関連＞ … 京山中学校が地域のいろいろな物事とつながっていることに関心を高めている。
❼ 自ら進んで参加する態度＜参加＞ … 班内での自分の役割に責任を持ち，進んでパンフレットづくりに参加することができる。

◆指導上の留意事項（３つのつながり）
① 教材のつながり … 自分の班のテーマだけにとらわれるのではなく，他の班のテーマについても関心をもち，９つのテーマ全体を通して，京山中学校の特徴を把握するようにする。
② 人のつながり … 京山中学校の先生や地域の方にインタビューすることを通して，多様な立場や世代の人々と関わりをもつようにする。
③ 能力・態度のつながり … パンフレットづくりでは，単に文章を列挙するだけでなく，写真やイラストを取り入れたり，タイトルの工夫をしたりするなど，読む人の興味・関心を高めるような工夫ができる力を身に付ける。

それでも「持続可能な未来への希望」をつくるESD学習 = 評価活動

～証拠・証言としての「当事者記録」を書く～

東京学芸大学教職大学院
成田喜一郎

ESD を行なうと何かが変わる。そんなことに気づいている実践者や学習者、ESD の当事者は少なくないのではないだろうか。たとえば、こんな例がある。

●いつもは立ち歩いたり、教室を出て行ったりしてしまう子が、ESD の授業になるとみんなと一緒に活動をしている。その様子を見た先生たちが「ESD って何だろう」「ESD って不思議だ」と思ったようで、その後、ESD への取り組みに拍車がかかっていった。(ESD カレンダーを開発したユネスコスクール・江東区立東雲小学校の元教諭からの聴き取りより)

●見知らぬ人に「源朝長って知っていますか?」となかなか声をかけられなかった不安げな子が、江の電の中で意を決してミッションとしての「朝長アピール」ができたとき、乗客たちは「地元にいながら朝長の存在は知らなかった」「この電車に乗って何だか得した感じだね」と言っていた。(偶然、袋井市三川小学校の修学旅行児童から、16 歳で亡くなった頼朝の兄「朝長アピール」を受けた江の電の乗客からの聴き取りより。拙稿 (2009)「源朝長 :自信と勇気を与える郷土史アピール」『ESD 教材活用ガイド :持続可能な未来への希望』ACCU, pp.32-39)

●東日本大震災・原発事故の翌年2012 年、所沢市立Y 小学校でK 教諭と小学校３年生の子どもたちは「あちゃちゃ！われわれお茶はかせ!! ～狭山茶のよさを伝えるお茶屋さんをひらこう～」というESD の実践を試みた。そのとき、お茶屋さんを開くに当たって「今年のお茶を出すのか、去年のお茶にするか」で話し合いが始まった。その結果、子どもたちは「どっちも出す。お客さんに選んでもらう」という意見が18 人／25 人で多数を占めた。その直後、子どもたちが「先生はどう思うの？」と問いかけてきた。そして、次の時間にK 教諭は、考えに考えた挙げ句「先生は両方出すことには反対だ。今年のお茶と去年のお茶をしっかり区別して管理できるだろうか、ミスは起きないか。学校という公的な機関が安全性を置き去りにして今年のお茶を出せるだろうか」と問いかけ、再び話し合いが行なわれた。

その結果、去年のお茶派が12 人、両方出す派が２人、今年のお茶派が11 人で、一票差で去年のお茶を出すことになった。十分に話し合われ合意形成がなされたあと、敗れた「今年派」のある子どもが「去年のものだけど、しっかり狭山茶のよさを伝えていきたい！」と言った。当時、総合的な学習の時間に行なわれて来た「お茶」学習をおとなの判断で取りやめた学校や地域が多々あったなかで、このESD 実践では、みずからが生き、暮らす地域に降り注いだ「課題」に焦点を当て、当事者として参画した子どもたちの話し合いに、教師も一当事者としてかかわっていった。(所沢市立教育センター「ESD 調査研究協議会」におけるK 教諭の実践報告とその後の聴き取りから)

ここに挙げたエピソードは、筆者のフィールドノーツやエスノグラフィーからの要約であるが、この他に多くのESD 実践者や学習者= 当事者たちの「記憶」の中にしか残っていない、ESD の本質的で根源的な諸相を示すエピソードは無数にあるはずである。

しかし、ESD の10 年間に行なわれた膨大なESD 実践のほとんどは、未だプランと経過、結果の一部の「事実」しか記述・報告されていない、と言っても過言ではない。

これからESD の評価を行なって行く際にも、ともすると、ESD 評価の証拠・証言 (エビデンス) からこぼれ落ちてしまうか、それは一実践者や一学習者の「主観」に過ぎないと排除され兼ねないエピソードが多々あるのではないだろうか。

もちろん、膨大な意識調査を行い、量的統計的手法を援用して意識の変容を「客観」的な数値によって描き出す評価方法は行なう必要はある。しかし、その「客観」的な数値を裏付けたり、裏切ったりするエピソードの記述と分析なしに、真正なる評価は行い得ない。

今、地球・地域における環境・経済・社会・文化は決して「持続可能な」という形容詞を冠すればすむという時代状況ではない。むしろ、わたくしたちは、持続可能か不可能かという「岐路」、しかも「刹那毎の岐路」に立たされていると過言ではない。

そうした状況の下で、それでも「持続可能な未来への希望」をつくるESD

評価は可能なのか。

これまでESD の実践と研究を通してわたくしが考えてきた手法は一つ。ESD の証拠・証言（エビデンス）としての「当事者記録」（自己エスノグラフィーAuto-ethnography）を書くことである。

多忙な日々を送る実践者や学習者＝当事者は、なかなかみずから「当事者記録」を残せないことが多い。しかし、ESD 実践のプロセスにおいて、論理と証拠で振り返る省察（Reflection）の記録と直観や気づきで振り返る観想（Contemplation）の記録を書き続けることならば可能なのではないだろうか。

評価とは、計画や実施のあとで行うものだけではなく、実践のはじめ・なか・おわりの全学習過程で常に行なわれるべきものであり、まさに、形成的なアセスメントとしての「当事者記録」の記述と集積物（ポートフォリオ）が極めて重要な証拠・証言（エビデンス）となる。

その「当事者記録」の中には、「事実」としての記録と「意味」としての記録がある。

「主観」か「客観」か、「直観」か「論理」か、「共感」か「違和感」かという二項対立を超える「当事者記録」として、「創作叙事詩・解題（Creative Epic and Explanatory notes）」という手法が有効である。「創作叙事詩」とは、学んだり体験したりした「事実」をもとに、想像力や感受・感応力を加え、内的な「化学変化」が起こり創作された広義の詩的作品であり、その表現形式は多様で「自由詩」「定型詩」「随想」「標語やキャッチフレーズ」「漢字一字」、「イラスト」や「空白」など、当事者による自己選択・自己決定によって表現形式を選び、言語化・可視化された観想的な記録である。ただ、そこで終わるのではなく、「なぜ、その作品を描いたのか」学んだり体験したりした事実に基づき、みずから論理と証拠で書き表す省察的な記録＝「解題」を書き上げる必要がある。「解題」を言語化・可視化できない学習者については、実践者が聴き取り記述するとよい。

こうした観想と省察とを架橋・往還する「創作叙事詩・解題」という「当事者記録」（自己エスノグラフィー）を介した当事者同士の交流の中で主観による主観の客観化をめざすことが重要である。一個人の主観を超え、当事者相互の作用によって「間主観性（intersubjectivity）」を担保した「当事者記録集」（協働エスノグラフィーCollaborative ethnography）を残すことである。

ESD 学習＝評価のエビデンスは、個々の「意味」記録としての「当事者記録」とその「集合知」としての「当事者記録集」なくし、真正性を担保することは困難である。

さあ、すべてのESD 当事者が世代を超えて「当事者記録」を書き、それでも「持続可能な未来への希望」をつくるESD 学習＝評価活動に踏み出してみよう。

【参考文献】

・小田博志（2010）『エスノグラフィー入門　:〈現場〉を質的研究する』春秋社
・玄田有史（2010）『希望のつくり方』岩波書店
・成田喜一郎（2013）「子どもと教師のためのオートエスノグラフィーの可能性 :「創作叙事詩・解題」を書くことの意味」『ホリスティック教育研究』第16 号, pp.1-16, 日本ホリスティック教育協会
・成田喜一郎（2014）「教職大学院の教育研究における「哲学」の可能性 :理論と実践との架橋・往還の彼方に」『教員養成を哲学する』東信堂, pp.43-58
・西垣 通（2013）『集合知とは何か :ネット時代の「知」のゆくえ』中央公論新社
・フッサール, エトムント（2012）『間主観性の現象学 その方法』筑摩書房、浜渦辰二・山口一郎訳
・ユネスコ・アジア文化センター（2009）『ESD 教材活用ガイド :持続可能な未来への希望』ACCU
〔冊子のダウンロード可 :http://www.unesco-school.jp/materials.edu/guide.esdmaterials/（2014/12/25 取得）〕

第３章

ESD推進のための ユネスコスクール （ユネスコスクール岡山宣言）

ESD 推進のためのユネスコスクール宣言（ユネスコスクール岡山宣言）は、2014 年 11 月 8 日（土）に岡山大学で開催されたユネスコスクール世界大会　第6回ユネスコスクール全国大会で、議論され、採択された。
ユネスコスクール岡山宣言は、日本のユネスコスクール教職員を中心とする教育現場からの宣言であり、この 10 年の成果と課題を共有した上であらたな誓いと提案を描いた宣言である。

ESD 推進のためのユネスコスクール宣言
（ユネスコスクール岡山宣言）

私たちにとってのESD

私と、あなた、学校のみんな、地域のみんな、
世界のみんなへとつながっていく。
だから、私は、見えないあなたと励まし合い、
支え合える存在であるという尊さに気づき、何か行動したくなる。
教室から校庭へ、校庭から地域へ、地域から私の国へ、
私の国からあなたの国へ、
そして世界へ、地球へ、私の世界は広がっていく。
だから、私は、どこの場所にもかけがえのない
宝が息づいていることに気づき、何か行動したくなる。
今と、過去とのつながり、明日とのつながり、遠い未来とのつながり。
今の私は過去や未来とつながっていく。
だから、私は、この大きな時間の流れのなかで、
たいせつな責任を負っていることに気づき、何か行動したくなる。

（児童の変容を児童の視点から叙述した
ユネスコスクール教員による「詩」にもとづく）

ESD のビジョンを取り入れることで、子どもたちの学びのなかに、さまざまなつながりが生まれます。他者、世界の多様性、いのちある地球、自然、科学・技術、文化、過去および未来などと自己とのつながりです。こうしたつながりのなかで、学びは深まり、子どもたちの心のなかに生き続け、持続可能な未来を創造する力となります。その力は行動と協働を呼びおこす力です。そして、問い続け学び続ける力です。

日本のユネスコスクールによる「国連ESDの10年」の成果

日本におけるユネスコスクールは、1953 年に、ユネスコが世界の学校でその理念を実現する事業を開始した当初から日本の学校が参加して、今にいたります。日本では、学習指導要領や教育振興基本計画などに

持続可能な社会の構築やESD推進の観点が盛り込まれています。日本ユネスコ国内委員会「ESDの普及促進のためのユネスコスクール活用について（提言）」（2008年2月）によって、ユネスコスクールは、ESD推進の拠点として位置づけられました。ESDのビジョンと、ユネスコスクールの目的に共感した教師と学校を支援する人々や組織によって、ユネスコスクールは飛躍的に仲間を増やし、現在国内807校を数えます。全国のユネスコスクールによって、学校教育におけるESDの裾野は大きくひろがりました。「国連ESDの10年」を通して、ユネスコスクールでのESDには、多くの成果が見られるようになりました。

各ユネスコスクールのESD実践では、平和、環境、生物多様性、エネルギー、人権、国際理解、多文化共生、防災、文化遺産、地域学習などを入り口として、取り組むべき課題を、体験的・探究的に発見し解決していくためのプロジェクトやカリキュラムが開発されました。各教科のなかだけでなく、総合的な学習の時間等を有効に活用しそれらを関連づけながら、ESDは実践されてきました。

地域の特徴を活かしたESD実践を通じて、子どもたちは、地域社会が人と人とが支えあって成り立っていることを深く理解し、地域の良さと抱える課題を知り、未来に伝えるべきこと、あるいは変革すべきことを地域の人々とともに考え、行動に移すことを学んできました。さらに、地域社会が抱える課題と、国やアジア、世界の課題とはつながっており、地理的な隔たり、世代や立場の違いを超えて協働することで持続可能な未来をつくることができるという認識が共有されつつあります。

子どもたちは、地域社会や世界のさまざまな課題を自らの問題ととらえ、協働的に学ぶなかで「生きる力」を育み、未来社会の担い手であるという意識をもつことができました。ESDによる体験を伴う理解と科学的な考察は、批判的な思考力と判断力、コミュニケーション能力を鍛え、自ら、また協働して、持続可能な未来をつくるための行動に役立つことが理解されました。

ESDのビジョンに導かれた教師の意識に変容が生まれました。知識を伝達するばかりではなく子どもとともに学びながら、子ども中心の学びをデザインし、コーディネートする教師の姿勢は子どもたちを変え、子どもたちが変われば学校が、学校が変われば地域が変わるという実例が見られるようになりました。社会に対する無関心、自己肯定感の低さが問題とされる日本の子どもたちの内なる力を発揮させ、自信の獲得につながりました。そして、学校間の交流によって、より深い学びが実現してきました。

さらに、学校と教育委員会、保護者や地域の人々、NGO/NPO、企業、大学、専門機関とのあいだに連携が深まり、ESD実践の質を高めてきました。また、世代を超えて学ぶことの喜びを確認することにつながりました。

2011年3月11日に起こった東日本大震災は甚大な被害をもたらしました。しかしESDが根づいていた学校や地域では、そのことが被災からの立ち直りに大きく貢献し、国内外のネットワークを通じて被災地に多くのあたたかい支援の手が差しのべられました。地域の再生と創造にむけてESDを基本理念とした創造的な復興にむけた教育が行われつつあります。

日本のユネスコスクール：私たちのコミットメント（誓い）

私たちは、日本の教育を変えていく原動力としてESDをこれからも進めていきます。

- 私たちは、これからの地域づくりを担い、グローバル・シチズンシップを身に付けた次世代を育てます。
- 私たちは、平和、環境、気候変動、生物多様性、国際理解、多文化共生、エネルギー、人権、ジェンダー、防災、文化遺産、地域理解等、学びの入り口やテーマが何であれその先に地域、国、アジア、世界の平和と持続可能性を見据えて、地域の人々をはじめ多くの人たちとの協働しながら、ESDを実践します。
- 私たちは、気候変動、生物多様性、防災など、国境を越えたグローバルな課題について理解し、解決方法をさぐり、解決に向けてともに取り組んでいく国内外のユネスコスクール、特に近隣のアジア諸国のユネスコスクールとのテーマ学習・協働学習に取り組みます。
- 私たちは、互いに学びあい、活動の質を高めていくために自発的に組織されるユネスコスクール同士の全国ネットワークをつくります。そし

て、ユネスコスクール間の交流や協働をより情報交流・活用の仕組みを充実させます。

●私たちは「変化の担い手」として子どもと教師を捉え、地域社会における持続可能性のモデルとなるように努め、他の学校、NGO／NPO、自治体など多様な主体とともに、持続可能な地域づくりに貢献します。

●私たちは、さまざまな主体との対話と連携を通して、「国連 ESD の 10 年」の後継プログラムである ESD グローバルアクションプログラム（GAP）の5つの優先行動分野をつないでいきます。

●私たちは、世界 181 の国・地域にひろがるネットワークの一員として、ESD に取り組み、持続可能な未来をともに築いていくことを、そのために、さまざまな交流と連携の機会をつくって学びあうことを、日本と世界のユネスコスクールに対して呼びかけます。

本来子どもたちがもっている無限の可能性を一人ひとりの子どもたちが輝かせることができるよう質の高い教育を行っていきたい、という世界中すべての教師に共通する願い、さらには子どもたちを見守る保護者や地域の人々の願いを共有しながら、平和で持続可能な未来をつくるために、ESD をともに推進していきましょう。

学校によるさらなる ESD 推進：ユネスコスクールからの提案

「国連 ESD の 10 年」における ESD の推進拠点としてのユネスコスクールの成果と課題にもとづき、ESD をユネスコスクール以外の学校へ、地域へとひろげていくために、ユネスコスクールとすべての学校、その支援者に向けて、以下を提案します。

教師や子どもたちの主体的な発意やアイデアを尊重し、創造的な授業づくり、教科横断的で探究的な教育課程づくりによって学校全体で ESD をすすめましょう。

● ESD を通した子どもたちの学びの質や育ちを内発的に評価する方法など、ESD の成果をモニタリング・評価するための方法を考え、共有しましょう。

●各学校のＥＳＤを持続的に支える政策や制度をつくり、ESD にふさわしい校長のリーダーシップが発揮できる基盤としましょう。

●教師や教育関係者が自らの専門性を生かしながらグローバルな視野で持続可能性についての認識を深めるための研修制度を拡充しましょう。

●地域において、マイノリティの人々を含めた多様な主体が持続可能な社会づくりに参加し連携できる仕組みをつくりましょう。

2014 年 11 月 8 日
ユネスコスクール世界大会 - 第６回ユネスコスクール全国大会（岡山市）-
参加者により採択

「ESD推進のためのユネスコスクール宣言」から読み解く日本のESDの成果と課題

聖心女子大学教育学科　教授
永田佳之

ESDは世界を変えるだろうか。
そう問う前に、別の問いを立ててみよう。
ESDというビジョンを手がかりに、わたしたちは、
教育という営みそのものを変えることができるだろうかと。
その問いへの探求を通して、教育という営み全体をESDと呼べるまでに
高めることができたとき、ESDという言葉はその役割を終えるだろう。
教育とはほんらい、社会と人類とを持続発展させていく源泉だから。
友よ、その源泉をまず、みずからのうちに抱こう。世界を変える力の源は、
ひとりの人間の自由な精神の発露にあるのだから。

はじめに

2014 年 11 月 8 日、岡山大学で開催された第6回ユネスコスクール全国大会で「ESD推進のためのユネスコスクール宣言」が採択された。本論考で扱うこの宣言(以下、「岡山宣言」) の策定過程では「宣言に託すメッセージ」が全国的に公募された。宣言起草のための大切な情報として活用するために全国のユネスコスクールに「岡山宣言」に盛り込みたいメッセージを作成してほしいという呼びかけのもとに、想いの込められた言葉が各地から寄せられた。

冒頭に掲げたのは、そのうちの一遍、横浜シュタイナー学園から寄せられた「詩」である。実際に、宣言の一部として採用された言葉ではないが、ESD の神髄を捉えている代表的な言葉として掲げることにした。ここでは、宣言案策定はこのような「現場からのメッセージ」に敬意を払いつつの作業であったことを記しておきたい。

さて、筆者は、ユネスコスクール世界大会 全国大会：宣言起草・事例選考委員会 宣言ワーキンググループ代表として宣言が産み落とされるまでの一部始終に伴走する機会をいただいた。宣言文採択までさまざまな紆余曲折があったが、ESD にかかわる実に多くの人々から「大切な何か」を伝えるために様々な想いが寄せられ、その集大成がひとつの宣言となったと言える。ここでは、その起草プロセスについて触れた後に、宣言文の読み解きを通して日本の ESD の成果と課題を浮き彫りにする。

1. 宣言文採択までの経緯

「岡山宣言」は、第1に日本のユネスコスクール関係者に向けて、第2に世界のユネスコスクール関係者に向けて、第3にユネスコスクールを支援する地域・国の政策決定者、及びユネスコ（本部）に向けて発信された。宣言の発信元は公式には上記の全国大会の参加者であるが、採択に至るまでのプロセスを考慮すれば、日本のユネスコスクール教職員を中心とする現場からの宣言であると言ってよい。

一連の作業は、できるかぎり〈ユネスコスクールの声〉を反映させるべく、オンライン上の公募で学校から寄せられた 146 の優良実践事例や冒頭で紹介したような「宣言に託すメッセージ」として寄せられた 25 の言葉に傾聴し、過去の全国大会や地域交流会、その他の関連催事の記録などからキーワードを拾いだした。

それらを土台に、ESD 及びユネスコスクールに造詣の深い教員、研究者そして ESD 実践者から成る上記の宣言ワーキンググループの専門家により、国際的にもアピールする宣言案として相応しい内容になるように、丁寧に言葉が紡がれていった。こうして作成された宣言案は、パブリック・コメントや文部科学省との協議を経て、上記の全国大会で公表され、そこでの提案も踏まえて最終案が策定された。

検討資料として共有されたのはこれまでに採択された国際的なユネスコスクールや ESD 関連の宣言である。[1] 宣言起草の事務局を担ったのは、ユネスコスクール事務局として、ユネスコ本部と国内の学校現場との架橋にも尽力してきたユネスコ・アジア文化センター（ACCU）である。

1　次の7つの宣言が共有された。1）ユネスコスクール 50 周年「オークランド宣言」（2003 年）、2）ホリスティック ESD 宣言（2007 年）、3）トビリシ＋ 30「アーメダバード宣言」（2007 年）、4）DESD 中間年ユネスコ ESD 世界会議「ボン宣言」（2008 年）、5）東京 HOPE 宣言（2009 年）、6）トビリシ＋ 35「トビリシ宣言」（2012 年）、7）ユネスコスクール 60 周年「国際フォーラムによる提言」（2013 年）。

検討過程での課題は次の諸点に集約される。第1に宣言としての性質上、文字数や形式に制限があり、ESD の射程に置かれる幅広い領域の文言をコンサイスにまとめる必要があったこと。第2に全国から寄せられた多様な事例やメッセージのエッセンスを言葉化し、盛り込んでいくこと、第3に優良事例のみならず、一般のユネスコスクールの現状に想いを馳せ、成果と課題を捉えること、第4に過去のユネスコスクール関連の宣言を参考に、日本のユネスコスクール史に残る宣言として相応しい表現にしていくこと、である。

ワーキンググループでの審議では、これまでの 10 年の成果と課題が明らかになるように宣言を策定することが確認された。しかし、課題の列記は宣言にふさわしくないので、「提案」や「コミットメント」の中のポジティブな表現として記すことになり、最終的に次のような宣言の構成に至った。つまり、1)「私たちにとっての ESD」(「詩」から始まる導入)、2) 日本のユネスコスクールによる「国連 ESD の 10 年」の成果、3) 日本のユネスコスクール：私たちのコミットメント (誓い)、4) 学校によるさらなる ESD 推進：ユネスコスクールからの提案、の4部構成である。

2.「岡山宣言」を通して見えてくる日本のESDの課題

「岡山宣言」を目にしてまず気づくのは、宣言の冒頭に「詩」が掲げられていることである。上記の「宣言に託すメッセージ」として東京都稲城市立稲城第二小学校から寄せられた一編の詩、つまり子どもの変容を子どもの視点から叙述したユネスコスクール教員による言葉にもとづく「詩」が冒頭に相応しいメッセージとして選ばれた (文末 Box 参照)。採択までの過程で、宣言に「詩」を添えることに対する反対意見もあったが、議論を重ねた結果、採用に至った。

採用されることになった理由の一つは、この「詩」が日本の ESD の特徴である「つながり」を巧く表しているからであった。少々大げさな表現になるが、近代化の過程で人間と自然、人間同士のさまざまな関係性は分断されてきたが、ESD によってその関係性の再構築が見られるようになった。しかも、近代以前では想いもよらなかったであろう「遠い未来」や「地球」とのつながりも構築されようとしている ― そんな教育の在り方を巧く表現した「詩」として評価されたのである。

さて、上に触れたように、この 10 年の成果と課題を明らかにするという意識のもとに、宣言文は編まれた。ここでは「岡山宣言」の前半に表された成果と後半に表された課題に盛り込まれた一つひとつのキーワードからユネスコスクールの、ひいては日本の ESD の成果と課題を読み解いてみたい。以下に、「岡山宣言」を通して日本における「ESD の 10 年」の ①明らかな成果、②道半ばだが達成されつつある成果、③残された課題に大別して述べることとする。

1）明らかな成果

●発展基盤の確立

「日本のユネスコスクールによる『国連 ESD の 10 年』の成果」で描かれているように、この 10 年で ESD が発展していくための基盤 (インフラ) が整備された。教育振興基本計画に ESD が盛り込まれたり、ユネスコスクールの量的・質的な拡充が唱えられたり、また学習指導要領に持続可能な社会や未来が意識された言葉が明示されたりしたことは、世界的に見ても類い稀な発展基盤の整備であると言える。こうした確固たる基盤は、ことに公教育での ESD の浸透に少なからぬ影響を与えてきた。政府はそれなりの役割を果たすべく努力を重ねてきたと言えよう。

●多様な「つながり」の生成

前述の通り、日本の ESD の特徴として「つながり」を重視していることが挙げられる。ESD のお陰で、学校と地域や世界との間に架け橋がかかったという声は少なくない。こうした空間での「つながり」のみならず、過去や未来と現在に生きる教師や子どもとをつなげたのもまた ESD であり、宣言文では「未来社会の担い手であるという意識をもつことができました」と表されている。現在の環境や社会問題が未来にどのような影響をもたらし得るのかについての想像力を喚起する ESD の授業は少なくなかった。「ESD カレンダー」などの普及により、教科の垣根を越える試みが広まったことも注目に値する。さらに、「10 年」の後半に起きた東日本大震災で甚大な被害を受けた東北の人々とのつながりや学び合いも ESD を通して展開された。

●「総合的な学習の時間」の活用

宣言文にも示されているように、「総合的な学習の時間」等を活用した体験的・探求的なプロジェクト等の浸透や問題解決学習の重要性に対する認識が広まったことはひとつの成果であろう。「総合的な学習の時間」以外の教科でも、「地域学習と地域でのアクション」が多く生まれ、学校と地域の垣根を低くしたと言える。後述するように、「総合的学習の時間」に留まってしまう傾向は見られたものの、統合的な学びの体験を通して「持続可能な未来の担い手」としての意識が子ども達にも育まれた意義は少なくない。

●防災への意識

「10 年」の間に期せずして起きた一大事件は東日本大震災であった。ESD への取組みを日常でつづけてきた地域では、地域住民のいのちを守ることとしなやかに復興していくことに ESD の貢献があったと言われている。特に宮城県気仙沼市での防災教育をはじめとした取組みは世界的に見ても ESD の優良実践であると言える。こうした地域では、ESD は防災・減災意識をさらに高めており、「10 年」の後半にユネスコ本部等において強調されるようになった ESD 傘下の三大領域である「気候変動」「生物多様性」「防災（災害リスク削減）」の一領域は ESD によってより充実化されたと言えよう。

2）道半ばだが達成されつつある成果

●批判的思考

「ESD の 10 年」で「体験的・探求的に発見し、解決していくためのプロジェクトやカリキュラムが開発された」ことは成果として捉えられている。しかし、「10 年」の当初から標榜されてきた批判的思考や中長期的思考などの「高次の思考技法」（UNESCO による ESD の国際実施計画）については、道半ばと言わざるを得ない。それは ESD の構想時から温められ、「10 年」を通して強調されてきた思考であるにもかかわらず、定着したとは言い難い。このことを反映して、宣言では「批判的思考や判断力（中略）が役立つことが理解されました」という表現にとどまっている。

●時間意識

確かに、冒頭の「詩」にも挙げられているように、ESD を通して「時間」を意識するようになった生徒は少なくないであろう。しかし、地球温暖化（気候変動）に代表される現在の持続不可能性が過去のどのような開発から生じているのか、また現在の持続不可能性を助長するような現代人の豊かさを追求するライフスタイルや行動が未来にどのような影響をもたらすのかについて、長中期的な思考を養う学習は決して多くはなかったと言えよう。

●生徒の自尊感情と参画

ESD のプロジェクトやアクションを通して元気になった子どもや教師は少なくない。「リオ＋ 20（国連持続可能な開発会議）」の「私たちが望む未来」宣言でも強調されたように、若者のエンパワメントは世界共通の課題となっており、ESD ではこうした課題に対する具体的な事例が生まれたと言える。その点、宣言文では「自己肯定感の低さが問題とされる日本の子どもたちの内なる力を発揮させ、自信の獲得につながりました。」と表現されている。しかし、それが一過性のエンパワメントなのかどうかは一考に値する。「コミットメント（誓い）」に「ESD の魅力を広く社会に伝えるため、児童生徒の変容、教師の変容、学校・地域の変容を明確に示します。」と記されているように、「何をやったか」ではなく、ESD を通して生徒や教師が日常的に「どう変わったのか」を意識することが肝要であり、価値観やライフスタイルというレベルでの変容は少なくとも十分に共有されていないと言えよう。

●新たな教師の役割

宣言文には「ESD のビジョンに導かれた教師の意識に変容が生まれました。知識を伝達するばかりではなく子どもとともに学びながら、子ども中心の学びをデザインし、コーディネートする教師の姿勢は子どもたちを変え、子どもたちが変われば学校が、学校が変われば地域が変わるという実例が見られるようになりました。」と明記された。つまり、ESD によって教師は知識の伝達者ではなく、デザイナー、コーディネーター、ファシリテーターとしての役割を担うようになったのである。ただ、「実例」が見られるまでにとどまった感は否めず、こうした裾野が今後広まるかどうかについてもユネスコスクールに期される社会的ミッションであると言ってよい。

●自己変容と社会変容

「岡山宣言」では、ESD を実践する上で変容する教師の姿勢が子どもたちを変え、子どもたちが変われば学校が、学校が変われば地域が変わるという実例が見られるようになったという件がある。まさに他者(生徒)を変えようとする教育から、教師自らが変わり、その結果、生徒も変わり、学校や地域も変わる内発的な教育への変容が垣間みることができたというのは、希少ながらも「10 年」の成果であった。このような持続可能な社会への内発的な発展観は「自らと社会の変容のための学習」として「10 年」の後半でユネスコへの文書でも強調されるようになった。しかし、こうした考えの普及はまだ端緒についたばかりである。

3）課題

●グローバル・イシューへの取組み

宣言の「コミットメント(誓い)」にテーマ学習･協働学習として「気候変動、生物多様性、防災、持続可能な生産と消費等」の国境を越えたグローバルな課題が挙げられている。上記のグローバル・イシューは、国際的にはユネスコをはじめ、ESD の推進機関が「10 年」の当初から強調してきたトピックである。ところが、日本では、どちらかというと地域に強調点が置かれ、地球規模の問題解決は十分に取り組まれてこなかったという問題がある。国際的に見ると、日本の ESD は地域活動に矮小化されているという見方もできよう。国境を越えた気候変動や生物多様性というグローバル・イシューに取り組んでこそ、ESD のダイナミズムは発揮されるのではないだろうか。

●アジアの近隣諸国との持続的な交流と協力関係の構築

この 10 年で前述のバルト海プロジェクト（BSP）のようなプロジェクトは日本で生まれたのだろうか。その間、東アジアの関係性は決して望ましい状況にあったとは言い難いが、そういう時にこそ、ユネスコスクールはユネスコの理念である平和・非暴力の大切さをアピールできるようなプロジェクトを近隣諸国の学校と進めることが期待されていたのではないか。このことは、ユネスコスクールが標榜するミッションからして、明らかである。

既述の通り、日本の ESD は地域活動において優れた活動を展開し、多くの成果を挙げてきた。その一方で、BSP 等に見られる国境を越えた学校同士の問題解決学習は積極的に推進されてこなかった。「コミットメント（誓い）」にも「近隣のアジア諸国のユネスコスクールとのテーマ学習・協働学習」が課題として明記されたように、海外の優良事例から学び、東アジアでも気候変動や大量消費社会などの共通の課題に海を越えて共に取り組むことが求められている。[2]

●持続可能な生産と消費

「岡山宣言」の「成果」にはなくて、「コミットメント（誓い）」にある言葉の一つに「持続可能な生産と消費」がある。この言葉は、ユネスコ本部が ESD の具体的な取組みとして「10 年」の後半で強調した「気候変動」「生物多様性」「防災（災害リスク削減）」という3つのトピックに加えて、最終年の世界会議の直前に加わった4つめのトピックでもあり、「岡山宣言」でも最後の段階になって挿入された。既述のように、ESD の鍵概念が自己変容であるとすれば、持続可能性に関する知識をいくら習得したとしても、自らの行動やライフスタイルがそれに反したものであれば、どこかうそぶいた ESD 実践となってしまう。教師自らがまず ESD に則った「持続可能な生産と消費」活動を実践し、問題意識を内在化した上で生徒と学び合い、行動を起こしていくことが期待されている。

●価値観・行動・ライフスタイルの変容

「10 年」を評価する上でもっとも重要な文書である「国際実施計画」には、ESD では「価値観、行動、ライフスタイル」を持続可能な未来に向けて変容させていくことが目指される、と記されている。ここでは一時の変化（change）という言葉ではなく、みずからの一文化として内在するような変容（transform）という言葉が用いられていることに注目したい。確かに、これまでも子ども達によるアクションが見られる授業もあったのかもしれない。しかし、それは一過性のものであるかどうかを見極めることが肝要だ。ESD によって学校で節水や節電をするようになったとしても、深い次元で価値観が変わっていないのであれば、恐らくその

2　萌芽的ではあるが、アジア諸国の国境を越えた ESD の促進のための協働学習も生まれつつある。例えば、ESD Rice プロジェクト（Regional Initiative for Cooperation for ESD Promotion through rice）が挙げられる。詳細は、次を参照。http://esdriceproject.com

生徒は自宅や地域では浪費をしている可能性はあろう。問題解決学習はESDによってより活用されるようになったが、問題の解決で留まるのではなく、問題を生み出さないような価値観へと深い次元で変容されていなくてはならない。問われるべきは、教師や生徒の中でESD（的な価値観）が内在化しているかどうか、換言すれば、「ESDを生きている」か否かである。

3. むすびにかえて

おそらく上記以外にも、日本のユネスコスクールの課題は指摘され得るであろう。例えば、宣言文の成果の節ではなく、課題の節に現れる「ジェンダー」のように、ユネスコスクールであればこそ意識をもって取り組んでしかるべき課題にほとんど未着手の領域もある。

また、GAPそのものについても、「私たちは、さまざまな主体との対話と連携を通して、「国連ESDの10年」の後継プログラムである「ESDに関するグローバルアクションプログラム（GAP）」の5つの優先行動分野をつないでいきます。」と「コミットメント（誓い）」に記されているように、政策・学校等の組織全体での取組み・教師・若者・地域のそれぞれの領域が有機的に関連づけていくことの重要性が説かれている。[3]

国際実施計画等に示唆されているように、ESDはそもそも近代化の過程で分断された学びをホリスティックな営みに変えていく使命を帯びている。にもかかわらず、GAPでは5つの領域が別個に活動しているかのような構図が描かれてしまっているのである。この点、ESDの提唱国とも言える日本がGAPのよき牽引役を務めるためにも、政策と実践、学校と地域、教師と若者などを分断しない形で進めていくことが肝要である。これは政策策定者のみならず、現場の教師の意識の課題でもある。例えば、政策と若者、学校と地域というGAPの一見独立したかに見える領域を有機的に関連づけていく感性が求められているのである。

このように、ぜひとも各々のユネスコスクールやESD関係団体で、「10年」を終えたこの機に宣言文を「素材」にしてこれまでとこれからのESDについての対話を深めていってほしい。

3 「ESDに関するユネスコ世界会議」で採択された「あいち・なごや宣言」にも、相乗効果がもたらされるような手法で5つの領域を推進していくことが強調されている。（同宣言第13項）

最後に、冒頭に掲げた「詩」について触れ、本論のむすびとしたい。この詩について、冒頭に「ESDの本質を捉えている」と表した。その理由は自明である。「国連ESDの10年」がスタートする前にユネスコ本部で策定された国際実施計画には、ESDの目的は既存の教育の「再方向づけ（re-orientation）」であると明記されている。どこへの方向づけかというと、もちろん持続可能な未来への方向づけである。つまり、我々はESDというビジョンを共有することにより、地球社会を持続不可能にしつつある価値観や行動、ライフスタイルに影響を与えてきた旧来の教育の在り方じたいを変えていくというのが、ESDの本来の目的なのである。実は、最終年の締めくくり世界会議においても国際実施計画と照らし合わせる形でESDの本格的な評価が行われなかったことに対して、「10年」のあいだユネスコ本部でESDモニタリング評価専門家会合の一委員として世界各地のESD実践をモニターすることに従事してきた筆者にとっては内心忸怩たる思いがあった。その意味で、ESDの神髄について再び考える機会を与えてくれた「詩」に感謝しており、ユネスコスクールからこうしたメッセージが生まれたこと自体が救いでもあった。

教育とは、さまざまな現実に妥協をしつつ、形づくられてきた産物なのかもしれない。しかし、現実に拘泥しすぎると、教育ではなく訓練となってしまう。最近のグローバル人材を意識した能力育成などはその典型として見なすこともできよう。教育は人材育成と同義ではない。さまざまな教育宣言に表明されてきたように、教育が教育たるには、教育基本法（第一条）に明記されている人格の形成が何らかの形で保障されるための知恵が欠かせないのではないか。その知恵の一つは、とかく現実世界に拘ってしまう我々に「ビジョン（幻影！）」を抱かせるような言葉の共有であろう。グローバル化を意識した活用力や有用な知識の涵養がこれまでにないほどに唱和される昨今である。そんな趨勢の中、ESDをビジョンとして捉えることが、ポスト2014年の最重要課題なのかもしれない。

子供たちの学びの中にＥＳＤの考えを取り入れることによって、学びは３つのつながりをもつ。そのつながりの中で、学びは価値を増し、子供たちの心の中に生き続け、持続可能な未来を創造する力となっていく。

●子供たちの学びの中に、「人とのつながり」を

私とあなた　私と学校のみんな　私と地域のみんな　私と他の地域のみんな
私と世界のみんなへと　つながっていく。
だから、私は、見えないあなたと励まし合い、支え合える存在であるという尊さに気づき、何か行動したくなる。

●子供たちの学びの中に、「空間とのつながり」を

ここからそこへ　教室から校庭へ　校庭から地域へ　地域から私の国へ
私の国からあなたの国へ　そして世界へ　地球へ　私の世界は広がっていく。
だから、私は、どこの場所にも　かけがえのない宝が息づいているということに気づき、何か行動したくなる。

●子供たちの学びの中に、「時間とのつながり」を

今と明日とのつながり　今と過去とのつながり　今と近い未来とのつながり
今と遠い未来とのつながり　私の今は過去や未来と　つながっていく。
だから、私は、この大きな時間の流れの中で、大切な責任を負っているということに気づき、何か行動したくなる。

注：上記メッセージ（「詩」）は、宣言の冒頭に記載するにあたって、メッセージを寄せた東京都稲城市立稲城第二小学校（ユネスコスクール）の承諾を得て起草段階で若干の改訂を加えている。

国連ＥＳＤの１０年の成果とユネスコスクールの課題

江東区立八名川小学校　校長
手島利夫

国連 ESD の 10 年（DESD）の成果について

DESD の始まった２００５年当時は、世界的な環境問題への認識は、一般的には語られることも少なく、まして ESD という言葉そのものも、その理念も全くと言ってよいほど知られていなかった。

洞爺湖サミットを経て、「環境」に対する意識が高まってきたのと同様に、ようやく今年になって、様々な場で「持続可能」という文字を目にするようになってきた。

DESD への取り組みは最終年を迎え、ようやく社会全体で持続可能性に向けた意識改革を達成しようとしている。

学校教育においても、ESD の普及は「何のために学ぶのか・何のために教えるのか」という教育の原点への認識を新たにさせるものであった。

変化が激しく、厳しいグローバルな世界で生き抜く力を育むには、どのような教育を進めたらよいのかを模索する１０年でもあった。正解が与えられるものでなく、自分たちで探さなくてはならない時代においては、問題に気付き、自ら学ぶ問題解決能力や創造的なコミュニケーション能力、そしてそれらを支える健康や体力（生きる力）の育成が何よりも重要だという認識が深まってきた。

今回のユネスコスクール世界大会や ESD ユネスコ世界会議の開催を機に、日本の教育の質的転換が進もうとしている。それは、次の４点である。

❶産業革命以来続いてきた教え込みによる知識理解中心の教育から、探究的で、学び方そのものも重視される教育への転換
❷教科中心の教育から教科横断的・総合的な教育への転換
❸ ESD カレンダーを基盤にし、総合的な学習の時間を中心としたホール

スクールアプローチの具現化

❹「知識の伝達者」から「学習コーディネーター」として、子どもの学ぶ心に火を付け、学習の方向性を与え、様々な人や事実との出会いや発表の場を準備するといった教師の役割の転換

DESD の成果は、日本の教育に大きな変革を与え、新しい時代の教育に向かわせているのである。

ユネスコスクールが取り組むべき課題

ユネスコスクールが取り組むべき主な課題は、次の２点である。

❶ネットワークを通じて、日本や世界の学校や関係機関と連携し、学び合い、**平和で安全で持続可能な世界を実現**すること

❷そのために有効な**教育内容・手法の開発・実践・共有と普及に努める**こと

日本のユネスコスクールが、これらの課題解決に向かって努力してきたことは間違いない。数の上でも、この１０年間で約２０校から８０７校にまで増加し、全国大会等を通じて理論を学び合い、実践を高め合ってきた成果は大きい。また、そのような中から今回 ESD 大賞に輝いた岡山市立京山中学校のように、「つけたい力を明確にした ESD カレンダー」を活用し、全教育活動をまとめ上げた好事例が生まれていることもうれしい限りである。

更に、文部科学省を挙げて ESD カレンダーを全国の学校に普及・啓発していただけるということも持続可能な社会づくりへの貴重な一歩である。

ただ全体的に見てみると、ユネスコスクールに加入したことによる学校の変化が「学校教育の活性化」（５５％・２５年7月教育新聞記事）程度に留まり、「教育方法の改善」（２６％・同）にまで及んでいないことが問題なのである。

グローバルな視点から学校教育のあり方をとらえ直し、教師が変わり、その結果として子どもが変わり、保護者や地域を変えていくことこそが重要なのである。これを示せない限り、誰もついてはこないのである。ユネスコスクールが取り組むべき「平和で安全で持続可能な世界の実現」への方法には、教育方法の改善とその成果を示すことが欠かせないのである。

そして、それを事実として示せる学校、あるいはそのような学校づくりに向かって校長がリーダーシップを発揮して、持続的に取り組んでいる学校こそがユネスコスクールの名に値するのである。

これからのユネスコスクールは、数の爆発的な拡大と同時に質が問われる時代を迎えるべきである。そしてそのためには優れた指導者、あるいはそれを目指す者が集い、連携を深めていくことが欠かせない。

『ユネスコスクール岡山宣言』に「私たちは、互いに学び合い、活動の質を高めていくために自発的に組織されるユネスコスクール同士の全国ネットワークをつくります。」と書かれたのはこのためである。

今年中に全国ネットワークを作り、岡山宣言の具体化に向けて取り組みを進めていこう。

「これからのユネスコスクール」を考える

帝塚山学院大学国際理解研究所顧問
米田伸次

２０１４年１１月、岡山市で開催されたユネスコスクール世界会議は、「ユネスコスクール岡山宣言」（以下､「宣言」）を採択して幕を閉じた。「宣言」にはこれからのユネスコスクールを、今回の世界会議を出発点として、さらなる発展をめざしていくという強い願いと決意、希望が盛られている。

「国連 ESD １０年」間、ユネスコスクールは確かにその数は著しく増加したが全国的にみるとその数は僅かにすぎず、しかも地域偏重、質の問題など課題も多く、持続可能性への不安も一部でささやかれている。とはいえ、1960 年代はじめにユネスコの ASP ｎｅｔ（Associated Schools Project）に参加し、2000 年代のはじめから日本の ASP の再生に取り組み、ユネスコスクールの普及促進にかかわってきた筆者にとっては、今回の 1,000 名を越えるユネスコスクール世界大会（第６回全国大会）の熱気と数々の実践発表に接し、日本のユネスコスクールのこれからに、期待と希望を禁じえなかった。

以下、字数の制限のため簡潔ながら「宣言」を中心に、「宣言」のベースにもなっている今回の ESD 世界会議で採択されたグローバルアクションプログラム（以下、「GAP」）、日本ユネスコ国内委員会の「多様化時代におけるユネスコ活動の活性化についての提言･2014 年３月」（以下､「提言」）、さらに、今回ＡＣＣＵでまとめられた「ユネスコスクール ESD 優良実践事例集」（以下、「事例集」）などを参考に「これからのユネスコスクール」への筆者の期待と希望（課題も含めて）を３点にしぼってコメントしてみたい。

その一は、児童・生徒の変容と地域で学ぶことの意義である。これは「宣言」の「成果」でも強調されている。「事例集」を見ると、児童・生徒の変容が「成果」の最多を占めている。「国連 ESD １０年」間のユネスコスクールのネットワークへの加盟についても当初圧倒的に多かったトップダウン方式から、近年はボトムアップ方式に少しずつ移行しつつあるという。その理由の一つが、児童・生徒の変容にあるとみられる。ユネスコスクールの実践発表等の研修会での一般教員の関心もこの児童・生徒の変容に集中している。

では、何が児童・生徒を変容させる主要な原因になったのか。「事例集」をみると児童・生徒が地域で人、社会・文化、自然との出会いでの学びが変容の主な原因であることがわかる。注目されるのは、児童・生徒の変容が教員、学校、さらに地域をも変容させているという事例が少しずつ増えてきていることである。これをみると、地域の学びは決して学校の学びの補完ではないことがわかる。学校と地域の一体化、協働は、「GAP」や「提言」の今後の ESD の取り組みの方向といってもよいだろう。では、児童・生徒の変容とは具体的に何なのか。「事例集」では、地域への愛着と誇り、自己肯定感、問題解決力、行動力、コミュニケーション力、表現力、思考力、想像力の育みなどさまざまに指摘されている。

ところで ESD の学びでは、「持続可能な社会づくり」に向けての「力」、とりわけ、生き方、考え方といった価値観の育みが重視されている。児童･生徒の、地域での人、社会・文化、自然との豊かな出会いのなかで育まれる自己肯定感や地域でのさまざまな出会いのなかでの生命（いのち）のつながり、「他者」に生かされているという自覚、さらに地域への愛着と誇り（ローカルアイデンティティ）は、ESD のいう「持続可能な社会づくり」に向けての原動力となっている。こうした地域に根差したローカルな学びでの「力」は、同時にグローバルな学びの「力」にもなっていくに違いない。近年、大学生のなかに地域の再生、ローカルへの志向が芽生えつつあるとの指摘もある。ESD の学びで培われた児童･生徒の「力」は、将来、日本を変えていく、さらに世界をも変えていく「力」になっていくことを期待したい。

その二は、東日本大震災（以下、「大震災」）と ESD との関係についてである。これが「宣言」にも言及されていることに注目したい。
「提言」には ESD ユネスコ世界会議へのアプローチとして、「大震災」の防災、復旧への貢献、経験が ESD の在り方にどんな影響を与えたのか世界に発信すべきと提言している。「事例集」には､被災地気仙沼市の小･中学８校のユネスコスクールの実践のすべてが、「大震災」の体験を踏まえての地域とのかかわり、地域復興、防災意識の育みを中心に紹介されている。児童・生徒たちは、つながりの大切さ、生命（いのち）の尊厳について学び、地域を思うこころが以前より強くなったという。被災地

へは、ユネスコスクールや全国の多くの学校から、ボランティア活動も含めさまざまな支援の手が差しのべられた。児童・生徒たちは、被災地とのかかわりから「してあげる」から生きることへの自信、自己肯定感を手にし、生命（いのち）の尊厳、真剣に生きることの大切さを逆に学んだという。

「大震災」の後、日本の危機、「大震災」から何を学んだのかについて一時期、さまざまなコメントが識者やメディアなどの間で話題となった。現代文明の問い直しを、日本の再生の契機に、価値観、生き方の見直し、生命（いのち）の尊厳、つながりの大切さの再確認を等々である。しかし、これらの多くは、すでにESDが私たちに提起してきたものではなかったのだろうか。「提言」では、「大震災」の経験の発信をという。では、ユネスコスクール世界会議でこうした児童・生徒の学びがESDの学びとしてどれだけ世界に発信されたのだろうか。いや、その前に国内でどれだけ学び合ってきたのだろうか。「大震災」が意識的に少しずつ遠くなりつつあるといわれる昨今、「大震災」からの学びをどう共有するかは、ESDを持続可能なものにしていくかとも深くかかわっているように思えてならない。

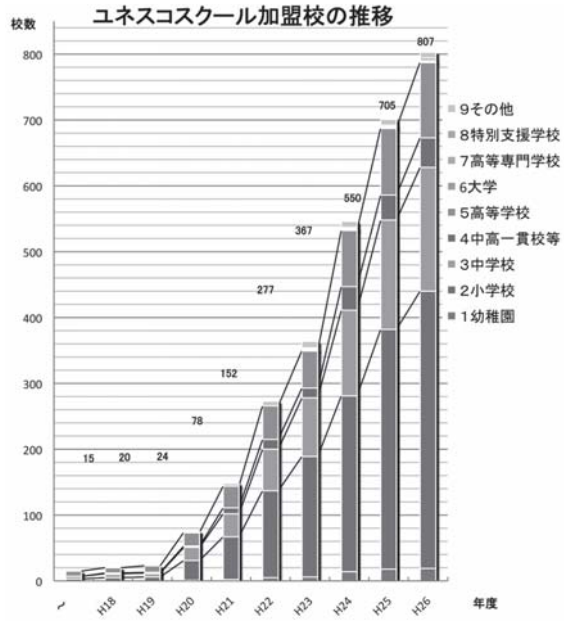
その三は、筆者が「宣言」で最も注目したのが「教育を変えていく原動力としてESDを進めていく」という提言である。それは、筆者が最もESDに期待し、ESDの持続性を担保する基本的な提言と考えているからである。しかし、与えられた字数は残り僅か。以下、私たちの課題としてポイントを二つだけ記すに止めたい。一つは、ESDはグローバル時代化に向けてどのような人間を育もうとしているのか、その可能性を私たちはどこまで自分のこととして受け止めているのかである。二つは、「教育を変えていく原動力としてのESD」という視点からどれだけユネスコスクールの学びの内容や方法を課題と受け止め討議してきたのかである。

データで見るユネスコスクール

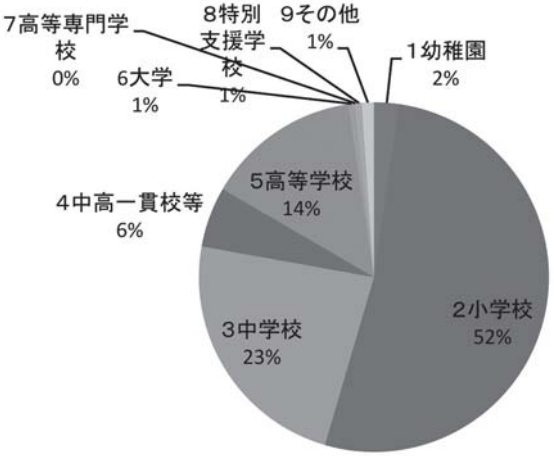
1953年、ユネスコは、世界の学校でその理念を実現する事業を開始しました。世界15か国33校の参加を得て実験的に開始された事業に、日本からも、6校の学校が参加しています。以来、ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校のネットワークとして発展し、現在、181か国に、10, 000校以上のユネスコスクールがあります。

「ユネスコスクール」は
ASPnet（UNESCO Associated Schools Project Network）に加盟している学校の日本での呼称です。
文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールをESDの推進拠点として位置づけています。

■日本のユネスコスクール

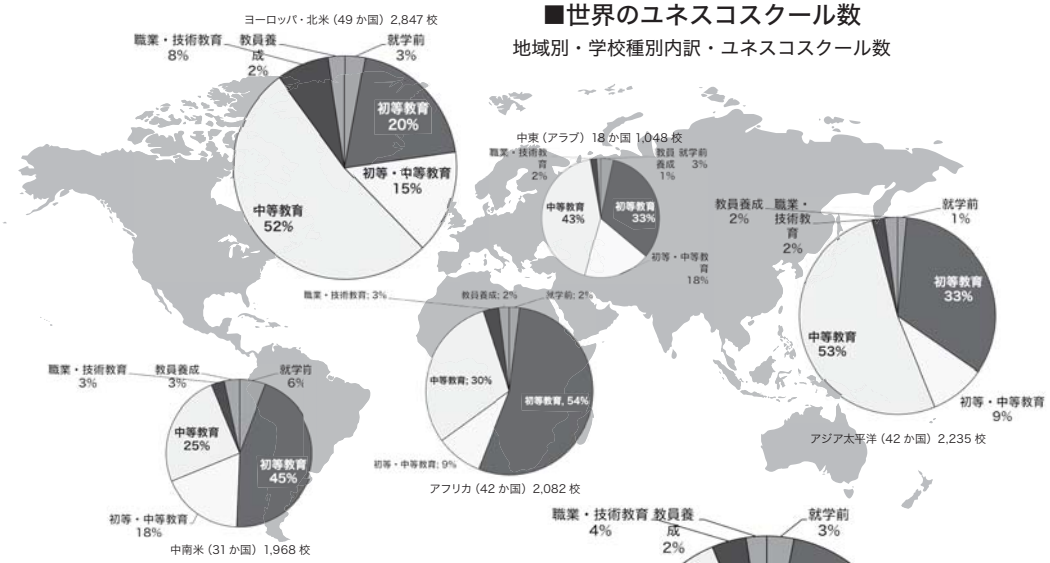


■学校種別内訳

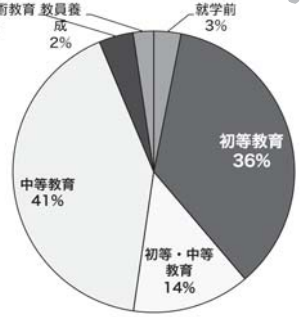


■世界のユネスコスクール数

地域別・学校種別内訳・ユネスコスクール数



世界のユネスコスクール
学校種別内訳



世界合計（181 か国）10,180 校

ユネスコスクール公式ウェブサイトの活用

交流の窓口

ユネスコスクール公式ウェブサイトをご活用ください。

http://www.unesco-school.jp/

ユネスコスクールは、全国、全世界にひろがるネットワークです。
ユネスコスクール公式ウェブサイトを、ユネスコスクール同士の交流の窓口としてご活用ください。

●主体的な情報の発信や交流に役立てることができます。

▶学校情報を掲載し、更新ができます。
▶ユネスコスクール公式ウェブサイトと自校のホームページをリンクすることができます。
▶オリジナルの教材やおすすめの教材を紹介することができます。
▶研究発表会や交流会等の催事の案内を発信できます。
▶情報発信や意見交換を行うことができます。
▶全国のユネスコスクールに、一斉メールを出すことができます。
▶国外のユネスコスクールとの交流を始めるためのページを活用することができます。

●ユネスコスクールについて知ることができます。

▶全ユネスコスクールのリストが掲載されています。（県別、学校種別に整理されています）
▶各ユネスコスクールから日本国内委員会に毎年提出される年次報告が掲載されています。（平成 23 年度分から）

●ユネスコスクールに有益な情報を得ることができます。

▶ユネスコスクールやＥＳＤに関する研修、イベントなどが随時掲載されます。
▶ユネスコスクールの好事例や、役にたつ教材を紹介しています。

●『ユネスコスクール公式ウェブサイト活用ガイド』では、サイトの活用方法を分かりやすく紹介しています。ユネスコスクール公式ウェブサイトからダウンロードしてご活用ください。

※一部機能を使うためにはユネスコスクール公式 Web サイトにログインが必要です。ログインパスワードはユネスコスクール事務局が発行しています。

●ユネスコスクール公式ウェブサイトに、こんな機能が欲しい、というご提案を歓迎します。

●お問い合わせ、ご提案、ご意見は以下までお願いします。
ユネスコスクール事務局：webmaster@accu.or.jp

UNESCO Associated Schools in Japan as Bases for Promoting ESD – Current Status and Way Forward

Introduction

The United Nations Decade of Education for Sustainable Development (UN Decade of ESD) that launched in 2005 was concluded at the World Conference on Education for Sustainable Development held in Nagoya City, Aichi, in November 2014, and the follow-up programme of the UN Decade of ESD, the Global Action Programme (GAP) on ESD, has officially started. Taking this opportunity, this book is published for the purpose of providing information to further improve the quality of ESD practices while clarifying the characteristics of ESD practices that have been promoted by UNESCO Associated Schools in Japan, compiling the outcomes and identifying issues to be tackled.

UNESCO Associated Schools are member schools of the UNESCO Associated Schools Project Network (ASPnet). The Schools realize the ideals of UNESCO that are enshrined in the Constitution of UNESCO. ASPnet spans worldwide. These schools are positioned as the focal point for promoting ESD in Japan by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, and the Japanese National Commission for UNESCO.

There are more than 10,000 member institutions of ASPnet in 181 countries around the world, creating the world's leading network of schools. In Japan, the number of UNESCO Associated Schools has increased rapidly since the beginning of the UN Decade of ESD (2005 - 2014). With 807 UNESCO Associated Schools as of October 2014, Japan has the world's largest membership of ASPnet. Further contributions are expected for UNESCO Associated Schools in Japan to promote ESD under their own initiatives and as members of the network.

This book is organized while making use the two projects that were implemented in connection with the UNESCO ASPnet International ESD Events, which were held as one of the Stakeholder Meetings of the World Conference on Education for Sustainable Development.

The first project was the publication of a book titled UNESCO Associated Schools ESD Good Practices in Japan: in Commemoration of UNESCO ASPnet International ESD Events 2014. To compile this book, reports about ESD practices were submitted by many UNESCO Associated Schools and schools that are in the process of applying to become UNESCO Associated Schools across Japan. We utilized these reports, especially those selected to be included in the book, which serve as valuable resources describing the characteristics of ESD activities being implemented in UNESCO Associated Schools in Japan.(Note)

The other concerns the process from drafting to the adoption of the Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan: Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD, adopted by participants at the 6th Japan's National UNESCO ASPnet Conference held at Okayama University in November 2014 as part of the UNESCO ASPnet International ESD Events. The outcomes and issues of UNESCO Associated Schools discussed and summarized by the Schools and their supporters in the process of the declaration, from drafting to its adoption, are included in this book.

It is difficult to define the overall characteristics of activities of UNESCO Associated Schools because there are various ESD practices and backgrounds for promoting them depending on their school type, location, reasons to participate in the ASPnet and approaches to implementing ESD. However, the process of compiling the UNESCO Associated Schools ESD Good Practices in Japan and that of the Okayama Declaration, from drafting to its adoption, provided us with valuable opportunities for identifying issues that require further efforts as well as the outcomes made by UNESCO Associated Schools in Japan during the UN Decade of ESD.

This book includes the discussions of specialists who have long been providing support for activities of UNESCO Associated Schools and those of school principals and teachers from the standpoint of practitioners of ESD in line with the themes that emerged from the two projects mentioned above.

The number of UNESCO Associated Schools has increased nationwide through efforts made by guardians, cooperators in local communities, boards of education and many groups and organizations which support schools in various aspects, in addition to efforts made by the schools themselves. We hope this book will help the member schools further promote ESD and improve the quality of activities towards the realization of a sustainable society under their own initiatives and as members of the network of Japan, which is linked to the world-wide network.

As this book is published in both Japanese and English, we hope that it will be a useful source for overseas UNESCO Associated Schools and relevant individuals to understand UNESCO Associated Schools in Japan.

Serving as the Office of UNESCO Associated Schools, the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) intends to make further contributions to the activities of UNESCO Associated Schools, the expansion the of ASPnet and the promotion of ESD utilizing our various experiences, including support for the application process for membership and for activities after joining ASPnet, management of UNESCO projects such as the international collaborative learning project (ESD Rice Project) implemented by domestic and overseas UNESCO Associated Schools, and implementation of teacher exchange programs between Japan and overseas countries.

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

Note
ESD good practice schools were selected from applications submitted by schools through screening by members of the Committee for Drafting Declaration and Selecting Good Practices of Japan's UNESCO ASPnet that was set up to organize the 6th Japan's National Conference on UNESCO ASPnet (as part of UNESCO ASPnet International ESD Events). The Committee also drafted the Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan: Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD. The Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) operated as the Office of the Committee.

Table of Contents

Preface

Chapter 1 : ESD in UNESCO Associated Schools: An Overview

119 Characteristics of ESD practice at UNESCO Associated Schools in Japan — Sumino Yoshihisa

Chapter 2 : ESD in UNESCO Associated Schools: The Outcomes and Challenges

128 Curriculum Development and Implementation for ESD — Oikawa Yukihiko

138 Abilities and Attitudes to Be Developed in ESD at UNESCO Associated Schools — Tanahashi Kan

143 Transformation in the Awareness of Teachers, Schools and Communities — Sumita Masaharu

150 ESD and Enhancement of Self-affirmation — Nakazawa Shizuo

154 Interschool Exchange of UNESCO Associated Schools — Ichinose Tomonori

158 Interschool Exchange and "ESD Rice Project" — Mochizuki Hiroaki, Hanzawa Yukari

161 Possible Roles of Schools in Collaboration with Diverse Local Stakeholders — Suzuki Katsunori

164 ESD and Reconstruction from the Disaster of East Japan Earthquake & Tsunami — Oikawa Yukihiko

169 ESD and Teacher Training — Kato Hisao

173 The Joy of Intergenerational Learning — Asai Takashi

175 Mechanism to Carry on ESD in a Sustainable Manner – from a School Viewpoint — Suzuki Katsunori

178 Mechanism to Carry on ESD in a Sustainable Manner – in the Social Context — Nakazawa Shizuo

181 Evaluation of Schools – a case of Nagatadai Elementary School — Sumita Masaharu

185 Development of School Utilizing Perspective of ESD - For integration of instruction and evaluation to increase educational effect - — Tokuyama Junko

189 Evaluation Activities as a Part of ESD learning to Maintain Hopes for a Sustainable Future - Writing Auto-ethnography that Serves as Evidence for Evaluation - — Narita Kiichiro

Chapter 3 : Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD

194 The Okayama Declaration

198 Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan: Achievements and Issues of ESD in Japan — Nagata Yoshiyuki

207 Outcomes of the United Nations Decade of Education for Sustainable Development (DESD) and Issues of UNESCO Associated Schools — Tejima Toshio

210 Think About Future UNESCO Associated Schools — Yoneda Shinji

Annex:

213 Facts and Figures of UNESCO Associated Schools

215 Making Use of the Official Website of UNESCO ASPnet (Associated Schools Project Network) in Japan

＊ Opinions expressed in each article are those of authors and does not represent those of the publishers and/or editorial group.
＊ Photographs included in the document were provided by the author, unless otherwise noted.
＊ Titles/positions are at the time of the meeting.
＊ Japanese people's names are spelled in family-name-first order in accordance with the Japanese custom.
＊ The original text of this document is in Japanese. This is the English version of the Japanese text. In the English version, some of the charts used in the discussions have been omitted.

Chapter 1

ESD in UNESCO Associated Schools: An Overview

This chapter shows the outcomes and characteristics of Education for Sustainable Development (ESD) at UNESCO Associated Schools in Japan, by analyzing and examining ESD practices at 84 schools included in the book UNESCO Associated Schools ESD Good Practices in Japan: In Commemoration of UNESCO ASPnet International ESD Events 2014, which was prepared with the aim of sharing Japanese ESD good practices domestically and internationally, in preparation for the UNESCO World Conference on Education for Sustainable Development (November 10-12, 2014).

Characteristics of ESD practice at UNESCO Associated Schools in Japan

Sumino Yoshihisa
Graduate School of Education, Okayama University

1.Encounter of UNESCO Associated Schools in Japan and ESD

In 2008, the Japanese National Commission for UNESCO positioned UNESCO Associated Schools as centers for promoting ESD, and presented policies to encourage the accession to UNESCO Associated Schools. This has allowed UNESCO Associated Schools in Japan to play roles for making efforts to develop educational contents and methods of ESD, which approaches various global issues and fosters leaders to realize a sustainable society, as well as for having inter-school exchange through an international network.

The number of UNESCO Associated Schools in Japan, which have become the leaders of promoting ESD in this way, was 24 in January 2008, and increased to 807 in October 2014.

How has ESD in UNESCO Associated Schools been developed along with the quantitative development of UNESCO Associated Schools? I would like to show the results and characteristics of ESD in UNESCO Associated Schools in Japan, which built up and developed during the Decade of Education for Sustainable Development. Here I am going to deal with and analyze the ESD Practices of 84 schools published in the UNESCO Associated Schools ESD Good Practices in Japan, which was edited for the purpose of sharing the good practices of ESD in Japan domestically and internationally toward the UNESCO World Conference on ESD.

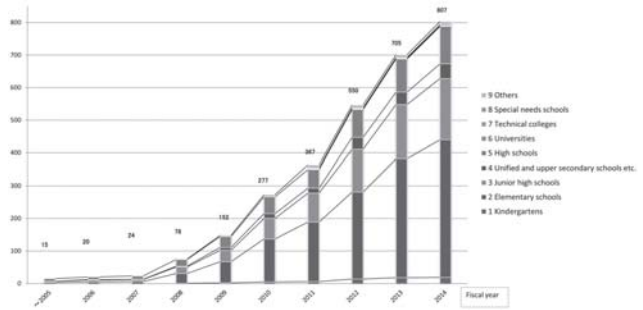


Figure 1: Transition in the number of UNESCO Associated Schools
Data from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology

2.Positioning of the ESD curriculum in school curriculum

(1)ESD curriculum centering on the Integrated Study periods

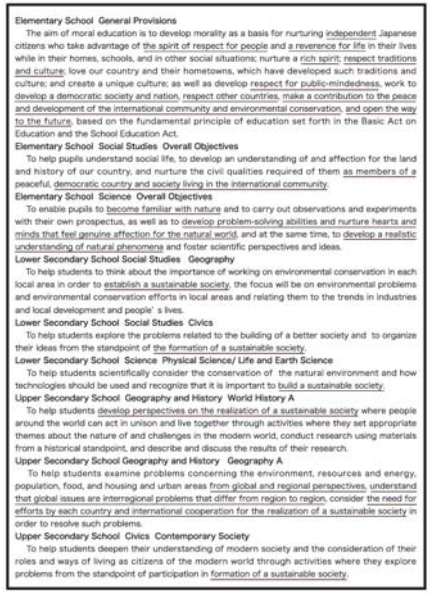
Most of ESD in UNESCO Associated Schools in Japan is practiced centering on the Integrated Study Periods. The Integrated Study Periods were established in elementary schools (from the third grade), junior high schools, high schools, and special support schools when the Curriculum Guidelines, which are the national standards of the curricula in Japanese schools, were revised in 1998. Different from the conventional curricula in Japanese schools, which have been constructed by systematic instruction in each subject, the Integrated Study Periods are the periods when students explore cross-subject and integrated learning tasks, which are set according to the actual situations in the community and school, voluntarily and cooperatively. The Curriculum Guidelines present four learning tasks, which are international understanding, information, environment, and welfare/health, and each school has developed and implemented curricula with these tasks.

The ESD curriculum in the UNESCO Associated Schools in Japan has been developed centering on the Integrated Study Periods. The curriculum of conventional Integrated Study Periods has been to take regional nature, history/culture/industry, etc. as a subject, to utilize regional human resources and to focus on experiential activities/practices. The UNESCO Associated Schools in Japan have evolved the ESD curriculum by adding a goal to foster qualities and abilities required for leaders to create a sustainable society, and adding a viewpoint of interdisciplinary exploratory activities, social participation, and an inter-school network. The ESD curriculum is constructed through 12 years from the first grade to the twelfth grade by adding the Life Environment Studies provided to the first and second grades, which have a similar nature with the Integrated Study Periods.

Furthermore, centering on the Life Environment Studies and Integrated Study Periods, the ESD curriculum through the whole school educational activities has been constructed by linking with other subjects and areas (such as moral education and extra-curricular activities). The ESD Calendar shows this structurally. The ESD Calendar, which was developed by Toshio Tejima, the Principal of Yanagawa Elementary School in Koto City, Tokyo, and his circle show how each subject, Integrated Study Periods, extra-curricular activities, etc. are linked in education in each grade during the year by color-coding each unit and connecting them with a line to show the association clearly. In addition, Fukuyama City Ekiyanishi Elementary School has developed the ESD Association Calendar, which clarifies the reasons each unit is connected, by evolving the ESD Calendar. These approaches have materialized ESD throughout the school.

(2)Positioning of ESD in the national standards of curricula (Curriculum Guidelines)

UNESCO Associated Schools in Japan can establish the multidisciplinary ESD curriculum centering on the Life Environment Studies and Integrated Study Periods, because the philosophy and contents of ESD are positioned in the goals and contents of each subject and area in the Curriculum Guidelines as the national standards of curricula. Japanese school education has a structure such that the minimum ESD can be practiced at all schools as long as the curricula are established and practiced in accordance with the national standards.



Elementary School General Provisions

The aim of moral education is to develop morality as a basis for nurturing independent Japanese citizens who take advantage of the spirit of respect for people and a reverence for life in their lives while in their homes, schools, and in other social situations; nurture a rich spirit; respect traditions and culture; love our country and their hometowns, which have developed such traditions and culture; and create a unique culture; as well as develop respect for public-mindedness, work to develop a democratic society and nation, respect other countries, make a contribution to the peace and development of the international community and environmental conservation, and open the way to the future, based on the fundamental principle of education set forth in the Basic Act on Education and the School Education Act.

Elementary School Social Studies Overall Objectives

To help pupils understand social life, to develop an understanding of and affection for the land and history of our country, and nurture the civil qualities required of them as members of a peaceful, democratic country and society living in the international community.

Elementary School Science Overall Objectives

To enable pupils to become familiar with nature and to carry out observations and experiments with their own prospectus, as well as to develop problem-solving abilities and nurture hearts and minds that feel genuine affection for the natural world, and at the same time, to develop a realistic understanding of natural phenomena and foster scientific perspectives and ideas.

Lower Secondary School Social Studies Geography

To help students to think about the importance of working on environmental conservation in each local area in order to establish a sustainable society, the focus will be on environmental problems and environmental conservation efforts in local areas and relating them to the trends in industries and local development and people' s lives.

Lower Secondary School Social Studies Civics

To help students explore the problems related to the building of a better society and to organize their ideas from the standpoint of the formation of a sustainable society.

Lower Secondary School Science Physical Science/ Life and Earth Science

To help students scientifically consider the conservation of the natural environment and how technologies should be used and recognize that it is important to build a sustainable society.

Upper Secondary School Geography and History World History A

To help students develop perspectives on the realization of a sustainable society where people around the world can act in unison and live together through activities where they set appropriate themes about the nature of and challenges in the modern world, conduct research using materials from a historical standpoint, and describe and discuss the results of their research.

Upper Secondary School Geography and History Geography A

To help students examine problems concerning the environment, resources and energy, population, food, and housing and urban areas from global and regional perspectives, understand that global issues are interregional problems that differ from region to region, consider the need for efforts by each country and international cooperation for the realization of a sustainable society in order to resolve such problems.

Upper Secondary School Civics Contemporary Society

To help students deepen their understanding of modern society and the consideration of their roles and ways of living as citizens of the modern world through activities where they explore problems from the standpoint of participation in formation of a sustainable society.

Figure 2
Source: "UNESCO Associated Schools and Education for Sustainable Development" by the Japanese National Commission for UNESCO, 2008 (revised in 2014)

The current Curriculum Guidelines require development of "qualities and abilities to find a problem on their own, to learn for themselves, to think by themselves, to make a decision and take an action voluntarily, and to solve a problem in a better way," to improve the motivation for learning, and to nurture the attitude to work on a problem voluntarily. Developing qualities and abilities to work on a problem voluntarily in every subject and area has also expanded the implementation of ESD throughout the school.

(3)Characteristics of the ESD curriculum at High schools

While elementary schools and junior high schools are compulsory education schools, which have high uniformity nationwide, high schools have various specialized courses and have freedom to arrage

curricula at their descretion relatively. Therefore, high schools have innovated various curricula in order to implement ESD.

One of them is an ESD curriculum that makes use of the characteristics of the course. For example, Akita City Akita Commercial High School deals with "ecological business," which integrates commercial education and ESD. They work on "product development which contributes to environmental conservation and becomes profitable" by collaborating with local recycled products manufacturers, including a company that sells boards made of rice husks and another that recycles waste tires to make and sell mats. Senior High School at Sakado, University of Tsukuba practices collaborative learning on the environmental issues and development of a sustainable society in the countries where the schools with which they have international exchange are located, taking advantage of the multiplicity of their Comprehensive Course that has specialized subjects on agriculture, technology, welfare, and business.

Another example is an ESD curriculum through a subject/class which is not on the Curriculum Guidelines and unique to the school. For example, Osaka Prefectural Sano Senior High School, which has established "International Understanding" as the school's original class in their Department of International Culture, makes effort on ESD to learn varied issues that arise in the world such as environment, poverty, and conflicts, and to respect diverse culture and history of the world and to acquire international sensibilities that enable students to assert themselves. Hokkaido Shari Senior High School has established in their integrated course "Introduction to the Nature in Shiretoko" as the school's original class, and has developed an ESD curriculum on the environmental conservation in Shiretoko, a World Natural Heritage, centering on this class. Okayama Prefectural Yakage High School constructs the ESD curriculum mainly in two of the school's original classes, which are "Environment" to consider the natural environment of the community and "Yakage Study" to consider the development of a sustainable society in the community. Hiroshima Junior & Senior High School has named part of the Integrated Study Periods "ESD Study," and has developed an ESD curriculum, where teachers of each subject give lessons in a relay form with sustainable development as a theme to foster the capacity to comprehensively consider and judge sustainability from scientific grounds.

3.Characteristics of the learning tasks and contents for the implementation of ESD

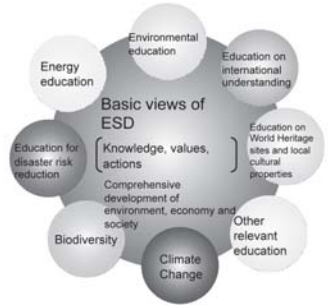
(1)Characteristics of the natural environmental study

ESD in UNESCO Associated Schools in Japan deals with various issues that threaten sustainability of society. In Japan, the issues shown in the figure are foreseen.

Among others, most ESD is practiced for working on the environmental study. Investigate the actual situations of the flora and fauna in the region; find out their value and problems; and pursue their conservation. In so doing, most schools focus on rice fields. Rice fields are the nature close to children, where many creatures live in a harmonious way, and are the best educational material to learn the diversity of creatures and relations among them. Furthermore, rice fields are the fields of rice farming, which is agriculture, where students can also learn about the relationships between creatures and human society/life and the issues of the local industry and economy. In short, an ESD curriculum is, through rice fields, constructed to consider the diversity of creatures and the ecosystem, the relationship between the natural environment and human society/life, and food education (education on what and how to eat and live). Some schools provide learning on rice fields and rice farming from an international viewpoint through the "ESD Rice Project" as described below.

Not only investigating the actual situations of the natural environment in the region, but the learning has been evolved to enable students to realize that such situations lead to global warming and global issues on the ecosystem and that the life and energy issues of human contribute to the destruction of the natural environment. This has allowed the environmental study to have the philosophy of ESD.

In addition, in 2011 Japan suffered from an unprecedented natural disaster named the Great East Japan Earthquake. What is expected in ESD from this experience is to think of the link between nature



Basic concept of ESD
The relevant types of education must be linked from the standpoint of establishing a sustainable society from a comprehensive approach.

Figure 3
Source: "UNESCO Associated Schools and Education for Sustainable Development" by the Japanese National Commission for UNESCO, 2008 (revised in 2014)

and human society - how to enable the conservation of the natural environment and the continuousness of a regional society to coexist not just by preserving nature as is, and how to suppress natural threat while maintaining the blessings of nature.

(2)Characteristics of international exchange and multicultural understanding

ESD in the UNESCO Associated schools in Japan does not have an adequate link with the International UNESCO Associated Schools network. Even so, the schools included in the ESD Good Practices in Japan have practiced international inter-school exchange. For example, 13 out of 35 elementary schools have interchange with foreign countries in some way. International exchange at elementary schools depends on the organizations and projects to support it.

The "ESD Rice Project" organized by the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO and Miyagi University of Education provides the joint practice of ESD through rice for the schools in six Asian countries (India, Indonesia, South Korea, Thailand, the Philippines) including Japan that live on rice. Osaki City Onuki Elementary School, Kanagawa Prefectural Arima High School, and Senior High School at Sakado, University of Tsukuba have taken part in the Project. The "International Intercultural Mural Exchange" of Japan Art Mile collaborates in producing a mural as a result of collaborative learning with foreign schools, in which Tama City Minami-Tsurumaki Elementary School, Higashiura Town Ogawa Elementary School, Kobe University Secondary School, Okayama Ichinomiya High School, and other schools have taken part. Some schools are engaged in international exchange by taking part in CSR (Corporate Social Responsibility) activities conducted by private corporations.

Some high schools are engaged in the practice of ESD on an international basis: Osaka Prefectural Sano Senior High School conducts a study tour to improve the attitude and quality required for the leaders of a sustainable society with multicultural understanding through experiencing life in Nepal while having support from a local NGO; Ritsumeikan Moriyama Junior and Senior High School works on the Global Village Program for supporting the independence of the poor in Bangkok with the cooperation of an NPO; and Morioka Chuo High School, together with 21 sister schools in 18 countries/regions in the world, provides learning on global environmental issues, along with the environmental issues and energy issues in each region.

4.Experiential activities and practices in the local community, and the system to support them

(1)ESD has positioned the experience and practice in the local community

ESD in the UNESCO Associated Schools in Japan places emphasis on the task to link with the local community and to foster leaders of sustainable development in the local community. Therefore, especially elementary schools put much value on finding the beauty of the local community (treasure hunting), realizing such beauty, and being proud of the local community where students live. To realize this, not only learning the actual situations of the natural environment (such as plants, insects and animals) in the local community, they learn the values where biodiversity is maintained in the natural environment, and develop a sense that they "want to protect the nature in the community." At the same time, they learn and experience the cultural heritage (such as traditional performing arts and historical architecture) in the community to develop a sense that they "want to inherit the local culture." Junior high schools have students make proposals for sustainable development in the community, and practice what they can do. High school students have more scientific regional research and more interdisciplinary discussion with a global perspective, and approach the practice as the leaders for the change in the local community.

A representative example of dealing with the nature and culture in the local community is World Heritage study by the schools that have a UNESCO World Natural Heritage or World Cultural heritage site in their community. For example, Hahajima Elementary School and Ogasawara Elementary School in the Ogasawara Islands, and Hokkaido Shari Senior High School in Shiretoko work on ESD on the World Natural Heritage sites. Also, Fujioka City Mikuri-Nishi Elementary School in the area of the Tomioka Silk Mill and Related Sites, and Nara City Seibi Elementary School and Seibi-Minami Elementary School in Nara, an ancient capital, work on ESD on the World Cultural Heritage sites.

(2)System to support ESD in collaboration with the local community

Such ESD in the local community is enabled by a system to support it in the community.

First of all, there is support by local residents' organizations and NPOs, which work on the conservation of the natural environment and the inheritance of the cultural heritage in the local community,

and international support and exchange programs. They give guidance as “guest teachers,” provide support in the experiential activities in the local community and social practice, and provide opportunities to continue with the practice in the local community after the school lessons.

Secondly, community halls and public facilities in the community serving as bases of the activities of local residents and NPOs also have important roles. While schoolteachers get transferred and cannot immediately acquire sufficient knowledge and experience on the history and current situations of the local community where the school is located, there is information collected on the history and current situations of the local community in a community hall, where there are human resources who can give instructions in them. A community hall can be a base of ESD targeted for adults as well as having a role to support ESD at school.

Thirdly, there is support by the board of education as the educational administration agency in the local community. In Kesennuma City, Tama City, Okayama City, Omuta City, and some other cities, many public elementary schools and junior high schools in the city have joined UNESCO Associated Schools, and created an interschool network to politically promote ESD required in the local community. In so doing, they implement teachers’ training seminars on ESD jointly by elementary schools and junior high schools in the city, provide an opportunity where students and teachers share the progress in ESD and give a presentation to the local residents, and support the interchange among UNESCO Associated Schools and the establishment of a network.

Lastly, universities and research institutions in various regions deepen the investigation and discussion in the local community, and contribute to the construction of the ESD curricula. Especially the universities which participate in the Interuniversity Network Supporting the UNESCO Associated School Project Network support schools in various regions in applying to UNESCO Associated Schools, support UNESCO Associated Schools in implementing ESD, and play a role in establishing the cooperation, interchange, and collaboration between UNESCO Associated Schools and various organizations and among UNESCO Associated Schools.

These are the characteristics of ESD in UNESCO Associated Schools in Japan. I hope that these approaches by UNESCO Associated Schools in Japan will serve as ESD implementation models for UNESCO Associated Schools in the world, and that UNESCO Associated Schools will contribute to sustainable development in the world.

Chapter 2

ESD in UNESCO Associated Schools: The Outcomes and Challenges

This chapter summarizes the outcomes that UNESCO Associated Schools produced during the UN Decade of ESD as well as summarizing the challenges that should continue to be tackled, under 15 different themes.

Curriculum Development and Implementation for ESD

Oikawa Yukihiko
Member of Japanese National Commission for UNESCO
Researcher of Miyagi University of Education

1 Introduction

In Japan, which advocated for the "United Nations Decade of Education for Sustainable Development (DESD)," a variety of ESD (Education for Sustainable Development) programs in school education have been implemented and ESD curricula for carrying out the programs have been developed in the last ten years centering on UNESCO Associated Schools, of which members dramatically increased during the decade. Based on these accumulated practices, this paper discusses a method for developing ESD curriculum to be incorporated into school curriculum and its effective implementation.

2 The fundamental principles of ESD curriculum development

In promoting ESD in schools, it is necessary to consider ESD as an educational philosophy and method that reforms the conventional education, and to keep the following points in mind when developing and implementing ESD curriculum[1] and program[2].

1) Fitting in the local context and considering sustainable development (SD)

ESD must be community-based learning. It is necessary to understand the strengths (light) and problems (shadow) in the region, to always be conscious of sustainable development (SD) of the region, and to translate its principles into educational activities that contribute to the realization of sustainability.

2) Promoting changes in learners' behaviors

ESD aims to change the learners' awareness and behaviors and to facilitate practical actions to realize a sustainable society by reforming the conventional school education that centered on transmission and acquisition of knowledge to the education that places emphasis on experience and inquiries for applying knowledge to practice, and by fostering each individual with abilities and attitudes to contribute to a sustainable society.

3) Interdisciplinary learning centered on human activities

ESD should not be provided in conventional vertically-divided school subjects and areas of study. It should be interdisciplinary learning centering on sustainable human activities while integrating and interrelating the environment, economy, society and culture, aiming at a sustainability-oriented community and society.

4) Various learning methods are guaranteed

Diversity must be guaranteed not only in the contents and areas of study but in learning methods in ESD. It is important to actualize learner-centered learning for the realization of sustainable society through intentionally and systematically preparing hands-on, inquiry-based and problem-solving learning activities and learning settings for exchanges and field studies.

5) Integrated into the whole educational activities

It is possible to implement ESD in the conventional school subjects by focusing on the elements of sustainability (the concept that constitutes sustainability), and on abilities and attitudes that should be fostered. However, in order to make ESD more effective, it is important to promote more experience-oriented and inquiry-based learning, extending beyond specific subjects and areas of study, utilizing Periods of Integrated Study, etc. Furthermore, it is possible to promote more everyday- and school culture-based ESD through efforts made by the entire school education by considering such aspects as school administration, teacher training, and collaboration with the local community. In addition, collaboration between ESD, Social education (Non-formal Education) and lifelong education (Informal Education) is important, extending beyond the framework of school education (Formal Education).

6) Value-oriented and enhancing quality of education

ESD is said to be the education that places an emphasis on "value," not on contents, meaning why you learn (purpose) is emphasized more than what you learn (content). ESD should be regarded as learning that seeks for behaviors and a way of life that are based on sustainable value (quality), not as learning to acquire knowledge (quantity).

7) Fostering global perspectives and collaboration

Challenges that impede the realization of sustainable society cannot always be solved by a single region or country. The human race is faced with many problems, including global warming, biodiversity crisis, disputes and poverty that should be solved by the entire world. In order to tackle these challenges that spread on a global scale (Global Issue), ESD should educate future leaders for the sustainable society who are equipped with global perspectives, and help them cultivate knowledge, think of possible solutions and foster solidarity to solve these problems under international collaboration.

1 In this paper, this refers to an annual curriculum.
2 In this paper, this refers to an educational program at the learning unit level.

3 Characteristics of ESD curricula and programs in Japan

ESD in school education in Japan centering on UNESCO Associated Schools can be categorized into the following types by curricula and programs (Table 1).

Table 1 Category of ESD curriculum in Formal Education

Type of ESD	Examples, good practices	Advantages
Cross-Curriculum Type	ESD Calendar	Easy to identify links to subject studies, and improved awareness of ESD
Project-Based Type	D-Project ESD Rice Project RICE Project	Clear mission and direction
Topic-based Type	World Heritage Education Peace Education	Provides opportunities to demonstrate outstanding features of the community(e.g. cultural heritage) as well as local challenges
Integrated -Curriculum Type	ESD Program Chart Problem-Solving-Learning	Enables systematic and inquisitive community-based program development
Club -Activity Type	UNESCO Clubs (at high schools and universities)	Lasting initiatives and strong linkage to UNESCO activities

1) Cross-curriculum type

A typical example of this type is the "ESD calendar,"[3] developed by Shinonome Elementary School in Tokyo, and then spread nationwide. From the viewpoint of ESD, the learning units and matters of each subject and area of study in a learning unit chart are color-coded by fields of study such as international understanding, welfare and environment, etc., and are connected with lines. An advantage of this type is that the whole educational curriculum can be overviewed from the perspective of ESD, and it is easy to understand the relation between subjects, areas of study and learning units at a glance, which leads to a raise in consciousness of ESD in the whole educational activities. For schools that start ESD for the first time, this scheme is very effective as an introduction to ESD because it is easy to grasp the big picture of ESD. However, it is hard to see the process of inquiry-based learning and problem-solving that are said to be important in ESD. Furthermore, some examples revealed that similar ESD calendars were made in different regions because the same textbook and learning unit chart were used. Thus problems remain in terms of the development of unique ESD curriculum that addresses issues in the region and reflects the characteristic of the school.

2) Project type

This type provides ESD as a "project" in which a certain learning activity's purpose, direction and mission are clear and easy for children to understand. In addition, children can feel a great sense of accomplishment when they complete the project and thus it is easy to enhance motivation for advancing the project. In particular, this project type is effectively implemented in junior high schools and high schools where subject-based teacher assignment is adopted, because it is easy for students and teachers to participate. Examples of this type include "D-Project"[4] conducted in collaboration with UNESCO activities and "ESD Rice Project"[5] implemented by ACCU and "RICE Project" implemented by Miyagi University of Education. It is pointed out, however, that some projects tend to be only a one-time event, and are difficult to regard as an ESD program that can be incorporated into the school curriculum.

3) Theme type

This type of ESD curriculum makes the most out of strengths and problems in the region where children live and highlight them as a theme of their project. Projects under a certain theme enable children to deliver messages inside and outside Japan. For example, in the "Study of World Heritage Site in Nara,"[6] children review and fully appeal the value of cultural heritage that remains in their region. Other examples include "Peace Education" in Hiroshima and "Study on pollution" in Minamata, in which children communicate lessons learned from experiences and negative legacies of the region to the future generations and other regions. As an ESD program, there is a problem in this type regarding how to incorporate other sustainability-related issues that are not included under the theme into the ESD program, or how to integrate other issues into the theme.

4) Integrated curriculum type

This type of ESD intends to realize community-based creative ESD programs by making maximum use of "Periods of Integrated Study," which was phased into the Japanese school system, as an axis for its implementation, while fully guaranteeing the hands-on, inquiry-based and problem-solving learning activities that are emphasized in ESD. While the curriculum is developed and implemented through associating with each subject and seeking outside partnerships, the key factor is a storyline that is student-centered, hands-on, inquiry-based and problem-solving learning which are uniquely and creatively designed by each school. Examples of this type include the "ESD Program Chart"[7] developed by Omose Elementary School in Kesennuma City, which had started ESD before DESD launched, and "Tama-ichi problem-solving learning"[8] developed by Tama Daiichi Elementary School in Tokyo. The former school emphasizes hands-on and inquiry-based learning programs in particular, and the latter puts emphasis on problem-solving process.

In order to develop and implement these curricula, a cooperative system within a school is essential because it is necessary to consider students' developmental stages and coordination with other grade levels. In addition, teachers need advanced skills in making educational materials using local resources, fieldwork, and management of inquiry-based and problem-solving learning, and therefore establishment of partnerships with local communities and experts, and teacher training are essential. Furthermore, considering how to improve the curriculum is another issue to be dealt with for sustainable efforts while taking into account the ever-changing state of

3 Shinonome Elementary School & Yanagawa Elementary School (2014) "Development and Popularization of an ESD Calendar that Energizes School Education in Japan and the World" from pp.42-43 of the "Japan Report", The Interministerial Meeting on the "United Nations Decade of Education for Sustainable Development"(ed.)

4 D-project 2014 http://w ww.d-project.jp/2014/unesco/index.html (2014)
5 ESD Rice Project http://esdriceproject.com/ (2014)
6 "Nara City Board of Education et al. (2009) "We Love Nara! - World Heritage Learning,"
7 Kesennuma City Board of Education et al. (2009) "Mobius for Sustainability 2002 — 2009"
8 Tama Daiichi Elementary School (2014) "Nurturing Children to Be Independent with Problem-Solving Abilities: Towards a Sustainable Society,"

students and local situations.

5) Club activity type

Some high schools and universities which have been engaged in UNESCO activities or a member of UNESCO Associated Schools have "UNESCO Club." They are carrying out UNESCO activities or implementing ESD as club activities and some clubs have a long history. The UNESCO Clubs are taking advantage of their characteristics as clubs that enable them to engage in practical actions for ESD, and thereby have strong ties with local communities. Some groups have been continuously engaged in grass-root activities in cooperation with the local UNESCO Association. However, because of their informal characteristics, very few ESD activities conducted by the clubs have been incorporated to formal curricula of schools, and thus they are conducted as non-formal activities.

4 Three approaches for the development of ESD curriculum-Focusing mainly on DRR

In order to incorporate ESD into curriculum in school education and implement ESD as formal educational activities, we propose the following three approaches; 1) Infusion Approach in which ESD is incorporated into the existing subjects and areas of study, 2) Integrated Approach in which curriculum is comprehensively developed and carried out by utilizing Periods of Integrated Study, etc., while correlating the subjects, and 3) Holistic Approach in which ESD is promoted by the whole school, taking such aspects into consideration as school administration, teacher training and collaboration with the local community, not to mention the development of curriculum. By taking these approaches incrementally while considering the actual state of each school and its formation of curriculum, ESD curriculum will be incorporated into the whole school curriculum and education activities, which will spread as everyday affairs.

1) Infusion Approach

This approach promotes ESD learning within the context of existing courses of study by highlighting the learning topics and contents related to ESD in the existing subjects and areas of study, and clarifying what abilities and attitudes should be fostered for ESD. This does not mean the change of framework of existing subject contents, but regard the contents from the perspective of ESD. By clarifying the abilities and attitudes emphasized as ESD in a subject, while achieving the objectives of the subject itself, and by deepening and developing the learning as ESD, ESD is infused into the existing subjects. National Institute for Educational Policy Research basically adopted this approach in its "Study on the Education for Sustainable Development (ESD) in School Education."

For example, as shown in Fig. 1, many learning topics and contents related to disaster prevention are contained in the existing subjects and areas of study for sixth graders. By reviewing the contents from the perspective of education on disaster prevention and developing a curriculum for the purpose of constructing sustainable society while correlating the subjects, education on disaster prevention can be realized as ESD (Fig.1).

However, the infusion approach is not sufficient to develop ESD curricula. Limited by the framework of curriculum of existing subjects, its objectives and contents of teaching and time, it is possible that the necessary contents and activities as ESD cannot be guaranteed. In fact, some teachers have difficulties in deciding to which they should give priority, the objective of the subject or the purpose of ESD. These two primarily do not contradict each other, but complement each other. It is, however, difficult to clarify the relations between them and promote ESD in daily classes. Above all, it is difficult in this approach to construct curriculum in which students learn in a dynamic and interdisciplinary manner, extending beyond the framework of subjects, in the process of inquiry-based learning and problem-solving that are emphasized in ESD.

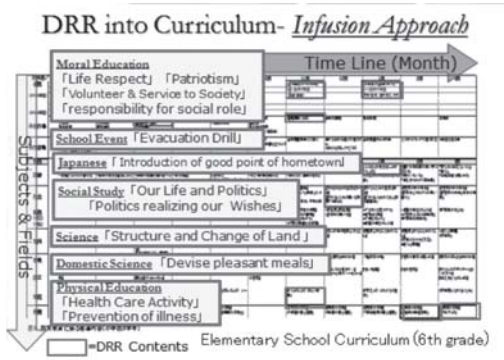


Fig. 1 Infusion Approach into School Curriculum

2) Integrated Approach

Whereas ESD is basically implemented in subject areas in the infusion approach, the "integrated approach" guarantees inquiry-based learning and problem-solving processes extending beyond the framework of subjects and develops a curriculum as ESD. It is possible to construct an ESD-oriented curriculum that emphasizes problem-solving and linkage by integrating important learning contents and activities as ESD by utilizing Periods of Integrated Study, etc. that were impossible to be guaranteed within the framework of subjects.

For example, when developing a curriculum from the viewpoint of disaster prevention, "regional disaster prevention," "making of disaster prevention map" and "disaster prevention-related learning at home and among different grade levels" are critical components in education on disaster prevention, although they are not treated in the curriculum of existing subjects and areas of study as shown in Fig. 2. In addition, "future community development after disaster" is not contained in textbooks, but "sustainable community development" after disaster is essential from the perspective of ESD. Developing new components of disaster prevention learning and making a curriculum in which children learn with a certain storyline by utilizing Periods of Integrated Study, etc., will enhance their abilities of problem-solving and awareness for connections with other people and communities (Fig. 2).

Fig. 2 Integrated Approach into School Curriculum

In order to develop an ESD curriculum by this integrated approach, teachers need creative abilities to design an interdisciplinary and inquiry-based curriculum while taking the strengths and problems in the region into consideration, examining the students' interests and concerns and their developmental stages, and coordinating with other grade levels. In the curriculum development, establishment of partnerships with local communities and experts, and teacher training are effective, and a tool to support curriculum design is also necessary. Kesennuma City Board of Education has issued "ESD Curriculum Guides"[9], "Mobius for Sustainability"[10] (Fig. 3) and "Disaster Education Sheet"[11] (See "Recovery from the Earthquake and ESD") and distributed them to schools in order to help teachers design an ESD curriculum. Utilizing these support tools, teachers can develop and implement an ESD curriculum in accordance with the actual condition of each school.

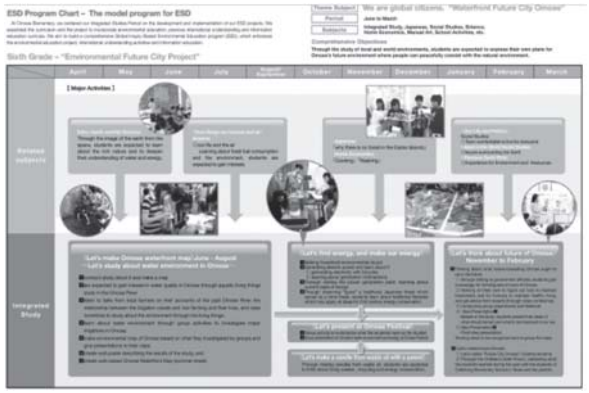


Fig. 3 ESD Program Chart of 6th grade at Omose Elementary School in Kesennuma City
Source from "Mobius for Sustainability2002 – 2009" (Kesennuma City Board of Education et al 2009)10

9 Kesennuma Teachers' Researching Group (2010) "Development and Implementation of ESD Curriculum based on Environmental Education", Kesennuma City Board of Education(ed.)
10 Kesennuma City Board of Education et al. (2009) "Mobius for Sustainability 2002 – 2009", Oikawa Y.(ed)
11 Kesennuma Teachers' Researching Group (2014) "Disaster Education Sheet" Kesennuma City Board of Education et al.

3) Holistic Approach

It is necessary to develop a framework in which the whole school promotes ESD using the holistic approach by incorporating the principles of ESD not only into the curriculum itself but to other aspects such as school administration, teacher training, and collaboration with local community (Fig. 4). Through these efforts, ESD will become common in school education and spread to parents and local communities. The school itself serves as a local hub for the promotion of ESD and contributes to the sustainable community building as a driving force. These are specified in the second of priority action areas of Global Action Programme (GAP)[12] issued at the "UNESCO World Conference on ESD" held in Nagoya City. It is expected that educational institutions including schools strive to promote ESD in a comprehensive manner.

Fig. 4 Holistic Approach into School Education

5 Clarification of abilities and attitudes in ESD curriculum

When developing an ESD curriculum, it is necessary to specifically determine what abilities and attitudes should be developed in ESD in order to define the purpose and direction of learning and to assess students' development through the learning. In clarifying what abilities and attitudes should be developed in ESD, each school is generally using one of the following three frameworks in the present school education in Japan.

The first framework is based on the scheme for objectives and assessment of existing subjects and areas of study defined in the Courses of Study, focusing particularly on the following three points: 1) interest, motivation and attitude, 2) ability to think, ability to make decisions and ability to express themselves, 3) knowledge and understanding. (There is a slight difference in wording and scheme depending on the subject). Some schools are still using this conventional framework to set goals and conduct assessment for ESD. Other schools independently define the abilities and attitudes to be developed in ESD and assess students' development based on the "ability to communicate" and "ability to solve problems," etc. observed during the "Periods of Integrated Study."

12 Japanese National Commission for UNESCO (2013) "Education for Sustainable Development (ESD) and UNESCO Associated Schools"

The second framework is based on the "abilities to be developed in ESD" proposed by the National Action Plan for UNDESD. The abilities include: 1) values related to sustainable development (ability to show respect for people, respect for diversity, non-exclusiveness, equality of opportunity, and respect for environment), 2) systematic thinking (understanding of the background to problems and phenomena, multidimensional and comprehensive standpoint), 3) ability to think of alternatives (critical thinking) 4) ability to collect and analyze information, 5) communication skills, 6) leadership.

The third framework, which has been spreading rapidly in schools in recent years, is "seven abilities and attitudes for ESD,"[13] proposed by National Institute for Educational Policy Research. This framework was developed while comprehensively taking into consideration the objectives and assessment scheme defined in the Courses of Study and abilities to be developed proposed by UNESCO mentioned above, and key competencies identified by OECD, and then categorized into the following seven abilities and attitudes: 1) critical thinking ability, 2) ability to predict future images for making plans, 3) ability to think in multifaceted and comprehensive ways, 4) ability to communicate, 5) attitude to cooperate with other people, 6) attitude to respect for connections, and 7) attitude to participate willingly (Table 2).

Table 2 ESD and OECD Key Competencies

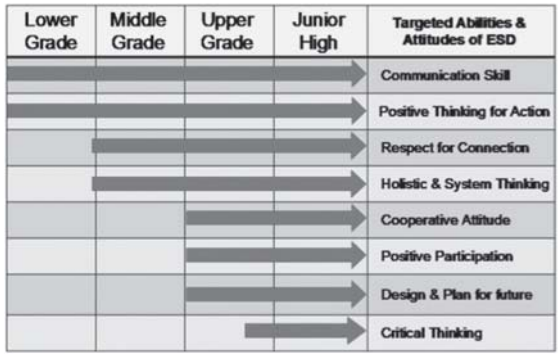
Categories	Competencies	ESD Ability/Attitude
1. Use tools interactively	・Use language, symbols and texts interactively ・Use knowledge and information interactively ・Use technology interactively	1. Ability to think Critically 2. Ability to predict and to plan the future 3. Ability to think versatility and systemically
2.Interacting in Heterogeneous Groups	・Relate well to others ・Cooperate, work in teams ・Manage and resolve conflicts	4. Ability to Communicate 5. Cooperative attitude towards others
3. Acting autonomously	・Act within the big picture ・Form and conduct life plans and personal projects ・ Defend and assert rights, interests, limits and needs	6. Respectful attitude towards connection 7. Spontaneous and positive attitude towards participation 8. Positive attitude towards thinking for action *

Source from National Institute for Educational Policy Research (NIER)

These three frameworks are only examples, and it is not necessary to incorporate all of these abilities and attitudes and make children acquire all of them in one project. Each school needs to make their original framework and apply it to their curriculum by considering what abilities and attitudes they should focus on, select and complement depending on their students' developmental stages and learning contents (Table 3).

13 National Action Plan for UNDESD (2006) "Education for Sustainable Development as Part of the School Curriculum (Final report),"

Table 3 Abilities and Attitudes of ESD according to developmental stage



6 Conclusion -Children and teachers together weave ESD curriculum

We have discussed the basic views and methods when developing ESD curriculum in school education based on ESD practices which have been implemented in Japan. What is important in developing ESD curriculum is to consider how to realize inquiry-based learning in which children proactively engage in their own theme, not to merely fill in the format of the curriculum by incorporating too many activities and abilities to be developed. In order to realize such learning, we should pursue education to make children understand the local strengths and challenges they face, connect with a variety of people and subject matters, acquire knowledge and means through many experiences to live harmoniously with nature, community, society and the world, and put them into practice. Efforts made by both teachers and children to weave ESD stories that are full of excitement along with a sense of necessity and seriousness lead us to a sustainable future that can be realized through education.

Abilities and Attitudes to Be Developed in ESD at UNESCO Associated Schools

Tanahashi Kan
President, National Society of Environmental Education
in Elementary and Junior High Schools

1 Abilities and attitudes to be developed in ESD

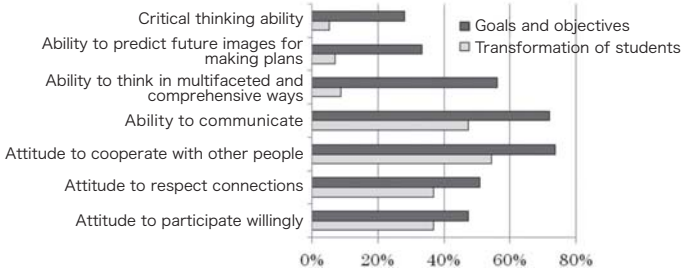
In order to promote the practices to realize a sustainable society, the necessary abilities and attitudes should be developed. Considering ESD from the viewpoint of students' developmental stages, the development of abilities and attitudes (academic abilities) is an important issue of ESD in elementary and junior high schools. Ever since the OECD started the Programme for International Student Assessment (PISA), improving academic achievement has become one of the important missions in schools in Japan, as well as in the world. It is difficult for teachers to find values in education, including ESD, without considering issues of academic abilities. The development of abilities and attitudes is an important point to consider, as well as the qualitative improvement of UNESCO Associated Schools, in order to increase schools that practice ESD.

At the opening of the plenary session of the UNESCO World Conference on ESD, Ms. Irina Bokova, Director-General of UNESCO stated that ESD is high-quality education, but abstract and difficult to understand, and thus, it needs to be specific and easily understandable. She also pointed out the evaluation as a challenge. In order to make ESD easier to understand, the abilities and attitudes to be developed in ESD and its teaching methods need to be clarified in the instructions. Evaluating ESD programs is impossible unless the abilities and attitudes to be developed are specified. Repeating a cycle of implementation of an ESD program with a specific goal and the conduct of its evaluation will improve ESD and make it high-quality education.

2 The present status of UNESCO Associated Schools

The National Society of Environmental Education in Elementary and Junior

The seven abilities and attitudes to be developed in ESD



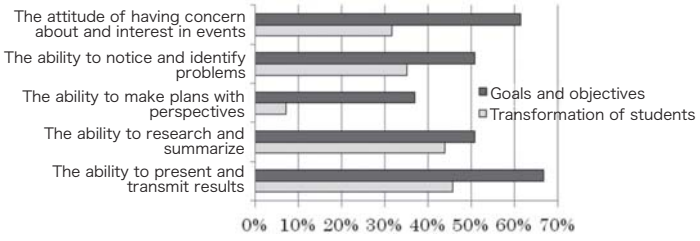
High Schools sent questionnaires to a total of 530 elementary and junior high schools across Japan participating as UNESCO Associated Schools in summer 2014, and collected and analyzed the questionnaire responses. The response rate was 38 % . The questionnaire items included 1) ESD and school management, and 2) abilities and attitudes to be developed in ESD at each school and the actual performance of students. The chart on the left shows a part of questionnaire item 2) and the results of junior high schools. Similar results were obtained from elementary schools. Although it was not a complete survey, critical thinking ability, the ability to think in multifaceted and comprehensive ways and the ability to make plans showed lower percentages. The results revealed that there is a general concern that their development of abilities and attitudes is insufficient as a member of UNESCO Associated Schools. They are expected to continually improve the quality of ESD. The first step is to clarify the abilities and attitudes to be developed in ESD at each school.

3 What are the abilities and attitudes to be developed in ESD?

The examples of abilities and attitudes proposed by National Institute for Educational Policy Research include those such as critical thinking ability, which had not been focused on in school education in Japan. Methods of the instructions have not yet established, making it difficult for teachers to understand and achieve learning outcomes.

Abilities to be developed in ESD proposed by the National Action Plan for UNDESD include: 1) values related to sustainable development; 2) systematic thinking; 3) the ability to think of alternatives; 4) the ability to collect and analyze information; 5) communication skills; and 6) leadership. In addition, the OECD identified key competencies. The meanings of these academic skills required for the realization of a sustainable society and those of abilities and

Abilities and attitudes to be developed in problem-solving learning



attitudes, which are said to be the 21st century-academic abilities, are not explicitly understandable and thus hard to teach them.

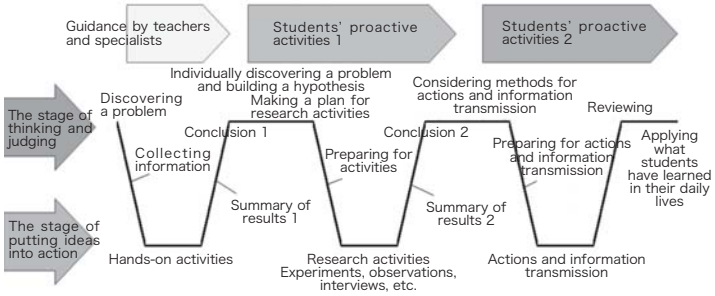
Since there are many problems to be solved in order to realize a sustainable society, we focus on problem-solving skills to be developed in ESD. It will be easier to understand that abilities and attitudes are developed through thinking and discussion taught in a problem-solving process that were regarded as important but rarely put into practice in school education. We define the abilities and attitudes that should be developed in ESD practiced in elementary and junior high schools centering on problem-solving learning as follows: 1) the ability to identify problems, 2) the ability to make plans, 3) the ability to research and take action, 4) the ability to summarize the results, 5) the ability to transmit the results, 6) the attitude necessary for cooperating with other people, 7) the attitude necessary to proactively engage in activities, and 8) the attitude necessary to apply what one has learned to one's behavior and real life.

Are UNESCO Associated Schools providing students with programs based on the learning process of problem solving? In the questionnaire mentioned previously, we asked questions about problem-solving skills corresponding to the content of learning activities. The ability to make plans showed a lower percentage of transformation of students.

4 Specific and easy-to-understand teaching methods

It is often the case that elementary and junior high schools implement ESD activities in cooperation with local communities on the educational issues of the environment, international understanding and information. How to instruct students to proceed with the activities is considered more important than the topic of the activity itself. We, therefore, employ a teaching approach taking advantage of the problem-solving learning process mentioned earlier. The chart below shows the process of problem-solving learning that has been developed at Tama Dai-ichi Elementary School, Tama City, Tokyo, where I work. Teachers show this chart to students so that they can get perspectives of their activities.

The process of problem-solving learning in the period for integrated studies at Tama Dai-ichi Elementary School



Teaching Example: Goya (bitter gourd) Project, 4th grade elementary students, Period for Integrated Studies, 25 hours

Goyas are used for students to learn about the sprouting and growing of plants in science class. Students grew goyas in plant pots made from milk cartons. In doing research on goyas, they found out that there are not enough goyas used for green curtains, so they decided to distribute 300 pots of goyas to people living near the school. Teachers encouraged students to proactively engage in this project, including making a plan for distributing goyas and putting that plan into practice themselves. The entire process was organized by the students through discussion, including the growing of the goyas, putting the pots in bags, preparing written instructions for growing them, how to distribute them in front of a station, dancing the Eisa (Okinawa folk dance) to attract people's attention and making a signboard. The students also decided to call for contributions for victims of the Great East Japan Earthquake. They distributed goyas in front of a station in their school district, and all the goyas were given out within only 30 minutes. The contributions they collected were sent to the city of Kesennuma. As one teacher said, "I never imagined that children would be able to carry out a project like this on their own," and the elementary school students contributed to society through this activity. This experience brought them a great sense of accomplishment, and transformed them to having positive attitudes toward various activities.

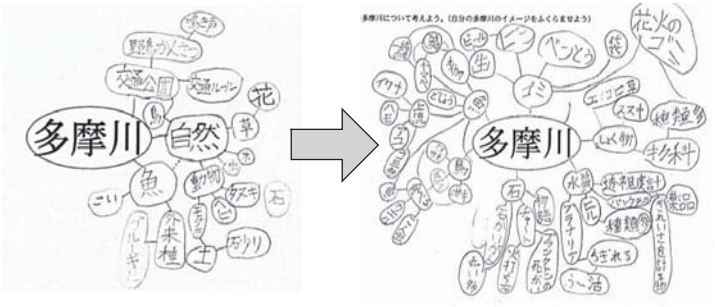
5 How to evaluate ESD programs

Evaluation is essential for innovating and improving learning programs. As it is difficult to evaluate problem-solving skills, and inappropriate to evaluate them in numerical values or marks, it is neccesary to consider how to observe and judge progress in students' abilities and attitudes. We propose a method in which students' problem-solving skills are evaluated at each stage of an activity. The following three points are easy to implement.

1) After finishing each activity, students keep a record of what they did and noticed in the activity in a card for reviewing.
2) Drawing image maps at the beginning of the activity and at the end of it and compare them in terms of the number of words and the complexity of the connections of the words. Evaluating the ability to discover problems, knowledge and understanding of the relations between events. The image

maps in the below were drawn at the beginning and end of the activity of the Tamagawa River observation.

3)Evaluation using a portfolio is important. We evaluate students' transformations based on printed materials and other resources, pictures and craftwork used in an activity. The portfolio can be effectively used for evaluating the planning, implementing of investigations, summarizing, and transmitting of information. It is also effective for the learners themselves to review their activities and deepen their understanding of the theme.



Transformation in the Awareness of Teachers, Schools and Communities

Sumita Masaharu
Principal, Nagatadai Elementary School, Yokohama City

ESD is an outstanding educational vision and has great potential. Its attractiveness is "transformation." In order to develop human resources who build a sustainable society, transformation in awareness is essential, as well as the development of qualities and abilities.

At the end of lectures and training seminars on ESD, such questions are frequently asked as "what do you teach in teacher training seminars for ESD?" and "What should I do to transform teachers' awareness?" It is generally regarded that success and failure of the promotion of ESD in schools depends on whether or not teachers have sufficient motivation to promote it. Promotion of ESD is clearly stated in the national Basic Plan for the Promotion of Education, and specific methods for promoting it is also presented. MEXT (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) included ESD in its Courses of Study and provided an implementation plan to promote ESD in not only UNESCO Associated Schools but also all schools across Japan. In spite of these efforts, ESD is still not well recognized and a limited number of schools are promoting it. This is partly because "transformation," the attractiveness of ESD, has not been clarified and presented.

It is necessary to present what outcomes and effect ESD produced, especially the transformation that occurred in the awareness of teachers, schools and communities, as one of the attractiveness of ESD. Each of us should continuously think about action, foster willingness to take action and continue such action, try to realize the best future we envision to turn an unsustainable society into a sustainable one, and present what desirable ESD should be like.

We asked questions to participants of the 6th National Meeting of UNESCO Associated Schools regarding what transformation occurred through implementing ESD. Persons who can talk about the transformation with confidence are those who have realized the attractiveness of ESD.

Transformation in Teachers' Awareness

"Through classes and everyday life, I became aware of connections between school subjects, connections with other people and local communities, which I had not noticed before. I realized how immature I am, and now I am motivated to learn more. I think I have somewhat changed."

"I, a teacher, do not feel ashamed of failure anymore."

"We changed our approach to teaching from 'giving and letting students do the task' to 'listening to students, helping and watching them.' Teachers turned into facilitators, and students have become proactive and cooperative in implementing activities according to their way of thinking, not to the teachers' logic."

Transformation in the awareness of teachers of Nagatadai Elementary School

2 In order to create a sustainable society;
Believe that we can transform ourselves;
Remove emotional barriers between adults and children living in the same period of time;
Appreciate and respect other people, objects and events;
Have connections purposefully with people from different industries, generations and cultures;
Keep a child' s sense of wonderment, expressing joy, showing appreciation, reflecting on oneself, and being moved honestly;
Understand other people,. not pushing one' s opinion through, compromise, be receptive to others;
Tackle a problem as our own problem and look at things positively;
Develop a consciousness that we foster leaders who can change our society;
Have a feeling of "Let' s try it, anyway";
Create an atmosphere that encourages free exchange of opinions (disclose weakness and what we are worried about); and
I was reassigned to another school from Nagatadai Elementary School and will play a leading role to promote ESD!

"Talking about ESD brought about some changes in me. I had a chance to talk to senior citizens who seriously consider the need for ESD, not as somebody else's issue. They made me feel that I had a narrow perspective. I am now highly motivated to practice ESD."

"The network of UNESCO Associated Schools deepened my understanding for different cultures and I found it interesting to transmit information."

"Transformation in the awareness of teachers is reflected in the transformation of attitudes of children. I thought teachers should understand ESD and seriously think what each one of us can do. Adults have broadened their views."

"By incorporating the ESD perspective, I became aware of connections between the existing issues such as human rights, the environment, etc."

"I realized the importance of networking among teachers."

"Both children and adults have become friendly. They have become active in tackling problems as their own problems."

Transformation in schools

"The old and traditional frameworks of school education became looser. Better ESD will be realized if we are given more flexibility in developing ESD curriculum, not connecting each other using the conventional frameworks."

"A sense of solidarity among us deepened. Schools, people and communities connect with each other as an open team, not a closed one."

"My school became cleaner and brightened, probably because students now pick up trash and clean up classrooms properly."

"My school has changed. There is always someone who supports you."

"The number of great things about my school increased, probably because teachers gained multiple perspectives of my school. I think it is teachers who changed, not the school."

"My school is now gleaming, as if it was converted from an old black-and-white photograph to color. Both teachers and children are energetic. I can always find flowers somewhere in the school, and the school became cleaner. People involved in ESD became cheerful and full of energy. Every teacher exchanges greetings."

"When I pass through the front gate of my school, I feel the school is full of more energy than ever before. This energy, which I feel in my heart, may be the kind that truly arouses our spirits. Every student I see greets me. Children earnestly listen to other people. Although many teachers were reluctant to promote ESD, many of them willingly get involved in it now. We used to regard our class to be a place to transfer knowledge to children. Now I can see classes in which teachers more earnestly hope for each of their student's development as a person through their attitudes and behaviors."

Transformation in communities

"Teachers, parents and adults in local communities have become cooperative with each other. They try to remember their hometown, think what they can do to contribute to their community, and put these ideas into practice."

"I learned many good points about the school, so I would like to give it more support."

"Teachers and students have become more involved in the local community. We think about the local problems together. Now I understand what they do in school."

"Children do research on the local matters, get involved with local people, and talk about their school in the community."

"Schools have become interested in local problems, and are making efforts to solve them. This has brought smiles to the faces of local residents."

"The active efforts being made by the school stimulate and reinvigorate the local community."

Examples of transformation observed in activities

i) Students learned that a large amount of raw garbage is being discharged by Minami Ward, Yokohama. In their further researches, they found out that their community in particular is discharging a large amount of it. The students conducted a survey at their school, in homes, and throughout the local community regarding methods and means for reducing raw garbage. They summarized the results in a booklet and distributed them to the

community, and actually tried one of the means to reduce raw garbage with the assistance of ward officials. In addition, the students reported the results to the community with an intention of removing the stigma of being the community discharging the largest amount raw garbage. Taking up local issues and learning about them at school will increase the students' attachment to their hometown and motivation to create a better community. These experiences will inspire children to become future leaders of a sustainable society. In addition, local residents welcome the school involvement in tackling local problems. We are able to hold a vision of schools that serve as a local hub for a sustainable society. Cooperation among schools, homes and communities is realized in a network connecting them.

Sustainability of local community

Training program "Kids supporters for seniors with dementia"

The project to remove the stigma of being the community discharging the largest amount of raw garbage

ii) Minami-nagata danchi (housing complex) has the most rapidly aging population in the city of Yokohama. The ward office is making a plan to build communities in which seniors can live in safety even if they begin to suffer from dementia. Children who participated in a training program called, "Kid supporters for seniors with dementia," with the cooperation of people from communities and ward office, learned about dementia and repeatedly discussed with them how to communicate with seniors and their own future course of life. On school holidays, some students participated in local training program to perform a short play and present activities they are doing at school. They noticed that many people in local communities support nursing care for the elderly, talked about what they have learned at homes, and have started to express understanding for the elderly. This is an example that the school and local community have deepened a relationship of trust.

文化遺産登録応援　大仏切通で清掃活動

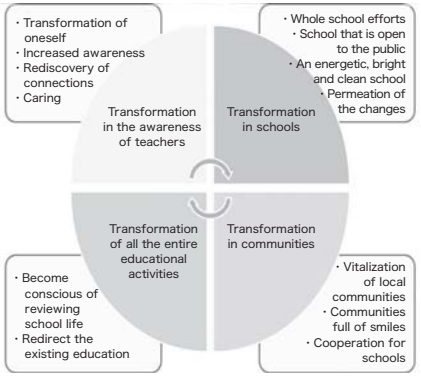
「世界の鎌倉へ」児童ら願い汗

南区・永田台小の6年生

（東京新聞　平成24年1月31日(火)）

iii) Elementary school students who studied the Kamakura Shogunate (feudal government) and samurai (warriors) in a social studies class felt some connection of life between themselves and samurai, and were motivated to learn more about Kamakura. Because Gumyoji Temple, which is related to Masako Hojo (wife of Minamoto no Yoritomo, the founder of Kamakura Shogunate) and the Kamakura-kaido Road are situated near their school, the students launched a joint project "Iza, Kamakura Project" with Tamagawa University, a member university of the Interuniversity Network Supporting the UNESCO Associated School Project Network, with which the elementary school students have been exchanging their opinions with its students. They participated in fieldwork in Kamakura several times with the university students and became actively involved in problem-solving activities at the site through interacting with the people of Kamakura and exchanging opinions with officials in charge of world heritage registration promotion in the Kamakura City Office and the City of Yokohama. Through these learning activities, the students deepened their understanding of the history and culture of Kamakura and its vicinity. Furthermore, some students who met a volunteer group for cleaning the Daibutsu Kiridoshi (an old carved out pathway leading to Kamakura) started to join the cleaning activity voluntarily with their friends on school holidays. They invited more friends to join and the activity has expanded to include all the students in the same grade. The social studies class led to the learning about their world heritage, and the students put into practice what they have learned through volunteer activities in environmental conservation with many friends involved. This project made us realize that the mindset of learning that focus on connections has been firmly rooted in children. These activities attracted considerable media attention, and the people of Kamakura were very pleased. The local residents reflected on the significance of their activities and their motivation to continue doing them has increased. The Japanese culture and heritage will be protected and passed on to future generations by people of conscience, even if the area is not registered as World Heritage. Wherever you are, finding the attraction of the town where you live, coming to like it and taking action will contribute to the realization of a sustainable society.

Attractiveness of ESD "Transformation"



The spirit of ESD places importance on "connections." By focusing on connections, teachers will increase their awareness for things and find connections that were previously invisible to them. They opened up their minds and proactively began to collaborate with others and undertake management for the collaboration without feeling it troublesome. The transformation in the awareness of teachers leads to expansion and deepening of students' learning. Teachers are pleased to see their students' changes and try to expand the connections further. If more and more

teachers go through these experiences, the school will always be open to the public and invigorated. The connections will be expanded to local communities, in which students will discover the challenges their community faces, discuss them at school, and implement activities to solve them in cooperation with the community. Vitalization of schools brings about that of local communities, and thereby transformation occurs in the communities. ESD is a dynamic concept that spontaneously creates a virtuous cycle of school, home and community. ESD is an outstanding education.

Learning to transform oneself and society

Schools which realized the joy of ESD have noticed that tackling the local problems including the issues on energy, garbage, disaster prevention and the aging of the population, while getting the cooperation of various people from outside of school, will contribute to solving global problems. Teachers reflect on their daily life and way of living, and make students aware of being the leaders of future society. ESD also provides learning in which adults and children exchange opinions about the building of a society in the same position. Schools should be open to the public and teachers should open up their minds, and thereby remove barriers between school and society. First, teachers understand sustainability, and then nurture more sustainability-minded people.

School principals, in particular, are expected to recognize their responsibility as leaders who bring about transformation. In order to promote high-quality ESD, they need to increase their awareness with passion, must always be conscious of connections, and transform themselves.

When considering ESD, the scope of discussion did not go beyond its theory, and methodology and outcomes, and I had little chance of seeing the attractiveness of ESD. Although schools in Japan had implemented outstanding activities, unsustainability will increase under the conventional way of thinking. What have children come to say and do? How have schools and teachers changed? Schools which understand the principles of ESD and have promoted its practices are expected to actively transmit information regarding transformation brought by ESD, such as “These changes are seen in my school,” “Our school organization has been invigorated,” “Teachers have become energetic,” “The number of students who do not or cannot attend school has decreased,” “Incidences of bullying have decreased,” etc. These remarks should be actively provided to ESD beginners as the attractiveness of ESD to make them motivated to start it spontaneously and proactively.

Postscript: Transformation in society

At the Eco-Products Exhibition held annually at Tokyo Big Sight, many bright booths of enterprises have been set up.

“Hello, would you like to listen to our story?”

“I (We) engaged in this project and thought that through the project…. What do you think about it?”

The students stopped adults who passed by and talked about what they researched and thought about it. (Nagatadai method of catch and talk)

Children give energy to adults. Adults look back on their way of life, and this encourages their actions. This is the chance for children to meet other members of society. Children who can change society!

ESD and Enhancement of Self-affirmation

Nakazawa Shizuo
Nara University of Education

The 24th Annual Convention of the Japan Association for International Education was held at the Nara University of Education in June 2014. At the symposium under the theme of "ESD and Education for International Understanding," one of the symposiasts, Mr. Takashi Asai, Chief of Bureau of the ESD World Conference Promotion Bureau in Okayama City, gave in his first answer that the self-affirmation of children was enhanced in response to a question of how ESD transformed children. Although there has been no research on ESD and enhancement of self-affirmation so far, I think many people have a similar opinion to that of Mr. Asai, who has long been involved in the promotion of ESD at MEXT (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) and Okayama City.

The terms "feelings of self-esteem" and "self-esteem" have similar meanings to "self-affirmation." In this paper, the term "self-affirmation" refers to feelings such as "I like myself," and "I am a valuable person," and we make no distinctions between the notions of "feelings of self-esteem" and "self-esteem." Mr. Chitoshi Araragi, an educational psychologist, pointed out that facilitating the development and transformation of the self-concept of children is important in order to develop high levels of self-esteem.[1] I think that this self-concept that is developed and transformed means having a positive self-image. He also mentioned that self-concept/feeling of self-esteem is developed mainly by the following three factors: 1) introjective identification; 2) awareness gained through role-playing activities and various experiences; and 3) awareness gained through evaluation and approval by others.[2] Introjective identification means that a person thinks him/herself identical to other people in order to feel a sense of superiority and stability. For example, a team you support wins a game, and you feel you are superior. Awareness gained through role performance and various experiences means a sense gained through activities themselves, such as a sense of satisfaction gained through your efforts, and the joy you feel when engaged in a good project. Awareness gained through evaluation and approval by others is based on the evaluation by other persons on activities and their results.

While taking into consideration Mr. Araragi's the three factors to develop self-concept/feeling of self-esteem mentioned above, this paper discuss ESD and the enhancement of self-affirmation from the following three viewpoints: 1) ESD and opportunities for developing and transforming self-concept; 2) the learning content of ESD and self-affirmation, and 3) the learning method of ESD and self-affirmation.

1 Chitoshi Araragi. (1992). Self-esteem no Henyo to Kyoiku Shido (Transformation of self-esteem and educational training). Tatsuo Endo, Shoji Inoue & Chitoshi Araragi (Ed.). Self-esteem no Shinri gaku (Psychology of Self-esteem). Nakanishiya Shuppan Publisher. p.201.
2 Ibid. p.200.

ESD and opportunities for developing and transforming self-concept

Regarding ESD and the opportunities for developing and transforming self-concept, Mr. Araragi pointed out that teachers play an important role in helping children develop positive images of their abilities, while introducing research results by Brookover and Erikson that the process of development and transformation of children's self-concept is affected by evaluations given by other important persons through which children become aware of their abilities.[3] He also quoted from Coopersmith and Feldman that it is important for teachers to provide children with many opportunities for academic achievement and make them interpret their experiences positively.[4] It is assumed that Mr. Araragi pointed out the importance of teachers when learning is provided in the closed environment of school classrooms. Learning in ESD, on the other hand, extends beyond classrooms or schools. In ESD, children develop attachment to their hometown and awareness of their roles as future leaders through discovering local treasures, including cultural assets and the natural landscape. They explore local, as well as global, issues, such as environmental problems, depopulation in rural areas, the aging of the population and human rights issues. Through such activities, we nurture future leaders of sustainable local communities. In this type of learning, children learn with the cooperation of various people, including parents, local residents and experts. This means that children have chances to meet not only teachers, but also various other kinds of people, such as parents, local residents and experts. These cooperators will frequently talk to children. Meeting with many people and receiving evaluations and approval of their learning activities from them will have positive effects on the development of self-concept/feelings of self-esteem of children.

Learning content of ESD and self-affirmation

In regard to the learning content of ESD and self-affirmation, the goal of ESD is to develop human resources that are highly motivated to build a sustainable society and have abilities to take action. These human resources will include experts, such as technical experts engaged in the development of highly efficient products and politicians who make policies to promote environmental conservation and the protection of human rights. Citizens who support these experts are also included, such as citizens who purchase highly efficient products and those who vote for politicians appealing to build a sustainable society. Developing attitudes for participating and getting involved in creating a sustainable society include placing values on efforts to create a sustainable society and having the motivation and commitment to participate or get involved in creating a sustainable society based on these values.

Let us imagine a school setting where the motivation and commitment mentioned above are developed. At present, the main teaching style employed in schools across Japan is mass teaching. A teacher stands with

3 Chitoshi Araragi. Self-esteem no Keisei to Gakko no Eikyo (Formation of self-esteem and influences of school). Ibid. p.179.
4 Chitoshi Araragi. Ibid. p.201.

his back to the blackboard and talks, while students sit and look at the blackboard, listen to the teacher and take notes. Behind this teaching style, there is a concept that the purpose of teaching in a class is to transmit knowledge. Mass teaching is certainly efficient and has a beneficial effect as a method for transmitting knowledge from teachers who have the knowledge to students who do not have it. In junior high schools and high schools, in particular, we see many classes in which teachers give explanations one-sidedly and students take notes silently. However, this mass teaching that attaches too much importance on the transmission of knowledge does not function in ESD. This is because nobody knows how to fix the global environment that is being destroyed. Teachers have no knowledge about it that can be transmitted to students, meaning there are no right answers.

Mr. Yutaka Saeki, a cognitive psychologist who studies issues in learning, discussed what teaching means in the first place, while introducing an example of classroom teaching of reading and writing skills of Japanese. He mentioned that a student's learning in this class exactly means that he or she participated in learning in a community; he or she participated in learning in which everyone learns from each other while exhibiting their personality. The student was able to become the person who he or she wanted to be, and at the same time he or she participated in and contributed to the Suekata class by contributing something good to the class to make it better.[5] Classroom teaching is a cooperative activity for making everyone better, not for making an individual understand something or become capable of doing something. It can be said that Mr. Saeki's notion of what teaching means is the same as that of ESD. If we apply Mr. Saeki's words to the teaching of ESD, classroom teaching is not only for transmitting knowledge but a cooperative activity for realizing a sustainable society. A student participates in an activity while showing his/her personality, acquires values and abilities for creating a sustainable society, becomes the person who he/she wanted to be, and at the same time, participates in and contributes to the activity for helping the entire class to develop the future leaders of a sustainable society.

The OECD chose values that are respected and appreciated across countries and regions in order to define the key competencies that are the world standard academic achievement. Of all the values, democracy, the respect for human rights, and sustainable development were regarded as core values.[6] This means that the learning content of ESD is valuable for all human beings at present and in the future. Participation in valuable learning will increase, as Mr. Araragi stated, awareness gained through role performance and various experiences, and enhance self-affirmation.

Learning method of ESD and self-affirmation

The third viewpoint is learning method of ESD and self-affirmation. As I mentioned earlier, mass teaching does not function in ESD. Teachers are expected to implement cooperative learning in cooperation with students in which they engage in a series of inquiry-based learning composed of discovery of problems on sustainability of local community, research activities, discussion based on the results, problem-solving with reservations. Teachers are required to break out of their shells as teachers, and to get involved in the learning as a citizen who strives to create a sustainable society. Students will basically engage in interactive group discussion in the style of cooperative learning in small groups. Mr. Araragi mentioned that students would be provided with many opportunities for academic achievement in cooperative learning in small groups, as well as nurturing positive self-concept regarding academic achievement, abilities and interpersonal relationship skills through cooperative interaction. They will develop their self-concept, and then their feelings of self-esteem will be enhanced by accepting their self-concept positively.[7] This is because that every student is given a specific role in the learning environment of small groups, and this enhances awareness gained through role performance and various experiences. In addition, students will easily understand what activity each student is working on because it is a small group. This will increase opportunities for mutual evaluation and approval, and eventually enhance awareness gained through evaluation and approval by others.

As discussed above, learning in ESD is clearly different from that of conventional classes. Learning content, methods, and the styles that extend beyond schools to get local communities involved will facilitate the enhancement of self-affirmation of learners. In the Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD, adopted in Nov. 8, 2014, there is a sentence "We will commit to continuing the promotion of ESD as a driving force for transforming education in Japan."[8] Inspired by this commitment, I expect teachers to review all their classroom teaching and pursue learner-centered learning, taking this opportunity to start ESD.

5 Yutaka Saeki. (1995). Bunkateki Jissen eno Sanka to shiteno Gakushu (Learning as a participation in cultural practices). Manabi e no Sasoi (Invitation to Learning). Yutaka Saeki, Hidenori Fujita & Manabu Sato. Tokyo Daigaku Shuppankai (University of Tokyo Press). p. 21.
6 Dominique S. Rychen & Laura H. Salganik (Ed.). (2006). Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society. Yoshihiro Tatsuta (Translation supervisor). Akashi Shoten Co., Ltd. p.105.

7 Chitoshi Araragi. Self-esteem no Henyo to Kyoiku Shido (Transformation of self-esteem and educational training). p.209.
8 Adopted by participants at the 6th Japan's National UNESCO ASPnet Conference (Okayama, Japan) during the UNESCO ASPnet International ESD Events in conjunction of the UNESCO World Conference on ESD. Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD. Nov. 8, 2014. p.2.

Interschool Exchange of UNESCO Associated Schools

Ichinose Tomonori
Professor, Research Center for Education
in International Understanding, Miyagi University of Education

The main objectives of UNESCO Associated Schools are the sharing of information and experience by students and teachers through exchanges between schools around the world by utilizing its global network, and the solving of global issues, such as problems related to peace, human rights and sustainability.

Among the schools, the UNESCO Associated Schools in Osaka had started their pioneering challenges of global interschool exchange before the start of the DESD (Decade of Education for Sustainable Development). The number of schools in Osaka joining the ASPnet (UNESCO Associated Schools Project Network) began to increase in 2001 and they have promoted practices in line with the philosophy of UNESCO including peace-building and the realization of a sustainable society.

Their efforts developed into the hosting of the "International ESD Conference of High School Students from Seven Asian and Scandinavian Countries" in 2008; the "Asia/Pacific Primary, Lower Secondary, Upper Secondary and University Student International ESD Workshop" held in August, 2011, in which students from four Asian countries participated; and the "ESD Forum of High School Students from Japan, the Republic of Korea and the People's Republic of China," as well as the "ESD Forum of High School Students from Eight Asian and Pacific Countries," which were both held in 2013.

It should be emphasized that younger generations themselves think about a future where these practices are being implemented. This year, the final year of DESD, Japan hosted the International Forum on UNESCO ASPnet -Students' Forum- in which the management of the forum and sharing of its outcomes were conducted by high school students. Forty teams of high school students from 32 countries around the world participated in the forum, and discussed what each of them should do as a member of UNESCO Associated Schools for the realization of sustainable development and an ideal future. Finally, "The Joint Declaration of UNESCO ASPnet International ESD Events for Students and Teachers Platform for Students" was released.
The students' forum mentioned above is an example of interschool exchange across national boundaries. Other interschool exchanges include those between schools in the same school district, between schools in nearby regions, and between schools in different regions far from each other in and out of Japan. The Japanese National Commission for UNESCO, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, conducted a survey targeting UNESCO Associated Schools from February to March, 2013. (466 schools out of 550 participating schools of ASPNet in Japan responded. This was a response rate of 84.7%). While examining the survey results, this paper considers the interschool exchange of UNESCO Associated Schools and discusses future prospects.

1 Interschool exchange in school districts, regions and within the country

Fig.1: Interschool exchange of UNESCO Associated Schools (in Japan)

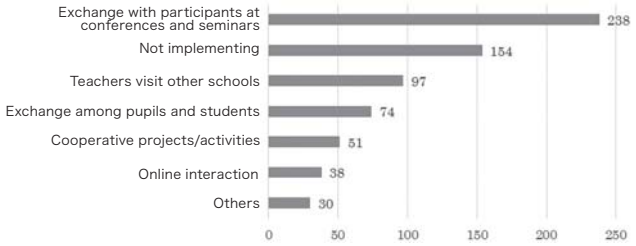


Figure 1 shows the results of the survey regarding interschool exchange between UNESCO Associated Schools in Japan. The results revealed that information exchange between teachers at training workshops and study sessions on ESD accounted for the highest percentage, and 33% of the total is not implementing interschool exchange except in the opportunity of training workshops for teachers.

In the free descriptive answers concerning the interschool exchange in Japan in the questionnaire, a relatively large numbers of schools answered that they are promoting exchanges between pupils and students of kindergartens, day-care centers, elementary and junior high schools within the city or prefecture. The students are engaged in direct exchange beyond classes and grades. In exchanges between schools in different regions far from each other, various means such as documents, letters, newspapers, DVDs, video letters, web sites and TV conferencing are largely employed. In such exchanges beyond regions, there are some examples that a UNESCO Associated School arranges and carries out exchange learning activities with another Associated School taking the opportunities of a school trip or an overnight experiential learning activity. This is a good way of promoting exchanges, especially between the schools in urban areas and those in local areas.

In exchange activities, students mainly present their learning outcomes and research results. Learning themes such as traditional performing arts, Japanese paper and rice can be correlated to UNESCO World Heritage and Intangible Cultural Heritage. Exchanges between different regions under the themes of the protection of animals and plants, including natural heritage, rare species and migratory birds, are also meaningful activities.

A wide variety of learning and teaching methods can be employed in interschool exchange, such as experiential learning, project-based learning and problem-solving learning. In addition, these activities can develop the students' interests, concerns, motivation, awareness of participation, cooperative attitudes and leadership.

After the Great East Japan Earthquake that occurred on March 11, 2011, many schools offered assistance to UNESCO Associated Schools in the disaster-stricken areas including Kesennuma City. The interschool exchanges that had started since then are still continuing to this day, even after the passage of

more than three years. We cannot predict when and where natural disasters, such as earthquakes, tsunami, torrential rains and volcanic eruptions will occur. In these exchanges, students tackle issues that require urgent solutions and sustainable development. This example represents the essential values of ESD.

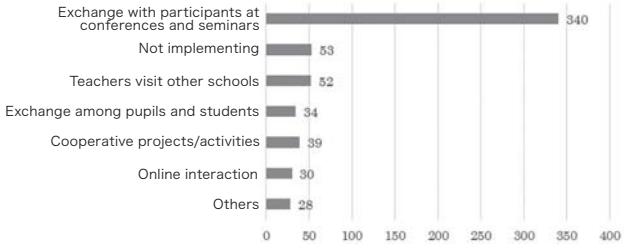
2 Interschool exchange across national boundaries

Interschool exchange activities across national boundaries are categorized into three types. The first type is exchange activities implemented by high schools, etc., with their overseas sister schools, or those between schools implemented in the sister cities exchange programs of local government. In such cases, UNESCO Associated Schools implement these activities, taking the opportunities of overseas school trips or learning projects with overseas sister schools.

In the second type of interschool exchange, students provide assistance to developing countries and get involved in international exchanges through participating in activities, such as the "Art Miles Mural Project" (creating murals) and the "Terakoya Project" (cooperation for non-formal education), and send money or school supplies purchased through Eco-Cap recycle campaign (bottle caps are collected and converted into funds) to developing countries. In this case, there are not always exchanges between specific schools or individuals. However, students can participate in international projects to tackle global challenges with relatively less effort to participate in and manage them.

The third type is exchange activities carried out through accepting a group of visitors from overseas to schools in an activity framework of international organizations. Such examples include acceptance of students from sister cities and that of observers participating in the Japan-United States Teacher Exchange Program[1] for ESD, participation in Invitation Programme for Korean Teachers to Japan, and acceptance of a visiting group of JICA trainees to schools.

Fig.2: Interschool exchange of UNESCO Associated Schools (out of Japan)



However, as shown in Figure 2 above, as many as 340 schools are not implementing any international inter-school exchange, which accounts for 73% of the total who responded to the survey. It is particularly difficult for a school to make an arrangement independently with an overseas school for practicing exchange activities, such as the exchanging of letters, e-mails, DVD letters and TV conferencing. This is caused by inadequate English proficiency of teachers and students, difficulties in communicating with people from non-English speaking countries, the lack of a method of contact and opportunities to start exchange activities, and problems in hardware aspects, such as technical problems in on-line interaction and limited budget for traveling, etc.

On the other hand, there are some examples that local universities participating in ASPUnivNet (Interuniversity Network Supporting the UNESCO Associated School Project Network) are successfully making the selection and coordination of partner schools to exchange with. Because it is difficult for local elementary and junior high schools to practice international exchange activities individually, it is expected that local universities, international exchange associations, NPOs and NGOs will take a role in such coordination.

UNESCO Associated Schools outside of Japan are promoting a great number of interschool exchange projects across national boundaries. Among the projects, the "Baltic Sea Project," promoted by nine countries, including the coastal countries of the Baltic Sea - Denmark, Estonia, Finland, etc., is well known. Another famous project is "Sandwatch Project" in which more than forty countries participate, including those in Latin America, the Caribbean, the Indian Ocean area, the Pacific Ocean area, Africa, and elsewhere. These projects are being continued over the long term with the participation of many schools.

These flagship projects have such features as discovering problems and searching for their solutions; employing scientific methods of comparison, observation and data exchange; selecting themes that are highly related to the themes of the United Nations, such as DESD (Decade of Education for Sustainable Development) and MDGs (Millennium Development Goals); developing curricula and teaching materials; and involving a wide range of participants from various countries, regions, organizations and communities. In Japan, "-We are one - ASPnet Forum on Solidarity and Disaster Risk Reduction (Japan Solidarity Project)"[2] was held following the Great East Japan Earthquake of March 11, 2011, in order to promote interschool exchange between UNESCO Associated Schools in the Asia-Pacific region in terms of disaster education. Furthermore, the "ESD Rice Project"[3] is ongoing, in which students in UNESCO Associated Schools in Asia are learning from each other about biodiversity, environmental problems and traditional culture, under the theme of rice, which is a common staple and closely related to people's lives in many parts of Asia.

Interschool exchanges represented by these flagship projects around the world will promote reconciliation, mutual understanding and cooperation beyond political and geographical boundaries. This can be said to be the significant role expected for UNESCO Associated Schools.

1 Implemented by Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) as a part of international educational exchange program established by the United Nations University.

2 Implemented by UNESCO Office in Bangkok and ACCU with the cooperation of many organizations such as UNESCO Associated Schools in Japan and universities including Miyagi University of Education.

3 An international cooperative project implemented by ACCU as one of the projects of UNESCO. ASPUnivNet including Miyagi University of Education is supporting and promoting the project.

Interschool Exchange and "ESD Rice Project"

Mochizuki Hiroaki
Senior teacher, Education
Hanzawa Yukari
Teacher,
Kanagawa Prefectural Arima High School

Interschool exchange in UNESCO Associated Schools can be categorized into two types:

1 Interschool exchange

1) Exchange between various schools at different levels; between elementary school and high school, between elementary school and junior high school, etc. (vertical exchange); and
2) Exchange between schools in Japan and those overseas, or between schools in different regions far from each other in Japan (horizontal exchange).

An example of type 1, above, is the "Power of Clothing Project" being implemented in our school with the cooperation of neighboring elementary schools. Because there is an age disparity between high school students and those in elementary schools, it seemed difficult to carry out exchange activities. However, this has turned out to be a good opportunity for high school students to learn the difficulties and importance of communicating what they do and why they do it to other people through talking to the elementary school students about the reason they send children's clothes to African countries, and describing Africa in a way the students can easily understand using a map. The students on both sides (different age groups) can learn many things through this experience.

The "ESD Rice Project," in which our school started to participate in Academic Year 2014, is an example of the second type of interschool exchange. This is a collaborative research project carried out under the theme of rice, which is a common staple in many parts of Asia. Students from elementary, junior high and high schools from six countries, including Japan, the Republic of Korea, Indonesia, India, the Philippines and Thailand participated. During this collaborative learning endeavor, the students exchange opinions on the formation of a sustainable society. This is one of the projects of UNESCO and is organized by the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU). Our school had previously applied to take part in the project and was selected as a participant. In the first ESD Rice Workshop, which was held in Thailand in December 2013, Ms. Zimmerman, who is in charge of the "Baltic Sea Project" and is promoting advanced activities for interschool exchange in Europe, partook in the activities and discussed international collaborative learning.

After returning to their respective countries, the participants of the workshop promoted activities utilizing e-mail and Skype. In September 2014, a second ESD Rice Workshop was held in Indonesia. Participants visited local schools, interacted with the students, and discussed future activities to be continued.

The next chapter explains the type 2 horizontal exchange (international collaborative learning), taking the example of the ESD Rice Project.

2 Interaction through e-mails

In March, students in the English club at our school created a photographic sheet in English that related to some topics on rice and sent it to schools participating in the project via e-mail. However, they were not able to exchange as much information as they had expected as a result of some partner schools failing to receive this e-mail. Often, the files that were attached could not be opened, or the mail itself was not successfully sent. The students were not able to get the results they expected through interacting via e-mail.

3 Visit to Dongwon High School in the Republic of Korea

Two students of our school were dispatched to Dongwon High School in Republic of Korea during summer vacation for the purpose of reporting on the status of the progress of the ESD Rice Project at each other's schools. First, students introduced their schools to each other in July via Skype, and the students and teachers from our school visited the Dongwon High School in August. Using PowerPoint, the students of both schools presented the research and studies they have been conducting. In addition, the students at Dongwon High School took us to visit an organic rice farm. By talking to each other face-to-face, we were able to have a better understanding of each other's activities, and have become better acquainted with each other.

4 Interaction using Skype

Using Skype, students in our school interacted with students of three schools; Dongwon High School in Republic of Korea, SMP Amalina Islamic and SMA Negeri 10 Malang School, both located in Indonesia. In the CALL (Computer Assisted Language Learning) classroom at our school, our students, mainly those in intensive English course, and students from the other schools, gave presentations on the ESD Rice Project, then asked questions and offered comments. When finished, our students said, with delighted smiles on their faces, that they were very pleased to have conversed with them. Video conferencing is a good alternative as a way for students to gain familiarity with international exchange, as they can easily talk to each other free of charge during lunch breaks between classes.

5 The visit to our school of teachers involved in the ESD Rice Project

Teachers from various countries who have been collaboratively promoting the ESD Rice Project visited our school on November 10, 2014. In response

to our request, they gave a special lecture on the status of the progress of the project at their schools, and they observed some classes, including music and Japanese language for foreign students. During the lunch break, the teachers and students who engaged in the project participated in an exchange meeting. The students introduced themselves with bashful smiles, and tried to carry on conversations using some English expressions they had learned to further their conversations with them.

6 Conclusion

International collaborative learning has been implemented in the ESD Rice Project in a form of a horizontal exchange activity. If this kind of collaborative learning can be promoted between various schools at different levels in Japan, the students will be able to have meaningful experiences.

Collaborative projects have been implemented beyond national borders at UNESCO Associated Schools in various parts of the world. In order to continue these projects, the creation of a teachers' network is essential. As a wide variety of information tools, including Skype, are available today, teachers will be able to further promote international collaborative learning by utilizing these tools to overcome the restrictions of distance between schools.

Possible Roles of Schools in Collaboration with Diverse Local Stakeholders

Suzuki Katsunori
Professor, Director of the Environment Preservation Center, Kanazawa University

In a local community, various activities related to revitalization of the community and the establishment of a sustainable community have been conducted, and exchange of information and collaboration have been promoted in the areas that have been considered to be directly related. However, from the viewpoint of ESD, even though various ESD-related activities have been conducted by diverse local stakeholders, information and experiences have not been exchanged among them, to a surprising extent.

Also in school education, neighborhood primary schools, which are the same level of schools, did not necessarily have active exchange of information and experiences. Until recent years, different levels of schools, such as a primary school and a junior high school, and a junior high school and a senior high school, hardly had any interactions. Further, in social education, specialized institutions such as museums, zoos and botanical gardens, municipal environmental departments, lifelong learning departments of boards of education, community halls, NPOs/NGOs, and corporations have been conducting various ESD-related activities, but they usually conduct their activities separately, and rarely had mutual collaboration/cooperation and joint activities. The interlinkage between school education and such social educational activities was quite weak, except some lectures by dispatching experts.

As ESD makes progress, emphasis has been placed on establishing a multi-stakeholders platform for creating opportunities for collaboration among mutually related activities. In this context, Regional Centers of Expertise (RCEs) on ESD and regional/local ESD consortiums have been developed. Since schools as well as local halls are important bases of activities in the local communities, the promotion of ESD at school has been considered as a priority area in RCE and other relevant initiatives. It can be said that the interlinkage between the local communities and schools has been promoted by considering possible contribution to school education by diverse local stakeholders. As a typical case, schools make an approach to the local people to enable learning on the local community in a curriculum including the Periods of Integrated Studies. For example, students visit shops in town, temples and shrines, or visit welfare facilities for the aged to communicate with the residents there. Some of them contribute to the local community through litter cleanups and cleaning activities in their area. It can be said that for students' better learning, schools make efforts to acquire cooperation from diverse local stakeholders.

In some regions, on the other hand, local people try to contribute to the curriculum development of a school proactively, and do so together with

school teachers. I may be said that school education could provide the common ground which diverse local stakeholders can contribute without considering their own commercial interests.

Since schools, as well as community halls, are important establishments in the local communities, schools, school teachers, and school children can play significant roles for various activities in the local community. Vigorous activities by schools could revitalize the local community, and become a source to generate hope for the future.

From the viewpoint of revitalization of the local community, there are some cases where new and flexible ideas by young students, free of conventional patterns, could discover excellent issues at the local community that had been overlooked by local people as common for them. Such discovery could lead to the creation of new business opportunities. Students in Toyota Higashi High School, for instance, have developed a local food brand by using rice powder, pears (a local specialty), for revitalization of their local community.

At the time of a disaster such as the Great East Japan Earthquake, a number of schools play prominent roles as regional bases. We can still remember that schools fulfilled various functions as evacuation centers right after the disaster, locations to build temporary housing after that, and platforms to provide an occasion for discussing the rehabilitation and reconstruction. You might be able to say that the Great East Japan Earthquake provided us to recognize the importance of the roles that schools have been playing and could play in their local communities.

Regional collaboration

- F-Class Interscholastic Cooking Competition -

Development of a regional brand
Product development using rice powder

Regional contribution by Toyota Higashi High School:
Development of a regional brand using rice powder

Disaster Drill in Kesennuma provided by Kesennuma Board of Education

ESD and Reconstruction from the Disaster of East Japan Earthquake & Tsunami

Oikawa Yukihiko
Member of Japanese National Commission for UNESCO
Researcher of Miyagi University of Education

1 Introduction

In times of disaster, environmental, economic, social and cultural "unsustainability" appear, in a complex manner and to an extreme degree. We discuss how ESD (Education for Sustainable Development) and efforts made by UNESCO Associated Schools are utilized and how they contribute to risk management, disaster prevention and reduction, and the process of recovery and reconstruction in critical situations caused by disaster, taking the example of the Great East Japan Earthquake of March 11, 2011 from an ESD perspective. Marking the final year of the United Nations Decade of Education for Sustainable Development (DESD), this paper reflects one of the outcomes of Japan's ESD efforts that should be transmitted to the world.

2 Synergy between risk management, disaster prevention and reconstruction, and ESD in times of disaster

As stated in Japan's Basic Plan for the Promotion of Education, ESD, which corresponds to the philosophy of the amended Basic Act on Education, is an important educational philosophy to nurture children with a "zest for living" and make them future leaders of society. It can be said that ESD undoubtedly functioned in the Great East Japan Earthquake in risk management immediately after the quake and in educational reconstruction, including reopening of schools. The relationship between ESD and risk management, disaster prevention, and reconstruction can be considered from the following three viewpoints: 1) synergy between the direction of ESD and disaster prevention education, 2) how ESD functions for disaster risk management (DRM), disaster prevention and disaster risk reduction (DRR), and recovery and reconstruction, and 3) the contribution of abilities and attitudes fostered in ESD toward increasing resilience for overcoming the disaster and promoting reconstruction.

In ESD, children can develop critical and systematic thinking ability, communication skills, ability to collect and analyze information, and ability to make decisions and act upon those decisions. These abilities are essential in the critical situations of disaster. In the Great East Japan Earthquake, each school made the utmost use of these abilities to overcome difficulties. In fact, children contributed to the local recovery by making every effort in doing what they were able to do, based on what they had learned in ESD.

ESD is promoted in cooperation and collaboration between local communities, other regions, and related organizations. The bonds between these entities effectively worked for evacuation actions and management of shelters after the earthquake in each community. Each school in Kesennuma City, in particular, which had collaboratively promoted community-based ESD, played a role as a hub for disaster management and evacuation in cooperation with local residents in the critical situations.

There are generally three stages in the framework of disaster prevention education; "self-help," "mutual-help," and "public help." In the Great East Japan Earthquake, although self-help and mutual-help worked to some extent, they were insufficient to provide continuous support. In terms of public help, it took time to provide support, and there were some affected areas that were unable to receive support because the earthquake had caused immense damage. NPOs and NGOs instead played a new role by compensating for the insufficient support and time lag. This is a new type of support provided through a network of various bodies and organizations. The Kesennuma City Board of Education calls it "N-help."

3 Development and enhancement of disaster prevention education from an ESD perspective

UNESCO stated the following three priorities as key action themes that should be focused on for the second half of the DESD: 1) climate change, 2) biodiversity, and 3) disaster risk reduction and preparedness. There is no doubt that education for disaster risk reduction and preparedness is a significant theme in ESD. However, the disaster-related contents alone are insufficient to develop or complete the full learning process of ESD. Effective and practical disaster education can be realized in an interdisciplinary learning program comprising various elements of ESD, including the above three themes. It is necessary, therefore, to interrelate and integrate the above three priorities to develop a program for disaster risk reduction and preparedness education. This requires clarifying the relations between stages, purposes, abilities and attitudes to be developed, learning contents, and elements of ESD as presented in Table 1, in order to incorporate the disaster education into the learning process of ESD (Table 1).

Table 1 Steps for Disaster Education

Step	1st Step Mechanism of Climate Change and Disaster	2nd Step Impact to Society and life	3rd Step Response and Preparedness	4th Step Recovery and Reconstruction from Disaster
Ability	Knowledge & Awareness for Mechanism	Recognition of Influence & Relation	Response & Preparedness for Mitigation	Imagination & Creativity and Collaboration for Recovery
Content	Understanding Mechanism of climate change and disaster, scientifically and critically	Recognizing how climate change and disaster influence society and live hood	Learning response and preparedness for disaster risk reduction, and implementing	Learning process, perspective and contribution to creative recovery and reconstruction

As it is important to structurally promote disaster education in schools, systematic and practical disaster learning programs need to be developed. The following two methods are effective for developing ESD curricula. The first one is Infusion Approach in which disaster-related contents (related learning contents) in the existing subjects and areas of study are extracted and correlated with each other to provide learning focusing on disaster prevention. In this approach, disaster learning is promoted centering on the subjects and areas of study within the framework of existing curricula. It is undeniable that the contents are insufficient and the program is not developed in a structured and systematic manner as a disaster education program.

The other method to supplement the weakness of the above approach is the Integrated Approach in which a disaster learning program is developed in an integrated and comprehensive manner. Necessary disaster learning contents are developed and incorporated into a curriculum based on the process and contents of disaster education while taking into consideration the students' developmental stages and correlating each subject and area of study. They are implemented mainly in the Integrated Study Periods and special activity periods. The Kesennuma City Board of Education has developed a "Disaster Risk Reduction Education Matrix" through research conducted by Education Researchers and based on the lessons learned from the earthquake and scientific knowledge, in order to systematize the disaster education curriculum. The matrix organizes the disaster learning contents that should be implemented in each subject and area of study from the viewpoint of ESD depending on students' developmental stages. In addition, the Board of Education is striving to develop and enhance disaster education by proposing a "Disaster Education Sheet" in which practical examples of each learning content are placed in the matrix (Fig. 1). Based on the matrix, each school is attempting to implement disaster education as ESD by selecting one of the sheets according to the students' developmental stages and educational curriculum of each school and by developing inquiry-based learning in combination with the existing subjects [1].

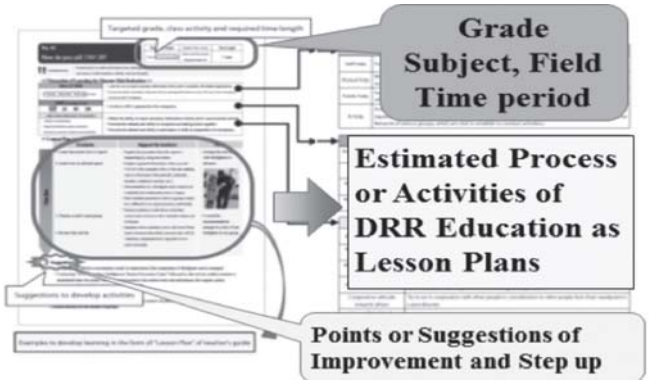


Fig. 1 Disaster Education Sheets, Source from Disaster Education Sheets

1 Kesennuma Teachers' Researching Group (2015) "Disaster Education Sheet", Kesennuma City Board of Education

4 Promotion of recovery education based on a philosophy of ESD

In the process of recovery and reconstruction from disaster, it is necessary to promote creative "recovery education" based on the lessons learned from the Great East Japan Earthquake and on a philosophy of ESD from the following viewpoints .

(1) Education aimed at co-existence with nature

In the Great East Japan Earthquake, we were confronted by natural threats of earthquake and tsunami and suffered enormous damage. However, we have lived in a rich natural environment and enjoyed the blessings of nature, and therefore we should aim at living in harmony with nature and developing cities that coexist with nature. In order to realize this, ESD centering on environmental education, food education, and hometown education, in which ESD/UNESCO Associated Schools have promoted advanced and practical efforts through their activities, is expected to play a significant role.

(2) Education to pass on hometown spirit

Tsunami and fire that followed the Great East Japan Earthquake caused environmental and economic damages. In addition, the succession of culture, including valuable cultural assets and traditional performing arts, are in danger due to human and material damages and collapses of local communities. From the perspective of nurturing leaders for reconstruction, children, who represent the future, need to develop their pride and attachment to their hometowns. We should therefore make efforts to regenerate hometown traditions and culture of the affected areas and promote ESD which places importance on the regional heritage, and through these efforts, it is expected that each child will establish his/her identity.

(3) Sharing of learning beyond regional and national borders

Immediately after the earthquake occurred, the affected areas received numerous support from all over Japan and around the world, and this made many people realize that they and their communities are connected to other regions and countries. Through implementing various activities, ESD/UNESCO Associated Schools have strived to create a "Global Learning Space" through exchanging with other ESD promotion bases, including other UNESCO Associated Schools within and outside of Japan and RCE (Regional Centre of Expertise), and constructing a network of them. After this earthquake, we must step forward with broader views to strengthen our bonds with the world toward reconstruction. Therefore, it is necessary to create opportunities for sharing of learning beyond regional and national borders and to nurture children with communication skills and global viewpoints.

(4) Development of ability to design future images (imagination and creation)

In promoting recovery education, it is important to nurture ability of children, who take responsibility for our future recovery, to design a future image of themselves and their communities. To realize this, it is necessary to create opportunities for practical learning in which children can engage in hands-on

learning activities, exchange activities, and workshops to imagine and create the future. Through implementing these learning activities, we must strive to realize education by which each child enhances resilience (an unbreakable and supple mind) and is able to have dreams and hopes for the future even in times of difficulties caused by disaster.

5 Conclusion—Bonds established through ESD to overcome the Great East Japan Earthquake

In the Great East Japan Earthquake, local communities and schools, which are effectively collaborating with each other, showed high capabilities for evacuation actions and management of shelters and for the local recovery. Therefore, it is extremely important to foster good relationships between community and school for promoting disaster prevention and reconstruction through implementing ESD. In addition, a global network with overseas organizations has greatly contributed toward the reconstruction. We have received a lot of support and encouragement and various opportunities for learning and exchanging from schools, local governments, and international organizations from all over the world, with which we had developed strong bonds through ASPnet (the UNESCO Associated Schools Project Network) and RCE (Regional Centre of Expertise) in implementing ESD.

Encouraged by these "glocal" (global and local) bonds established through ESD, we are committed to continuing efforts toward rehabilitation and creation of schools and communities while focusing on nurturing the next generation, who leads reconstruction efforts.

ESD and Teacher Training

Kato Hisao
Vice President, Nara University of Education
(international exchange and regional collaboration)

During the United Nations Decade of Education for Sustainable Development (DESD, from 2005 to 2014), the UNESCO Associated Schools played a role to promote ESD. It was also an idea to start by increasing the numbership of UNESCO Associated Schools to promote ESD. In 2008 and 2009, the Guidelines for the Course of Study for kindergartens, primary schools, and lower and upper secondary schools were revised, where the "perspective of establishing a sustainable society," which is mentioned on the website of the Japanese National Commission for UNESCO, can be seen. This means that capabilities to understand and implement ESD are required for teachers at kindergartens, primary schools, and lower and upper secondary schools.

Meanwhile, the Global Action Program (2014) of the UNESCO advocates, in the section "Educators (fostering educators to implement ESD)," "ESD is integrated into pre-service and in-service education and training for early childhood, primary and secondary school teachers, as well as teachers and facilitators in non-formal and informal education." The relation between these two points is like two sides of a piece of paper. From the standpoint of education learners, teachers of kindergartens, primary schools, and lower and upper secondary schools must acquire capacities to implement ESD, and from the standpoint of teacher training, capacities to implement ESD must be trained in some way.

Although there are different ways of categorization, it is said that the capabilities to foster in learning ESD is: systematic thinking (understanding of the background to problems and phenomena, multidimensional and comprehensive standpoint); communication skills; ability to solve problems; global thinking; ability to collect and analyze information; leadership; ability to think of alternatives (critical thinking); ability to feel and think on one's own; ability to see through the nature of problems; ability to do things in cooperation with others; and perspectives to develop a sustainable society (ability to show respect for people, respect for diversity, non-exclusiveness, equality of opportunity, and respect for environment). They are all what today's school education works on. The essence of learning ESD includes: developing problem-solving skills and attitudes toward participation; exploration through practice, experience, and physical sensation; and motivating voluntary behavior; and these ways of learning are what today's school education needs to promote further. Above all, "changes to actions" are valued to aim for and achieve learning. ESD is an education where not only do you acquire knowledge, but changes to your own actions are required. There is crossover between ESD and the concept of active learning.

How can we foster the capabilities to implement such an education in the

stage of teacher training at universities, etc.? This is a big issue. It is essential to acquire knowledge to enter a university to become a teacher, and the experience of learning with a goal of "changes to actions" is not necessarily rich.

Nara University of Education, which joined the UNESCO Associated Schools in 2007, has worked on ESD by establishing "recommended UNESCO Associated School class subjects" and establishing the ESD/problem-exploration education section" in the Next-Generation Teacher Training Center. The students belonging to their UNESCO club also have proactive activities. The "project for ESD promotion for developing global human resources" (subsidized by UNESCO in FY2014) is active. They have also participated in the Interuniversity Network Supporting the UNESCO Associated School Project Network (ASPUnivNet), and have been engaged in supporting the application and activities of the UNESCO Associated Schools. More importantly, it is a teacher training university.

Now there is an idea that, in a teacher training university that is a UNESCO Associated school working on ESD, the elements of ESD can be included in a teacher certification course itself in teacher training. It is the perspective of a whole school approach to establish a teacher certification course focusing on the essence of ESD as mentioned above. I believe that changing learning in classes that have already developed into learning making use of the essence of ESD learning is one of the answers to the "fostering educators to implement ESD" shown in the Global Action Program. In that way, there exists training of a total implementation capacity, which cannot be developed by individual training programs, and there exists development of the practitioners of ESD, which will not end up being temporary.

In case of learning the general idea of vocabularies and meaning in the "Introduction of Japanese Language" categorized into a class related to a subject in light of the acquisition of a teaching license, for instance, why don't you think about the difference between the words haha and oka-san, and chichi and oto-san in the following way? In addition to understanding the difference of "haha: female parent" and "okasan: word that refers to a mother with affection" by looking up a dictionary, it is a method to observe and analyze the Japanese language by actual cases and self-examination in order to think about the difference. Such observation and self-examination relate to a "hands-on approach (seeing the occasion for use)" and "sense of ownership (issue of one's own language use)" in ESD, and if successful, a "discovery" that you can say, "oka-san, come over here," but you cannot say "haha, come over here" can be learned. If that is not discovered by learners themselves, it is important to facilitate it, and you should not rush to give an answer and explanation, I believe. Such learning has expandability, and has possibilities to lead to a discovery that the words "haha: oka-san," "chichi: oto-san," "ane: one-san (older sister)" and "ani: oni-san (older brother)" exist in parallel although the words "xx-san" and "yy-san" do not exist in the words "imoto: xx-san (younger sister)" and "ototo: yy-san (younger brother)." That will bring a "pleasure of keeping learning/learning." Further, learners might turn to other words such as "okan," "oyaji," and "ofukuro" (these words refer to a mother or father informally) to observe. I would like to respect the essence of such learning. I hope that such learning will lead to the development of the practitioners of ESD. When you try to show Figure 1 below, there will be various debates in a classroom. If you show a figure on "brother" and "sister" in English, or "hermano mayor (older brother), "hermano menor (younger brother), "hermana mayor (older sister)" and "hermana menor (younger sister)" in Spanish, there will be various debates. Some might start to think what it is like in the Korean or Chinese language. A global viewpoint will be born. After the DESD (United Nations Decade of Education for Sustainable Development), teacher training by lessons including the essence of such ESD learning is further required. I believe that structuring those systematically and realizing total "training of educators implementing ESD" such as "ESD specialty programs" including "lectures," "exercises," and "interchange" shown in Figure 2 can be one of the answers, namely changing our own actions, at the same time a way of the implementation of ESD at a teacher training university that is a UNESCO Associated school in light of the Global Action Programme (GAP) on ESD.

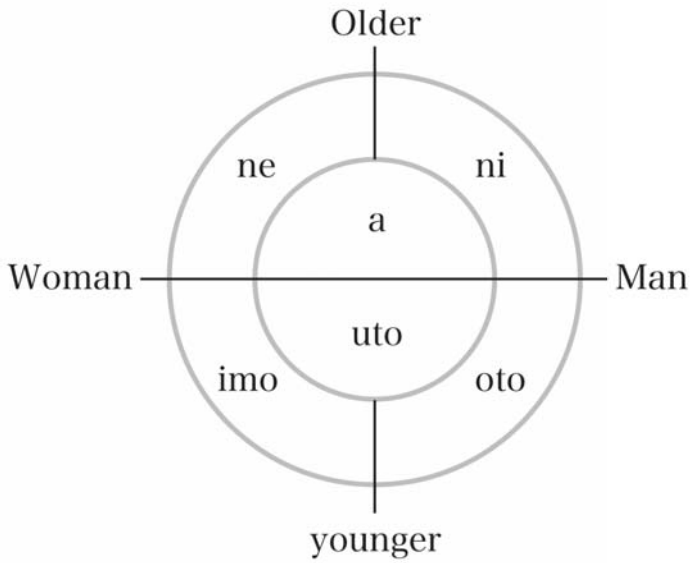


Figure 1: Relation of brothers and sisters

Students/Practicing teachers		Students/Graduate students			Practicing teachers
Program		Start-up program	Practice program	Global program	ESD training
Theme	Embodiment				
Foundation of ESD (Education for Sustainable Development)	Subject	Compulsory	Compulsory	Compulsory	Compulsory
Curriculum Guidelines and ESD		Compulsory	Compulsory	Compulsory	Compulsory
Environmental education and ESD	Subject	Choose one or more subject	Choose one or more subject	Choose one or more subject	
World heritage/cultural heritage study and ESD					
Facility capacity of learning	Subject		Choose one or more subject	Choose one or more subject	Choose one or more subject
Disaster prevention education and school safety					
Interchange between schools using ICT					
ESD camp	Tetra-model	Participate in one or more	Participate in one or more	Participate in one or more	Participate in one or more
Seminar for development of ESD materials					
Open lecture series on ESD					
ESD field exercise (support for disaster site)	Exercise		Choose one or more subject		
ESD field exercise (volunteering)					
ESD field exercise (educational support)					
UNESCO Associated Schools interchange activity (overseas)	Exercise			Compulsory	
UNESCO Associated Schools interchange activity (community)					
UNESCO Associated Schools interchange activity (school)					
Visit to advanced region in ESD	Training				Participate in one or more
In-school training program					

Note: A Tetra-model is a model in which students, graduate students (Masters' course and Professional Graduate School of Teacher Education), and practicing teachers participate.

Figure 2: Training of educators implementing ESD (specialty program)

The Joy of Intergenerational Learning

Asai Takashi
Executive Assistant of the President,
Okinawa Institute of Science and Technology Graduate University
Former Director-General,
ESD World Conference Promotion Bureau, Okayama City

It is obvious that a sustainable society cannot be created in one generation. Efforts should be extended across generations and passed on from one generation to the next. This is why ESD emphasizes intergenerational exchange.

In modern society, particularly in Japan, where the number of nuclear families has increased, promoting intergenerational exchange is difficult without systematic efforts intended for promoting such exchange. The number of senior citizens living alone is increasing in Japan due to prolonged life expectancy. In addition, due to a growing number of one-child households and dual-income households, conversations between parents and children are becoming less frequent. In these circumstances, it is difficult to promote intergenerational exchange even within a family.

In schools, where students usually learn in class, exchange between students in different grades is possible through club activities. However, the exchange is limited to students of only a difference of a year or two in ages. On the other hand, many schools promoting ESD are implementing interschool exchanges, such as those between elementary schools and junior high schools, and between elementary schools and high schools with the intention of intergenerational exchange. Children who usually limited to working with only their classmates find it new, enjoyable, and interesting to interact with other students of different ages, and they naturally learn something through these fresh experiences. They discover the joys of interactions with their seniors and juniors.

I recently joined a preliminary exchange meeting at Okayama Gakugeikan High School together with teachers and students from Romania, who were visiting Japan to participate in the UNESCO Associated Schools Project Network (ASPnet) International ESD Events held in Okayama City. On that day, the high school students were supposed to go to nearby Saidaiji Elementary School in order to conduct a visiting class they provide on regular basis. I joined with them and the students from Romania. The high school students, divided into groups of four, composed of freshmen and juniors, visited a sixth graders' class

to interact with them. The high school students used a financial investment game to teach them about the mechanism of a monetary economy, which the elementary school students do not learn about in their ordinary classes. Although we have no idea how much they understood, it must have been a very interesting class for all sides involved. Many elementary schools in Japan provide students with hands-on learning experience in rice cultivation. In some schools, the students receive instructions from students at agricultural high schools, in addition to farmers. It seems that elementary school students can learn in a more relaxed manner, without getting nervous, when taught by the older students, which differs from when they are taught by adults.

We cannot expect wide-ranging exchanges only in inter-school settings due to only a few differences in ages among students. If the local communities where we live can participate in these activities, more multiple-generation exchanges will be realized. A community-based ESD activity being implemented, centering on a Kominkan (Community Learning Center) in Okayama City, is one of the examples of such intergenerational exchange.

Kyoyama Kominkan (Community Learnig Center) in Okayama City is implementing "Kankyo Tenken (environmental inspection)" project twice a year, in spring and fall. Local residents monitor environmental changes by measuring contaminant concentrations in rivers, conducting research on wildlife, and measuring air pollution and sound levels in the area they live. Although the inspection takes a whole day, people across many generations, including senior citizens, working adults, and students at all levels attending schools in the area engage in the activities together. In this collaborative work, many conversations naturally start, and intergenerational exchanges take place. Such exchange between generations might have been nothing special a decade ago.

Annual events, such as community festivals, where many people in different generations participate, from senior citizens to children, are important opportunities for intergenerational exchanges. Local traditions and culture will be handed down to the next generations through such exchanges. Thus it is important to interact with one another face-to-face when considering the future image of next generations in which people can enjoy a good quality of life. Through such face-to-face interactions, we will be truly able to think about future generations.

We must think globally in ESD. For Japanese people, however, it is time for each of us to become fully aware of the need for considering the sustainability of our own communities.

Mechanism to Carry on ESD in a Sustainable Manner – from a School Viewpoint

Suzuki Katsunori
Professor, Director of the Environment Preservation Center,
Kanazawa University

There are some fundamental conditions to promote ESD in a sustainable manner at school. In Japan, in the past there were quite a few excellent good practices of environmental education and ESD, but most of them were lost when the teachers in charge got transferred. Learning from this experience, it is crucial to meet the following conditions in order to promote ESD in a sustainable manner at school level.

- To incorporate ESD in all related subjects in all grades across the whole school and not only implement ESD in a certain subject and/or the period of integrated studies in a certain grade by specific teachers.
- To get understanding and support of the local people on the importance of ESD through collaboration and cooperation and acquire support from the local community to continue ESD cullicula even when the teachers in charge change .
- To exchange with other schools information and experience on the promotion of ESD.

Efforts across the whole school

In order to implement ESD at school in a sustainable manner, it is critical to work on ESD across the whole school (whole institution approach). In recent years, UNESCO Associated Schools, in order to implement a whole institution approach, are inclined to make efforts to integrate ESD into school education goals, enable all teachers to understand ESD at or above a certain level by implementing ESD training targeted for all the teachers at the school on the occasion of joining the UNESCO Associated Schools. More and more schools are appointing the ESD manager under the curriculum coordinator as a system to secure the implementation of ESD in each grade and to make coordination between different grades. The ESD manager also plays a role to promote research on ESD in school research activities.

As a means to familiarize all the teachers in the school with ESD, an approach is often taken to enable them to recognize that the lessons they have given so far include plenty of contents to be considered as ESD by developing an ESD Calendar at an initial stage.

It is important to secure continuity after the transfer of the key teachers, since school teachers in Japan get transferred every several years. On an individual school basis, it is critical to establish a system to clarify how ESD Curricula

were conducted for teachers newly in charge and avoid restarting from scratch, through filing the course planning materials related to ESD etc. On a nationwide basis, it is important to establish a system that enables teachers searching for various similar practices.

In conclusion, in order to implement ESD in a sustainable manner it is important to institutionally set up a mechanism where all the teachers could show a certain understanding on ESD, and ESD is incorporated in various class rrom curricula and extracurricular activities of all the grades.

Collaboration/cooperation with and support from the local community

From the viewpoint of securing continuity after the transfer of key teachers, the collaboration/cooperation with and support from the local community are as important as the measures within a school. For example, when visiting a place of interest and historical site, a distinctive shop and a nursing home in the school district for regional study, and having a chanced to listen their stories from the relevant people as guest teachers, strong cooperation/support activities are generated by the local people. In such a case, without their agreement, an action such as cancellation cannot be easily taken. If the local people understand the reasons why the ESD curricula has to be cancelled, the local people tend to make various contributions for the resolution of the problem, including the aspects of human resources and funds.

As seen above, the cooperation/support with the local community is crucial from the viewpoint of implementing ESD in a sustainable manner. However, in reality it is not easy for busy teachers to pursue the cooperation/support with the local community. Who serves to form a bridge between teachers and the local people is what is called ESD coordinators. A vice principal, a curriculum coordinator, or an ESD manager in school could play such a role in some cases. Various other people have been fulfilling the role of an ESD coordinator, including teachers' consultants and supervisors in charge of social education in the boards of education, employees of community halls, authorized people in the administrative organs, university professors, staff members of the UNESCO Associations, and related NPOs/NGOs. The details of the cooperation/support with the local community are referred to in another section, and I will not discuss further in this section.

Exchange of information and experience on the promotion of ESD with other schools

Busy schoolteachers often cannot work on ESD, being snowed under their daily routine, although they understand the importance of the promotion of ESD. In such a case, it is useful to exchange information and experience in order to learn what kind of approaches and efforts in other schools work on and how they improve the lessons based on ESD approach. Such exchange often allows you to share your motivation with each other and to bring about the energy to promote ESD further. Unfortunately, in Japan, the exchange among UNESCO Associated Schools has been relatively limited, and there were quite a few cases where a school did not sufficiently interact with its neighbor schools. In the future, it will be beneficial to establish a network/platform for the dialogue and interchange between UNESCO Associated schools and other schools that have an interest in ESD at nearby areas in particular.

August 2014:
Exchange of experience at a Tokai Hokuriku UNESCO Associated Schools meeting

Mechanism to Carry on ESD in a Sustainable Manner – in the Social Context

Nakazawa Shizuo
Nara University of Education

There are more than 800 UNESCO Associated Schools in Japan, and the number is continuing to grow through the efforts of the Japanese National Commission for UNESCO of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. In Japan, a UNESCO Associated School is placed as a base for ESD promotion in schools. However, there will not be many people who are optimistic about the further expansion of ESD. Why does it seem to be difficult to continuously promote ESD? The reasons will be considered from the following three viewpoints: 1) building the capacity of ESD teachers, 2) raising the awareness of people to support ESD, and 3) securing funds for ESD. This paper intends to discuss a framework that is necessary to continuously promote ESD through examining the factors that hinder its continuous promotion.

Building teachers' capacity

The first viewpoint is the capacity building of teachers who teach ESD. In the ASPUnivNet (Interuniversity Network Supporting the UNESCO Associated School Project Network), what is often argued is the improvement of quality of activities in UNESCO Associated Schools. In public schools, every teacher, including executives, is transferred to another school every few years. All the teachers in a school are transferred to other schools in around ten years. We often hear that if a teacher who was in charge of the application for UNESCO Associated Schools was transferred to another school, the students lose their enthusiasm for ESD activities. This means that it is difficult to continue activities because there are few teachers capable of giving ESD instruction. Because there are only a few boards of education promoting ESD at present, teachers who intend to promote ESD have no choice but to learn on their own. In our university, we have continually held ESD seminars on a monthly basis for the last three years. I greatly admire the teachers who regularly participated in the seminars that started at a late time of a day, 7 p.m., after work. However, we cannot expect a further increase in the number of teachers who understand ESD, if we depend exclusively on the motivation and efforts of the teachers who are busy enough already. Japan's Action Plan for the UNDESD (United Nations Decade of Education for Sustainable Development) that was revised in June, 2011, indicates that training is implemented targeting supervisors, etc., of prefectural boards of education, and the supervisors, etc., who received the training provide other teachers in each district with training sessions based on what they have learned in order to improve the quality of their teachers. Such training has yet to be implemented. Considering that the concept of ESD is included in the government's Courses of Study, it is expected that the government will ensure the immediate implementation of ESD training targeted at supervisors, etc. In addition, it is expected that education-related bureaus, including boards of education, will promote the dissemination of ESD in school education by holding various training seminars incorporating ESD perspectives; promoting participation in such seminars; and establishing a contact office of ESD and UNESCO Associated Schools, as stated in the Action Plan. These efforts will promote ESD in schools throughout Japan, not being limited to only some schools.

The Action Plan states that the objectives of ESD are bringing about a transformation of behavior that enables the realization of a sustainable future, in environmental, economic, and social terms, resulting in a transformation into a sustainable society. ESD aims at realizing the bottom-up transformation of society as a result of its educational achievements. However, it is not necessary to make an implementation scheme of ESD from the bottom-up. One of the five priority action areas of the GAP (Global Action Programme), which is a follow-up to the UN Decade of ESD, is educators and trainers (Increasing the capacities of educators and trainers to more effectively deliver ESD). Therefore, there is a need for continually holding training seminars on ESD that target incumbent teachers, implemented by boards of education, as well as for training students to be capable of giving ESD instruction at teachers colleges.

Raising public awareness

The next viewpoint for the continuous promotion of ESD is to raise public awareness to support ESD. According to a newspaper issued by the Japan Educational Press on Oct. 27, 2014, a public opinion poll on ESD targeting 3,000 people aged 20 and over across the country, conducted by the Cabinet Office of Japan, revealed that only 2.7% were aware of ESD and able to define it, while 79.1% responded that they did not know what it was. These results indicate that public awareness of ESD still remains low. Under these circumstances, there will be no politicians who make policies to promote ESD because even if they advocate it to the electorate, they will not receive much support. Promotion of ESD can only be achieved through the increased awareness of people who support ESD.

ESD aims to bring about the transformation of behaviors. However, it has not been clarified to the public what ESD-based behaviors are like. Visualization of ESD-based behaviors will increase public awareness of ESD. For example, there are many indicators in the field of environmental education. By using those indicators to find out how everyday behaviors affect the environment, public awareness of the environment will increase. Citizens who have learned about "food miles" will keep in mind local production for local consumption, and at least avoid the purchase of imported food. Those who have learned about the "virtual water" concept will decrease their consumption of meat. Furthermore, those who have learned about "modal shift" will select "Eco Rail Mark" products. If we have an indicator for ESD by which we can recognize that a slight change in our behavior contributes to the reduction of environmental load and feel a sense of achievement every month, just like we check telephone and electric bills every month, public awareness of ESD will be increased.

Securing funds for ESD

The third viewpoint for the continuous promotion of ESD is the securing of funds. Learning about ESD extends beyond classrooms. Implementing any activities, including research activities and interschool exchange, requires financial resources. The holding of workshops to promote ESD also cost money. Sustained funding is necessary for the continuous promotion of ESD. The funding comes from two sources. One source is a public source - taxes. Budgets to implement measures and subsidies provided from the national and local governments originally come from taxes. The other source is businesses. By connecting corporate activities and ESD, we need to try to obtain budgets for promoting ESD. However, companies are not charity organizations, so continuous financial support will be difficult unless the activities are profitable ones. We therefore turn our attention to ISO Standard 14001, an environmental management standard, which was established for the purpose of minimizing environmental effects caused by corporate activities. Although there are companies which focus only on pursuing profits while causing harmful effects on the environment, there are more than 20,000 companies which acquired ISO 14001 certification and are implementing environmentally-conscious activities in Japan (as of Nov. 2014). However, ISO is not widely known, and there is no tendency that citizens choose products made by a company with ISO 14001 certification when these people make purchases. Products made by companies that harmfully effect the environment and those made by companies with ISO 14001 certification are displayed together and chosen by consumers while considering only price, functions and design. If people's awareness change and ISO 14001 certification gains influence on the sales of their products, more and more companies will review their corporate activities and make efforts to acquire ISO 14001.

ESD aims at facilitating the transformation of behaviors, while considering a balance between society/culture and economies, as well as the natural environment for which restrictions are imposed to protect it. In short, ESD has cultural perspectives, in addition to the environment. I propose ESD 15000 (tentative name) certification provided to ISO 14001 certified companies that financially support cultural events, the protection of cultural assets and ESD projects in schools, and widely publicize them. If it becomes widely known and more people preferentially choose products made by companies with ESD 15000 certification, the number of companies that willingly offer financial support to ESD will increase. This will become a significant way of continuously supporting the promotion of ESD.

A framework for the continuous promotion of ESD has been discussed from the viewpoints of teacher training to increase the number of teachers capable of giving ESD instruction, raising public awareness of supporting ESD and the establishment of a system for securing funds for ESD offered by companies. There will be many other frameworks to continuously promote ESD, such as creating a "praise system" to highly praise ESD best practices and establishing an ESD center, as well as other frameworks. By creating frameworks that complement each other, I expect ESD to become part of the mainstream of education.

Evaluation of Schools

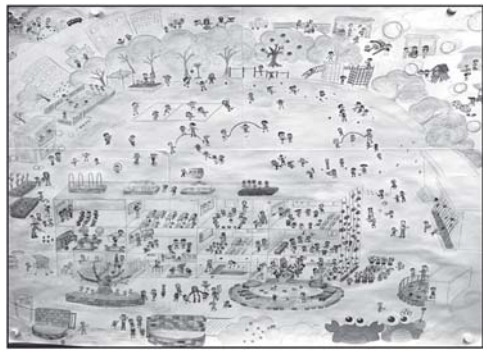
- a case of Nagata : Elementary School

Sumita Masaharu
Principal, Nagatadai Elementary School, Yokohama City

"There are one hundred different practices of ESD in one hundred schools, and one hundred different ways of implementing ESD by one hundred teachers." A key factor in school evaluation is whether a school is promoting ESD while understanding the characteristics and problems of the school and local community. When you go into a school, you immediately find out if the school is implementing a good ESD practice because the school is full of an open and bright atmosphere where other people are accepted.

ESD is a style of education that deals with a wide range of issues and brings about deeper learning. It gives us an opportunity to take a moment to reconsider the role of education. Taking this opportunity, we need to visualize the process of learning, and evaluate not only results and achievements, but also the process itself. It is necessary to develop an evaluation method based on the principles of ESD, not by setting numerical targets and items to be taught. This spontaneously requires us to improve the structure of the traditional style of education and reconsider the nature of school culture and the role of education. In order to realize these goals, it is necessary to review the structure of schools, including systems and traditions that have long been generally accepted, formalism, top-down decision-making, manualized programs, mere frameworks with no substance, classes that are almost identical to each other, discrimination against socially vulnerable persons and gender inequality. An effective means to review the structure of education is "a whole school approach."

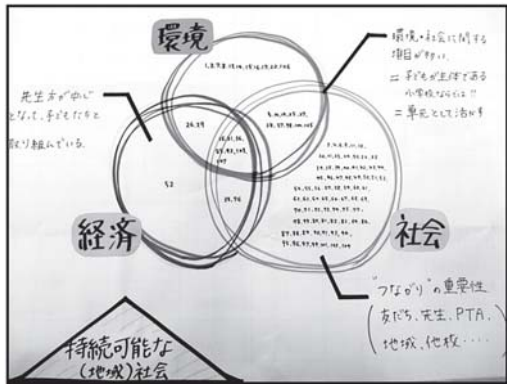
Currently, there are a wide variety of complicated problems that are difficult to solve in educational communities, such as bullying, non-attendance and problematic behaviors at schools. "These problems cannot be solved easily. They are common problems that occur at any school." There are such feelings of giving up that are pervasive among teachers. ESD provides an opportunity for changing the negative atmosphere and improve the structure of education. It is expected that schools that advocate ESD are full of sustainability and find their schools pleasurable. In implementing



evaluation, we principally need to see through our own eyes whether we are promoting what we intend to practice, not exclusively rely on external evaluations.

An example of school evaluation by creating a sustainability map and its analysis

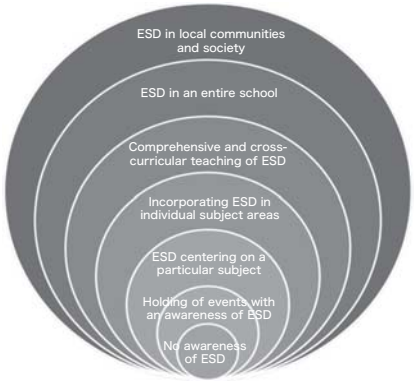
Students who promoted an ESD Challenge Project in the whole school approach draw a “sustainability map” as a result of the project. First, they asked teachers to discuss the “good things about Nagatadai,” by means of questionnaires, and made the results public. Next, they asked parents and people in local communities to give their opinions, while adding question items, and created a map that includes not only the school, but also local communities. How sustainability is being realized was shared with them through this map. We also shared opinions on points to be improved, and tried to improve them immediately. We adults have become able to notice things that we did not notice before by becoming more aware of reconsidering our daily lives. This map represents the evaluation for our school’s efforts so far, and it serves as a guideline for “keeping the school’s good things,” “creating new good things about our school,” etc. At present, more than a hundred items are included in the sustainability map, saying such things as “a teachers’ room always full of smiles,” “We are trying to connect with everyone,” etc. Each of the items are classified into the categories of the environment, economies and society (culture) in order to clarify the strength and weakness of our school’s sustainability, which can be an important basis for our school’s evaluation. Improving the weak points based on these categories will enhance the school’s sustainability.



Analysis of the sustainability map (made by students of the University of the Sacred Heart, Tokyo)

An example of school evaluation using school ESD indicators

Seven stages: Clarifying what is involved in ESD practices in school and ensuring the implementation of ESD practices, while fully being aware of sustainability.



ESD indicators in a school setting,
Created by Nagatadai Elementary School, Yokohama City

In order to build a school system intended to create a sustainable society, it is necessary to realize that sustainability extends beyond school and everything including humans, objects and matters is connected with each other, which means ESD deals with a wide range of issues. In promoting ESD practices, it is important to clearly understand what issues our school is dealing with and what to do next.

1st stage: Educational activities are being conducted without having any awareness of ESD.
* Teachers are making efforts and conducting good educational practices, but they have no perspectives of sustainability.

2nd stage: Teachers are implementing educational activities, such as holding events with an awareness of ESD.
* Teachers are aware of unsustainability. They consider such things as the creation of a society with future perspectives and sustainable ways of living.

3rd stage: Teachers are implementing educational activities with an awareness of ESD. Education rooted in everyday life activities.
*Environmental education, education for international understanding, etc., is being provided independently.

4th stage: Teachers discover elements of sustainability in individual subject areas, and incorporate the elements in teaching the subject.
* Teachers are giving classes while incorporating the elements of sustainability in each subject.

5th stage: Comprehensive and cross-curricular teaching while

interrelating all subject areas in terms of sustainability.
*Teachers find interrelatedness between subjects from the viewpoint of sustainability when they make lesson plans, and carry out classes with a degree of flexibility.

6th stage: Expanding the concept of sustainability to the whole school.
* ESD-oriented toward solving school problems.

7th stage: Expanding ESD practices to local communities and society with schools taking initiatives.
* ESD-oriented toward solving problems of local communities. Students become aware of themselves as leaders for the transformation of society.

In evaluating schools in terms of ESD, it is necessary for schools to see whether the ESD practices, which are being implemented according to the actual state and problems of each school, local community and students, are contributing to the sustainability of schools and communities. In addition, we need to see whether the persons involved in the ESD practices have realized the transformation in their values, behaviors and lifestyles, and whether they come to feel themselves as leaders who can change society. Such observations made as the school serves as the school evaluation of ESD practices. Deepening and expanding the attractiveness of ESD based on the states of evaluations will lead to realization of education that nurtures leaders of a sustainable future and to the realization of a sustainable society. If we only pursue the methodology of ESD or focus only on its framework and numerical evaluation, the practice of ESD will result in being merely a formality, and become difficult for practitioners to implement on their own initiative.

Some people say ESD is an integrated study. However, the dynamism of ESD will be suppressed if you regard it as merely an integrated study. Teachers will stop deeply considering ESD and no teachers will start using ESD. ESD is a style of education that extends beyond a framework of existing curriculum, not implemented only within a classroom. Expanding the scope of educational practices while considering current school education, local problems and global problems will bring out the potentials of ESD. By reviewing all the educational activities that have been done so far from a perspective of sustainability and promoting them in the entire school, the school will be revitalized and teachers and students will become energetic. It is expected that schools evaluate themselves through creating of a sustainability map and using ESD indicators, sharing the values of their ESD and promoting ESD challenge projects with confidence and pride.

Development of School Utilizing Perspective of ESD

- For integration of instruction and evaluation to increase educational effect -

Tokuyama Junko
Principal, Okayama City Kyoyama Junior High School

1 Characteristics of ESD in our school

Our school joined UNESCO Associated Schools in academic year 2012, and has promoted the development of an open school, which values “involvement and connection” with a lot of people, utilizing “people, materials, and matters” in the community while making use of a global network. With “From Kyoyama to the world! Wishes connected for everyone on the earth to stay happy” as a slogan, we aim to realize our school’s goal, “development of students who become independent and creative,” by considering the harmony between nature and humankind multilaterally and developing each other’s compassion, dreams, and ambition, through classes and activities utilizing a glocal viewpoint while taking ESD as “sharing and developing compassion, dreams, and ambition.”

Focusing on “environment,” “peace,” “human rights and multicultural coexistence,” and “career education” in particular, we organize the contents of the activities of the Integrated Study Periods (50h for the seventh grade/70h for the eighth grade/70h for the ninth grade) through the three years, and prepare our own guide for the Curriculum Guidelines and evaluation criteria (grade chart) to integrate instruction and evaluation. We also try to improve the quality of exploration activities to lead the acquired capabilities and attitudes to specific actions. Further, we make efforts to enhance linguistic activities and to improve our classes in order to develop the abilities to think, judge, and express by preparing and implementing an interdisciplinary unit-learning program. In this way, we would like to foster each student as an individual who will cultivate the base as a cosmopolitan who thinks of a future from a regional standpoint and will make a social contribution to the community, by reviewing all the educational activities and committee activities at school from the perspective of ESD and by establishing characteristic curricula.

2 Integration of instruction and evaluation

(1)Preparation of our own guide for the Curriculum Guidelines for the Integrated Study Periods

We prepared our own guide for the Curriculum Guidelines and evaluation criteria (grade chart) by adjusting the Integrated Study Period activities of the whole three years, and categorizing six “constructive concepts” and seven “abilities and attitudes” on which to focus. We have created characteristic curricula for the three years in this manner to maintain sustainable learning even after the transfer of teachers by following the PDCA cycle.

[Six constructive concepts]
1) Diversity 2) Mutuality 3) Finiteness 4) Fairness 5) Cooperation 6) Responsibility

[Seven abilities and attitudes]
1) Ability for critical thinking 2) Ability to predict a future and create a plan 3) Ability to think multilaterally and comprehensively 4) Ability to communicate 5) Ability to cooperate with others 6) Attitude to respect connections 7) Attitude to participate willingly

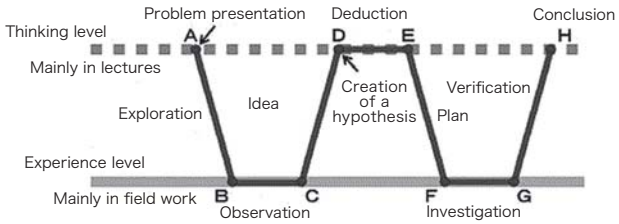
(2)Establishment of an interdisciplinary unit-learning program expanded by the perspective of ESD

We have established a unit-learning program in light of the collaboration of two or more subjects for the improvement of each class and time management. We have also prepared the evaluation criteria (grade chart) for each subject according to the developmental stage of each grade. As an example of unit learning, the students looked at the food problem in Sudan in Africa multilaterally from a global viewpoint, associated the problem with their lives, and expressed ideas and a course of action for solution in English; moreover, a member of JICA, a staff member from ASUECO (an environmental conservation organization in Okayama), and a farmer visited us; the students saw the issues in a region far from Japan as their own, and made a proposal on specific measures to solve the food problem through an experience-based program including a workshop where they calculated food mileage. We also conducted some classes, where they presented the attraction of Africa on the basis of what they had learned in Social Studies in front of students from four African countries, and transmitted that to African schools by video, and where they thought about proposals to create a better society through the English speech of Malala, a Pakistani girl.

[How to proceed with exploration activities]
It is common to adopt the following process in exploration activities, different from study just to check upon things.

Setting a task → Collecting information → Organizing and analyzing → Summarizing and presenting
↑ ← ↓

Setting a task, collecting information to resolve the task, and summarizing and presenting the result that has been organized and analyzed will bring about a new task. Then the new task will be explored. The significance of an exploration activity lies in developing a higher-quality resolution of a task while repeating the process in this way.
Here is an example of an exploration activity repeating various thought processes and experiences on the basis of the W-shaped problem-solving model.



[Figure 1] W-shaped problem-solving model:
Note) Partially revised from the Kawakita model (1967)

(3)Improvement of exploration activities utilizing the W-shaped problem-solving model

We try to make a social contribution and take actions by conducting exploration activities for higher-quality problem solving while repeating the process of [Figure 1], which is setting a task, collecting information to deal with the task, summarizing and expressing the result having been organized and analyzed, and encountering a new task, then exploring the new task. At the Synthesized Kyoyama Festival (SKF), the students transmit their proposals from their exploration activities based on an individual theme set by each of them, through a workshop, play, or presentation to the community. Further, as collaboration among schools, we held a "Conference for Children's Future" with other UNESCO Associated Schools in other prefectures and overseas through a video conference, where they exchanged their opinions from various perspectives beyond the regions, which has brought various viewpoints and standpoints to the students and widened their view.

(4)Creation of the ESD Calendar based on the "abilities and attitudes" to foster

We created the ESD Calendar for each grade by organizing the association of the Integrated Study Periods and other subjects, and interdisciplinary unit-learning programs. On that occasion, the instruction methods and measures became clearer by clarifying the quality to be developed on the basis of the seven "abilities and attitudes" to be focused on as well as the content of learning.

3 Achievements and issues of this year
(○: achievements, ●: issues)

○ The schematization of the ESD Calendar, which clarifies the abilities and attitudes to be developed from the perspective of ESD, and the evaluation criteria (grade chart) have clarified the prospect of the three school years, and enhanced educational effects.
○ The improvement of the Integrated Study Periods and the implementation of interdisciplinary unit-learning programs have improved linguistic activities. Specifying four viewpoints and three key points in each subject from a viewpoint of ESD has clarified the perspective of improving classes.
○ Lesson skills have been improved by learning from the classes of other subjects and discussing the contents of learning within more than one subject. that has led to improving the inspiration and ideas of teachers and a change in their awareness, as well as deepening interdisciplinary study collaboration and teamwork.
○ Enhancing the exploration activities, which focus on the W-shaped problem-solving model, has led to the development of students' abilities to think, judge, and express, and has also widened the students' view and increased their motivation for social contribution and volunteering for the community.
● We must make an effort on and improve evaluation methods to have a monitoring evaluation for the outcomes of ESD, such as a method to spontaneously evaluate the quality and transformation of students' learning.
● Collaboration between the primary schools and our lower secondary school

in our school zone should be further deepened. We would like to examine, validate, and improve the curricula for the whole nine years in primary and lower secondary school by clarifying the contents of learning in primary school and the abilities needed to be developed.

Evaluation Activities as a Part of ESD learning to Maintain Hopes for a Sustainable Future

- Writing Auto-ethnography that Serves as Evidence for Evaluation -

Narita Kiichiro
Graduate School of Teacher Education, Tokyo Gakugei University

"ESD changes something."
A fairly large number of people, who have been involved in ESD, including practitioners and learners, seem to have gained a certain degree of awareness of it. The following are some examples.

● A student who often walks around or goes out of the classroom is engaged in activities together with other students in ESD class. Teachers who see the student wonder, "What is ESD?" and think, "ESD is a magic," and are encouraged to promote ESD (Hearing from a former teacher of Shinonome Elementary School, Koto Ward, Tokyo, a member of UNESCO Associated Schools and a developer of an ESD calendar).

● A student who looked too worried to ask strangers the question, "Do you know who Minamoto no Tomonaga is?" was able to accomplish the mission called, "Tomonaga Appeal," with courage, on the Enoden (Enoshima Electric Railway) train. The passengers who were asked this question, answered, "I don't know anything at all about Tomonaga, although I live in this area," or "I feel I gained something from getting on this train." (Hearing from a passenger on the Enoden who happened to receive the "Tomonaga Appeal" from a student who was on a school trip from Mitsukawa Elementary School, Fukuroi City, Shizuoka. (Tomonaga was a warrior who died at the age of 16, and the older brother of Minamoto no Yoritomo). (Kiichiro Narita (2009). Minamoto no Tomonaga: A local appeal about history that gives confidence and courage to children. A Guide to Developing and Using ESD Materials: Hopes for a sustainable future. ACCU. pp.32-39).

● In 2012, a year after the nuclear power plant accident caused by the Great East Japan Earthquake, a teacher (K) and his third grade students at Tokorozawa City Y Elementary School tried to implement an ESD practice called, "Acha cha! We are Dr. Ocha (green tea)!! - Let's open a tea house to explain the good points about Sayama tea-." In order to open this teahouse, the students started to discuss which one they should serve: tea made from tea leaves produced this year, or those from last year. The majority of the students (18 out of 25) answered that they should serve both and make customers choose one of them. Immediately after that, they asked their teacher what he thought about it. In the next class, teacher K talked to his students, after thinking it over again and again, and said, "I am against the idea of serving both teas. Is it possible to strictly distinguish between this year's tealeaves and those from last year, and keep them separated? Is there any possibility of making mistakes? The school is a public institution. Can

we serve this year's tea while leaving the safety issue* behind?" Then the students discussed it again and voted. 12 students voted for last year's tea, two students for both teas and 11 students for this year's tea. With only one vote difference, they decided to serve last year's tea. After these thorough discussions and a building of consensus, one student who was in favor of this year's tea said, "I would like to properly convey the good points of Sayama tea, although we use last year's tea leaves!" At that time, many schools and communities stopped activities to learn about tea, based on adults' judgment, which had been implemented during the period for integrated studies. In this ESD practice, however, the teacher himself became involved in the discussion by the children, who also got involved in learning about tea by focusing on the challenge that befell the area where they were living. * : After a nuclear plant accident, there was the issue of Sayama tea that cesium more than the regulation level was detected. (From a practical report of teacher K at a meeting of the ESD Study Group in the Tokorozawa Education Center in Saitama, and hearing from him after the meeting.)

These episodes are summaries extracted from the author's field notes and ethnography. There must be a high number of episodes that describe essential and fundamental aspects of ESD, which only remains in the "memories" of people involved in ESD, including many practitioners and learners.

It is no exaggeration to say that most of the enormous number of ESD practices implemented during DESD (The UN Decade of Education for Sustainable Development) have yet to be described and reported fully, except for only a part of the "facts," including their plans, progress and results.

In implementing the evaluation of ESD, isn't there a possibility that many episodes may be excluded from the evidence for evaluation of ESD as they describe only the "subjective" view of one practitioner or learner?

It is certainly necessary to conduct evaluations by carrying out an extensive awareness survey and figure out the transformation in the awareness of people involved in ESD, in a form of "objective" numerical values, by employing quantitative statistical techniques. However, a true and correct evaluation cannot be realized without the description and analysis of episodes that support the "objective" numerical values or those that do not support them.

We are now in a critical situation at local and global levels, and it is insufficient to merely put the adjective "sustainable" before words such as environment, economies, society and culture when implementing activities. It is no exaggeration to say that we are repeatedly and momentarily standing at a crossroads, where we are faced with either the sustainable or unsustainable.

Under such circumstances, is it possible to evaluate ESD maintaining "hopes for a sustainable future?"

The evaluation method I thought through my practices and research on ESD is to write "the auto-ethnography" as evidence of ESD practices.

It often happens that people who are involved in ESD, including practitioners and learners, are too busy to write an individual record by themselves.

However, it will be possible to keep writing a record of reflection based on logic and evidence, and that of contemplation, including intuition and raised awareness in the process of ESD practices.

Evaluation must be conducted not only after the planning of activities and after their implementation but throughout the process of the beginning, middle and end of learning activities. The statements in the auto-ethnography and accumulated documents (portfolio), which are formative assessment, become extremely important evidence for evaluating ESD.

The auto-ethnography is composed of a record of "facts" one gained through learning and experiences and that of "meaning," which explains the facts.

Using the technique of "creative epic and explanatory notes" is effective for writing an auto-ethnography that extends beyond the dichotomy between subjective - objective, rational - intuitive, and empathy - a sense of strangeness. The creative epic is a poetic work in a broad sense, which is composed based on the "facts" gained through learning and experiences, to which imagination, sensitivity and inspiration are added that cause internal "chemical changes." There are a variety of forms of expression in the creative epic; a "free verse," "fixed form of verse," "essay," "slogan and catch phrase," "a Kanji (Chinese character)," "illustration" and "blank." The persons involved chose and decided on a form of expression from these various forms. The creative epic is a verbalized and visualized contemplative record. In addition to it, it is necessary to write explanatory notes, which are reflective records that explain why you wrote the epic. They are written based on logic and evidence gained through learning and experiences of your own. If learners are unable to verbalize and visualize what they have done in a form of the explanatory notes, practitioners can help them by hearing from them and write them down.

It is important to convert subjectivity to objectivity through subjective exchanges between persons involved in ESD, by means of making an auto-ethnography that is written in the form of creative epic and explanatory notes, while alternately repeating contemplation and reflection. This means making a collection of auto-ethnographies, called "collaborative ethnography," which is made through interactions between persons involved, extending beyond one person's subjectivity, while securing intersubjectivity.

It is difficult to secure the authenticity of evidence for conducting evaluation as a part of ESD learning without auto-ethnography in the form of explanatory notes and collaborative ethnography as a collective intelligence.

Let us take the first step in the evaluation activities as a part of ESD learning that holds out the hope for a sustainable future through the writing of auto-ethnography by all the people involved in ESD in generations beyond.

References:
● Hiroshi Oda. (2010). Ethnography nyumon (Doing ethnography) : Qualitative field research. (in Japanese). Shunjusha Publishing Company.
● Yuji Genda. (2010). Kibo no tsukurikata (How to generate hope) (in Japanese). Iwanami Shoten, Publishers.
● Kiichiro Narita. (2013). Potential of auto-ethnography for teachers and children: Meaning of writing creative epic and explanatory notes. (in Japanese). Journal of Holistic Education, No.16, pp.1-16. Japan Holistic Education Society.
● Kiichiro Narita. (2014). Potential of philosophy in research on education in graduate school of teacher education: Beyond the combination of theory and practice. Teacher training from the perspective of philosophy. (in Japanese). Toshindo Publishing Co. Ltd. pp.43-58
● Toru Nishigaki. (2013). Shugochi toha nanika (What is collective intelligence?): Prospects of intelligence in the Internet age. (in Japanese). Chuokoron-Shinsha. Inc.
● Edmund Husserl. (2012). Kan-shukansei no gensho-gaku Sono hoho (Phenomenology of intersubjectivity and its methodology) (in Japanese) Chikumashobo Ltd. Translated by Shinji Hamauzu & Ichiro Yamaguchi.
● Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO. (2009). A Guide to Developing and Using ESD Materials: Hopes for a sustainable future. ACCU. (Available for download from http://www.unesco-school.jp/materials.edu/guide.esdmaterials/ (obtained on Dec. 25, 2014)

Chapter 3

Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD

The Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD was discussed and adopted at the 6th Japan's National UNESCO ASPnet Conference which was held at Okayama University on Saturday, November 8, 2014, during the UNESCO ASPnet International ESD Events in conjunction with the UNESCO World Conference on ESD.

The Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan was created mainly by staff working at UNESCO Associated Schools in Japan and therefore it reflects the reality on the ground. It declares their renewed commitment and proposals based on shared outcomes and challenges resulting from 10 years of ESD efforts.

Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan

Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD

What ESD means to us

I am connected to you, to everyone at school, to everyone in the community, an inclusive community, and to everyone in the world.
Therefore, even though you may be hidden from my view, recognizing the value of my role
in encouraging each other and supporting each other makes me want to do something. My world extends from the classroom to the schoolyard, from the schoolyard to the community, from the community to my country, from my country to your country, and then further to the world and to the Planet.
Therefore, recognizing that precious living treasures are present everywhere, makes me want to do something.
Connections with the past, with tomorrow and with the distant future. Now, I am connected with the past and with the future.
Therefore, recognizing that I shoulder an important responsibility amid this long passage of time, makes me want to do something.

Based on a message from teachers describing their perceptions of student transformation at a UNESCO Associated elementary School

Incorporating the ESD vision will lead to the creation of various connections within children's learning - connections between themselves and other people, as well as with the diversity of the world, the living earth, nature, science and technology, culture, the past and the future. Amid such connections, learning will deepen and survive in the hearts of children, and it will support the creation of a sustainable future. This support will be in the form of power to invoke action and collaboration, and the ability to continue inquiring and learning.

Outcomes of the UNESCO Associated Schools in Japan under the UN Decade of ESD

In 1953, UNESCO launched a programme to realize its ideals in schools around the world. Schools in Japan have participated in the programme from the outset. In Japan, the Course of Study (National Curriculum Standard) and the Basic Plan for the Promotion of Education incorporate the ideas of constructing a sustainable society and promoting ESD. UNESCO Associated Schools in Japan were positioned as bases for promoting ESD in accordance with the Proposal regarding the effective utilization of UNESCO Associated Schools for the promotion and dissemination of Education for Sustainable Development (ESD) (February 2008) by the Japanese National Commission for UNESCO. Through the ESD vision, and by virtue of teachers who empathize with the objectives of UNESCO Associated Schools Project Network.(ASPnet), and of people and organizations that support the schools, UNESCO Associated Schools in Japan increased dramatically in number, to reach a current total of 807. Thanks to the UNESCO Associated Schools across Japan, the scope of ESD in school education broadened significantly. The UN Decade of ESD has led to many positive outcomes in ESD in UNESCO Associated Schools.

By implementing ESD in UNESCO Associated Schools, topics such as peace, the environment, biodiversity, energy, human rights, international understanding, multicultural coexistence, disaster risk reduction, cultural heritage and regional studies were considered as entry points to learning. Projects and curricula were developed for identifying and resolving key issues in a hands-on, investigative manner. As well as in individual subject areas, ESD has been implemented by drawing connections between curriculum areas, effectively utilizing the Integrated Study Hours and other school activities.

Through implementing ESD that makes the most of the unique characteristics of a region, the children have gained a deeper understanding of how local communities are formed by people supporting each other. They have learned about the merits of communities and the issues they face. In addition, together with local people, they have considered what to hand down to future generations and what to reform, and they have learned about translating these ideas into action. ESD has also been leading to a shared understanding that the issues faced by local communities are linked to those at national, Asian and global levels and that joint efforts to overcome geographical distances and differences in generation and status enables us to create a sustainable future.

The children now view various local and global issues as their own. They have nurtured a "zest for living" while learning collaboratively, and they have developed an awareness that they are the future leaders of society. It is now realized that experiential learning and scientific investigation, through ESD, foster communication skills and critical thinking. They assist individuals in creating a sustainable future either individually or in collaboration with others.

A transformation occurred in the awareness of teachers guided by the ESD vision. Rather than merely communicating knowledge, teachers adopted an attitude of designing and coordinating child-centered study while learning together with their students. There were instances where this attitude changed the children, and changes in the children brought about changes in their school, which in turn brought about changes in the community. It brought out the inner strength of those children in Japan who were regarded as being indifferent to society and as having low self-esteem. It let them to gain self-confidence. Exchanges between schools led to the realization of an even deeper level of learning.

Moreover, collaboration deepened between schools and boards of education, parents/guardians, local stakeholders, NGOs and NPOs, businesses, universities and specialized institutions, the quality of ESD in practice improved. It also led to confirmation of the joy of trans-generational learning.

The Great East Japan Earthquake of 11 March 2011 wrecked tremendous damage. However, in certain areas, ESD that had been embedded in schools and communities contributed significantly to the disaster recovery, with a great deal of compassionate support being extended to the affected areas through domestic and international networks. Education aimed at creative reconstruction and based on a philosophy of ESD is being conducted for the revitalization and re-creation of local areas.

UNESCO Associated Schools in Japan: Our commitment

We will commit to continuing the promotion of ESD as a driving force for transforming education in Japan.
We will:

- Nurture the next generation who will contribute to their own community and to take actions with global viewpoint for creating a sustainable future.
- Realize education with deeper awareness of interconnectedness in cooperation with members of the community and other stakeholders, no matter what approach to learning or the subject, in order to create a broader commitment to peace and sustainability in local communities, in Japan, in Asia, and in the world. Approaches to learning and subjects include peace, the environment, climate change, biodiversity, international understanding, multicultural coexistence, energy, human rights, gender, disaster risk reduction, cultural heritage, regional studies and sustainable consumption and production.
- Illustrate transformation of students, teachers, schools and communities through ESD to spread the ESD vision, while understanding the essence of ESD.
- Engage in thematic learning and collaborative learning together with UNESCO Associated Schools in Japan and overseas, especially those in neighboring Asian countries. Through such learning we will enhance understanding of, explore solutions and take actions for cross-border global issues such as climate change, biodiversity, disaster risk reduction and sustainable consumption and production.
- Develop a national network, organized voluntarily, with fellow UNESCO Associated Schools in order to learn from each other and to raise the quality of activities. We will promote interaction and collaboration among UNESCO Associated Schools, and then enhance mechanisms for the exchange and use of information.
- Strive to be a practitioner of sustainability in the local community to contribute to the development of sustainable communities together with other schools, non-formal and lifelong learning institutions, NGOs, NPOs, local governments and various other stakeholders, recognizing children and teachers as “agents of change.”
- Continue dialogue and cooperation with various stakeholders to link together the five priority action areas in the Global Action Programme (GAP) on ESD, which is a follow-up to the UN Decade of ESD.
- Encourage UNESCO Associated Schools in Japan and those in all the other countries, as members of a network spanning 181 countries worldwide, to cooperate in building a sustainable future and, in this context, to learn from each other by creating various opportunities for exchange and collaboration.

Proposal from UNESCO Associated Schools in Japan to further promotion of ESD by schools

Based on the outcomes and challenges of UNESCO Associated Schools in their capacity as bases for promoting ESD under the UN Decade of ESD, in order to fully realize our commitment and to steadily extend ESD to schools outside the network of UNESCO Associated Schools and to the wider community, we make the following proposals to all schools, including UNESCO Associated Schools, and to the supporters of those schools.

- Respect the independent initiatives and ideas of teachers and students, and promote ESD.
  across the whole school by developing creative lessons and by developing investigative and interdisciplinary curricula.
- Consider and share ways for monitoring and evaluating ESD outcomes including methods for voluntarily evaluating children’s development and quality of learning through ESD.
- Build policies and systems that provide sustained support for ESD at each school, and arrange the foundation for the school principals to exercise their leadership while respecting the characteristics of ESD.
- Expand the in-service training programmes for teachers and others involved in education to deepen their understanding of sustainability from a local/global perspective while making the best use of their expertise.
- Create mechanisms in the community whereby various stakeholders can participate, cooperate and collaborate in the development of a sustainable society.

All children possess unlimited potential. Around the world teachers share an aspiration to provide quality education so that their potential can be realized. While sharing the same aspiration of parents/guardians and others in the community who nurture these children, we will promote ESD in order to create a peaceful and sustainable future.

8 November 2014
Adopted by participants at the 6th Japan’s National UNESCO ASPnet Conference (Okayama, Japan) during the UNESCO ASPnet International ESD Events in conjunction of the UNESCO World Conference on ESD

(Provisional translation:Original Japanese)

Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan: Achievements and Issues of ESD in Japan

Nagata Yoshiyuki
Professor, University of the Sacred Heart, Tokyo

Can ESD change the world?
Let us ask another question before asking that:
Can we change education with the help of the vision of ESD?
When we, through the search for the answer,
make the whole activity of education improve
to the level that can be called ESD,
the word ESD will have fulfilled its role.
Education is essentially a source to develop society
and humankind in a sustainable manner.
Dear friends, hold the source in your arm first.
The source of the power to change the world
lies in the expression of the free spirit of an individual.

Introduction

In November 8, 2014, the Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD was adopted at the sixth National Meeting of UNESCO Associated Schools held in Okayama. In the process of the creation of this Declaration (the "Okayama Declaration") covered in this discussion, "messages for the Declaration" were asked from the general public nationwide. In response to the request to create a message to include the Okayama Declaration to the UNESCO Associated Schools nationwide for use as important information for the drafting of the Declaration, words full of feelings were collected from all over Japan.

The opening sentences are one example, a poem from Yokohama Steiner School. Although this was not actually adopted as part of the Declaration, I decided to show it as typical of words submitted that capture the heart of ESD. Here I would like to mention that the creation of the Declaration was work showing respect for those "messages from the field."

I had an opportunity to witness the whole story of the birth of the Declaration as a representative of the Declaration working group, the Committee on Drafting of Declaration and Selection of Cases, the National meeting and International Forum of UNESCO Associated Schools. Although there were twists and turns until the Declaration was adopted, quite a lot of people who are involved in ESD gave their feelings to tell "what they cherish," and the compilation of them has made a Declaration. Now I would like to highlight the achievements and issues of ESD in Japan through interpreting the Declaration after mentioning the drafting process.

1.Background of the adoption of the Declaration

The Okayama Declaration was sent firstly to the parties concerned in the UNESCO Associated Schools in Japan, secondly to the parties concerned in the UNESCO Associated Schools overseas, and thirdly to the policy decision makers in the regions and countries that support the UNESCO Associated Schools, and the UNESCO (headquarters). The senders of the Declaration are officially the participants in the National Meeting mentioned above, but considering the process for the adoption, it can be said that it is a declaration by the field, mainly the teachers of the UNESCO Associated Schools in Japan.

In order to reflect the voices of the UNESCO Associated Schools as much as possible, the series of work focused on considering 146 good practices submitted online by schools and 25 messages submitted as the "messages for the Declaration" remarked on at the beginning, and picking up key words from the records of the past national meetings, regional networking events, and other related events.

On the basis of the above, the experts of the Declaration working group mentioned above, consisting of teachers and scholars who have great knowledge on ESD and the UNESCO Associated Schools, and practitioners of ESD, created the sentences carefully to have contents appropriate as the draft of a declaration making an international appeal. The draft of the Declaration made in this way was, through the public comment system and consultation with the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, made public at the National Meeting stated above, and the final version was developed according to the proposals made there.

What were shared as the materials for discussion were international declarations in relation to UNESCO Associated Schools and ESD that had been adopted.[1] The executive office that undertook the drafting of the Declaration was the Asia-Pacific Cultural Center for UNESCO (ACCU), which as the Office of UNESCO Associated Schools, made efforts to create a bridge between the headquarters of UNESCO and schools in Japan.

The issues in the process of discussion are summarized in the following points: To begin with, there was a need to make a wide range of words within

the scope of ESD concise, due to the limitation on the number of letters and the form by the nature of a declaration; secondly, the essence of the various example cases and messages collected nationwide must be put into words

1 The following seven declarations have been shared: 1) Auckland Declaration on 50 Years of UNESCO Associated Schools (2003); 2) Declaration on Nurturing Holistic Approaches Towards ESD (2007); 3) Tbilisi Plus 30, Ahmedabad Declaration (2007); 4) Bonn Declaration, UNESCO World Conference on ESD (2008); 5) Tokyo Declaration of HOPE (2009); 6) Tbilisi Plus 35, Tbilisi Declaration (2012); and 7) Proposals by the International Forum on 60 years of UNESCO Associated Schools (2013)

to be included; thirdly, the achievements and issues must be considered by giving thought to not only good practices but the current situations of the UNESCO Associated Schools in general; and lastly, by reference to the past declarations in relation to UNESCO Associated Schools, appropriate expression must be given as a declaration which will go down in the history of the UNESCO Associated Schools in Japan.

In the discussion of the working group, it was determined to develop the Declaration to clarify the achievements and issues of the last ten years. However, listing issues is not appropriate for the Declaration, and it was decided to mention them as positive expressions in the "proposal" and "commitment," which in the end led to the following structure of the Declaration. It consists of four parts, which are: 1) What ESD means to us (introduction starting with a poem); 2) Outcomes produced by UNESCO Associated Schools in Japan under the UNDESD; 3) UNESCO Associated Schools in Japan: Our commitment; and 4) Further promotion of ESD by schools: Proposal from UNESCO Associated Schools.

2.Problems in ESD in Japan seen through the Okayama Declaration

What you notice first when reading the Okayama Declaration must be the poem indicated at the beginning of the Declaration. A poem given by Inagi Municipal Inagi Daini Elementary School in Tokyo as a "message for the Declaration" mentioned above, which is a poem based on the words by a teacher at a UNESCO Associated School describing the changes of children from the viewpoint of children, was selected as the message appropriate for the opening sentences (see the box at the end). Although in the process of the adoption there were opinions against adding a poem in the Declaration, it was eventually adopted after a lot of thoughtful discussion.

One of the reasons for the adoption was that this poem nicely portrays "connectedness," which are the feature of the ESD in Japan. This may be a slightly exaggerated expression, but various relations between people and nature, and between people have been broken in the process of modernization, and ESD has been rebuilding such relations. In addition, the connectedness with "the distant future" and "the earth" are about to be built, which must have been unimaginable in pre-modern times – this poem was appreciated because it portrays such a way of education.

As described previously, the Declaration was prepared based on the intention to clarify the achievements and issues of the last ten years. Here I would like to find out the achievements and issues of the ESD in UNESCO Associated Schools and also in Japan from each key word included in the achievements in the first half and the issues in the second half of the Okayama Declaration. Now, I am going to explain each of the (1) apparent achievements, (2) accomplishments which are on their way to be achieved, and (3) remaining issues in the Decade of ESD in Japan, based on the Okayama Declaration.

1)Apparent achievements

● **Establishment of the development base**

As described in the "Outcomes produced by UNESCO Associated Schools in Japan under the UNDESD," the base (infrastructure) to develop ESD was established in the last ten years. It is an extraordinary improvement of a development base from a global perspective that the Basic Plan for the Promotion of Education has included ESD, the quantitative and qualitative expansion of UNESCO Associated Schools is advocated, and the Curriculum Guidelines (Course of Studies) specifies the words with an awareness of a sustainable society and the future. This solid base has had a considerable influence upon the penetration of ESD, especially in public education. I must say that the government has kept making efforts to play a reasonable role.

● **Creation of various connectedness**

As stated above, the characteristic of ESD in Japan is focus on connectedness. There are quite a few opinions that ESD has acted as a bridge between the school, and the community and world. It is ESD that has linked the past and future, and teachers and children living in the present as well as linking in space, and the Declaration describes, "they have developed an awareness that they are the future change agents of society." Many ESD lessons have encouraged imagination on how the current environment and social issues could influence the future. It is also remarkable that the prevalence of 'the ESD Calendar' has increased interdisciplinary attempts. Further, the contact and sharing of learning with the people in the Tohoku region who suffered enormous damage from the Great East Japan Earthquake, which occurred in the last half of the "Decade," have been developed through ESD.

● **Utilization of the Integrated Study Periods**

As the Declaration states, experiential and inquiring projects utilizing the Integrated Study Periods and other subjects have penetrated, and the awareness of the importance of problem-solving learning has grown, which is an achievement. Subjects other than the Integrated Study Periods have also created a number of "regional studies and actions in the community," which has lowered the barrier between the school and community. As discussed later, there is a tendency to stay in the Integrated Study Periods. However, it is significant that, through the experience of integrated study, children have developed the awareness as the "change agents of a sustainable society."

● **Awareness of disaster prevention**

A major event that unexpectedly occurred during the "Decade" was the Great East Japan Earthquake. It is said that, in communities that have made daily efforts on ESD, ESD has contributed to the protection of the life of the local residents and to the advance of flexible reconstruction. Especially the approaches by Kesennuma City, Miyagi, including education for disaster prevention, are good practices of ESD from a global perspective. In those communities, ESD has raised the awareness of disaster prevention and disaster reduction, and ESD has further enriched one area among "climate change," "biodiversity," and "disaster prevention (disaster risk reduction)," which are the three major areas of ESD that have become highlighted in the UNESCO headquarters, etc. in the last half of the "Decade."

2)Accomplishments which are on their way to be achieved

● Critical thinking

The fact that "projects and curricula were developed for identifying and resolving key issues in a hands-on, investigative manner" in the "Decade of ESD" is regarded as an achievement. However, "higher-order thinking skills" (International Implementation Scheme on ESD by UNESCO) including critical thinking skill which was advocated from the beginning of the "Decade" and mid-and-long term thinking skill are still on the way. Although such thinking skills were nurtured from the planning stage of ESD, and highlighted through the "Decade," it has hardly been settled. Reflecting this, the Declaration only expresses that "it was understood that the ability to think and judge critically fosters."

● Time consciousness

I can imagine for sure that quite a lot of students have started to be aware of "time" through ESD as described in the poem in the opening sentences. However, there has been little learning to develop mid-and-long term thinking skill on what kind of development in the past has caused the current non-sustainability as represented by global warming (climate change), and on how the modern lifestyles and behaviors in search of affluence, which would foster the current non-sustainability, have an effect on the future.

● Self-esteem and participation of students

There are quite a few children and teachers who have become active through ESD projects and actions. As the "Future We Want" Declaration in the "Rio Plus 20" emphasizes, the empowerment of the youth is a universal issue, and it can be said that specific cases to such issue arose in ESD. In that regard, the Declaration describes, "it brought out the inner strength of children in Japan regarded as having low feelings of self-esteem, and led to them gaining self-confidence." However, it is worth thinking about whether it is temporary empowerment or not. As the Declaration promises to "illustrate transformation of students, teachers, schools, and communities through ESD to spread the ESD vision" in the "Commitment," it is essential for students and teachers to be aware of "how they changed" through ESD on a daily basis, not "what they did," and at least the transformation at the level of values and lifestyles is not fully shared.

● New roles of teachers

The declaration states that "A transformation occurred in the awareness of teachers guided by the ESD vision. Rather than merely communicating knowledge, teachers adopted an attitude of designing and coordinating child-centered study while learning together with their children. There were instances where this attitude changed the children, and changes in the children brought about changes in their school, which in turn brought about changes in the community." In other words, through ESD, a teacher has come to play a role as a designer, coordinator, and facilitator, not as a transmitter of knowledge. And yet, it is undeniable that merely the "instances" can be seen, and whether the horizon will be expanded in the future is a social mission expected of UNESCO Associated Schools.

● Transformation of oneself and society

The Okayama Declaration mentions that there were instances where teachers' attitudes, which are changing while implementing ESD, changed the children, and changes in the children brought about changes in their school, which in turn brought about changes in the community. It is indeed one of a few achievements of the "Decade," where we glimpsed a transformation from education which attempts to change others (students) to spontaneous education where teachers themselves change, and that leads to the change of their students, their schools, and the community. Such a sense of endogenous development into a sustainable society was emphasized at UNESCO in the last half of the "Decade" as "learning to transform oneself and society." However, the prevalence of such an idea has just started.

3) Issues

● Approach toward global issues

The "Commitment" in the Declaration mentions cross-border global issues such as "climate change, biodiversity, disaster prevention, and sustainable consumption and production" as thematic learning and collaborative learning. The global issues above are the topics that the organizations to promote ESD, including UNESCO, have focused on internationally since the beginning of the "Decade." However, Japan has rather focused on local communities, and has not made a full effort to solve global-scale issues. From an international perspective, this means that ESD in Japan is trivialized into community activities. The dynamism of ESD will be exercised only if we work on cross-border global issues such as climate change and biodiversity.

● Sustainable exchange and establishment of cooperation with neighboring countries in Asia

Did a project like the previously-mentioned Baltic Sea Project (BSP) emerge in Japan in the past decade? Although, during that time, the relationship in East Asia was never in a desired situation, I suppose that UNESCO Associated Schools were expected to launch a project, which makes an appeal for the importance of peace/non-violence as the philosophy of UNESCO, with the schools in the neighboring countries in such time. This is obvious in light of the missions advocated by UNESCO Associated Schools[2].

As described previously, ESD in Japan has conducted excellent activities in the community activities, and achieved considerable results. On the other hand, it has not proactively promoted problem-solving learning in cross-border cooperation with schools as seen in the BSP, etc. As the "Commitment" describes "thematic learning and collaborative learning together with UNESCO Associated Schools in neighboring Asian countries" as an issue, it requires learning from overseas good practices, and approaching the common issues such as climate change and mass-consumption society together across the sea in East Asia.

2 There is a hopeful sign that Asian countries have been launching joint education projects to promote ESD across borders. For instance, you can see from ESD Rice Project (Regional Initiative for Cooperation for ESD Promotion through Rice). See http://esdriceproject.com for more details.

● **Sustainable consumption and production**

One of the expressions that are not included in the "Outcomes" but in the "Commitment" in the Okayama Declaration is "sustainable consumption and production." This is the fourth topic which was added right before the End-of-decade World Conference in addition to "climate change," "biodiversity," and "disaster prevention (disaster risk reduction)," which were highlighted in the last half of the "Decade" by the UNESCO headquarters as specific approaches of ESD. This was also inserted in the Okayama Declaration in the final phase. Assuming that the key concept of ESD is to transform oneself and society as stated previously, even though you acquire the knowledge on sustainability, you will somehow implement contrived ESD if your behaviors and lifestyle are against it. Teachers themselves are expected to conduct "sustainable consumption and production" activities according to ESD first, and to learn and act with their students after internalizing awareness of issues.

● **Transformation in values, behaviors, and lifestyles**

The International Implementation Scheme, which is the most important document to evaluate the "Decade", describes that ESD is required to transform the values, behaviors, and lifestyles for a sustainable future. It is worth noting that the word "transform" which indicates the change is derived from its own culture, is used here instead of the word "change" which indicates transient shift. Indeed, there may have existed classes where actions by children could be seen. However, it is essential to see whether it is temporary or not. Even when a student saves water or electricity at school through ESD, the student is likely to waste them at home or in the community if his/her values have not changed at a deep level. Although problem-solving skills have been made use of by ESD, it should be transformed into the values that will not produce a problem in a deep level, not just solving a problem. What is asked is whether ESD (value of ESD) resides in teachers and students or not; that is to say, whether "they live with ESD values" or not.

3. Conclusion

Issues other than those above can possibly be pointed out as the challenges of UNESCO Associated Schools. For example, there are some areas where the issues that should be approached with awareness as the UNESCO Associated Schools, such as a gender issue, are practically untouched. The gender issue appears as part of issues instead of part of outcomes in the Declaration.

The "Commitment" mentions, "through dialogue and cooperation with various players, we will link together the five priority action areas in the Global Action Programme (GAP) on ESD, which is a follow-up to the UNDESD" for the GAP itself, where the importance of synergistically connecting each area of the policies, efforts through the whole organization including schools, teachers, youth, and community is explained [3].

As the International Implementation Scheme describes, ESD assumes a mission to transform learning, which has been divided in the process of modernization, into a holistic activity. Nevertheless, the GAP describes a structure, which seems to say that five areas are separate in action. In this regard, it is essential to advance the GAP without dividing the policies and implementation, school and community, and teachers and youth in order for Japan, an advocate of ESD, to play a role of a good leading force for the GAP. This is also an issue of the awareness of the teachers in the field as well as the policy decision makers. For example, sensibility to synergistically connect the areas of the GAP, including the policies and youth, school and community, which apparently seem independent, is required.

Hopefully, in this manner, each UNESCO Associated School and ESD-related organization will deepen the dialogue on past and future ESD by utilizing the Declaration as a material on the occasion of the completion of the "Decade".

Finally, I would like to conclude this discussion with mentioning the poem in the opening sentences. I stated that the poem "has captured the heart of ESD" at the beginning. The reason is clear. The International Implementation Scheme, which was established by the UNESCO headquarters when the UNDESD started, stipulates the goal of ESD as the "re-orientation" of traditional education. It is, needless to say, the orientation to a sustainable future. In other words, the original purpose of ESD is to transform the way of conventional education, which has influenced the values, behaviors, and lifestyles that are making the global community nonsustainable, by sharing the ESD vision.

In fact, I was truly regretful that there had been no full-scale evaluation of ESD by checking with the International Implementation Scheme even at the End-of-decade World Conference, because I was engaged in monitoring and evaluating the implementation of ESD in various regions at the UNESCO headquarters during the "Decade" as a member of the ESD Monitoring and Evaluation Expert Group. In that sense, I am grateful for the poem, which has provided an opportunity to reconsider the heart of ESD, and it has been a relief that such a message was delivered by a UNESCO Associated School.

Education might be a product that has been formed while compromising on various kinds of reality. However, if you stick to the reality too much, that will become training instead of education. Recent skills development valued focusing on global human resources can be seen as a typical case. Education is not a synonym for human resource development. As different educational declarations state, I believe that wisdom to guarantee character formation specified in the Japanese Fundamental Law of Education (Article 1) in some way is crucial so that education stays in the way it should be. One aspect of such wisdom should be the sharing of words to provide a "vision (dream!)" for us, who tend to stick to the real world. Nowadays, the cultivation of the application focusing on globalization and useful knowledge has been advocated more than ever. Under such a trend, it can be the most important issue of post-2014 to take ESD as a vision.

3 'Aichi-Nagoya Declaration on ESD' also emphasizes that the five priority action areas of GAP should be strengthened in a synergistic manner (article 13). See http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/ERI/pdf/Aichi-Nagoya_Declaration_EN.pdf

Learning can have three connectedness by incorporating the philosophy of ESD with children's learning. In such connections, learning increases its values, which will remain in the mind of children, and will be a source to create a sustainable future.

- **Connectedness with people in children's learning**

  I am connected to you, to everyone at school, to everyone in the community, and to everyone in the world.

  Therefore, even though you are hidden from my view, recognizing the value of my role in encouraging each other and supporting each other makes me want to do something.

- **Connectedness with space in children's learning**

  My world extends from here to there, from the classroom to the schoolyard, from the schoolyard to the community, from the community to my country, from my country to your country, and then further to the world and to the earth.

Note: the message (poem) sent by Inagidaini Elementary School, Tokyo, a UNESCO Associate School and shown above was slightly revised at the drafting stage with the consent of the school for putting it at the beginning of the Declaration.

Outcomes of the United Nations Decade of Education for Sustainable Development (DESD) and Issues of UNESCO Associated Schools

Tejima Toshio
Principal, Yanagawa Elementary School, Koto Ward

Outcomes of DESD

In 2005, when the DESD was launched, there was no widespread awareness of global environmental problems, and almost nobody knew the term "ESD" and its principles.

After the G8 Hokkaido Toyako Summit, people became aware of environmental issues, and this year, the term "sustainability" is finally being seen in various situations.

We are now in the final year of the DESD, and transformation in the awareness of people towards sustainable development is being accomplished in society as a whole at last.

The spread of ESD in school education reaffirmed our perception of the basis of education, including the ideas of, "For what purpose do we learn?" and, "For what purpose do we teach?"

For the last decade, we have kept seeking what kind of education we should promote in order to develop abilities to survive in today's difficult and globalized world that rapidly changes. There has been a growing awareness that nothing is more important than developing abilities to identify problems, learn proactively and solve problems ourselves, developing creative communication skills, as well as health and physical energy (a zest for living) in these difficult times, when nobody gives you the right answers, and we are required to search for the answers ourselves.

Taking the opportunities of hosting the UNESCO Associated Schools Project Network (ASPnet) International ESD Events and UNESCO World Conference on ESD, qualitative changes are being promoted in education in Japan in the following four areas:

1)Conversion from education focusing on the retention of knowledge by cramming it into students, which has long been done - since the Industrial Revolution, to education that focus on exploratory learning and its learning process;
2)Conversion from education centering on individual subject areas to cross-curricular and comprehensive education;

3)Realization of the whole school approach based on an ESD calendar mainly utilizing the Period for Integrated Studies; and
4)Conversion in the role of teachers, from “persons who transmit knowledge” to “learning coordinators.” They awaken children’s curiosity, give direction in learning and prepare opportunities for encountering a wide variety of people, and facts and to present what the children have learned.

The outcomes of DESD brought about a major transformation in education in Japan, leading education into a new era.

Issues to be tackled by UNESCO Associated Schools

The major issues to be tackled by UNESCO Associated Schools are as follows:

1)To realize a peaceful, safe and sustainable world through cooperation with schools and related organizations in Japan and overseas, and learning from each other by utilizing the UNESCO ASPnet; and
2)To develop, implement, share and spread effective educational curricula and methods to realize such a world.

UNESCO Associated Schools in Japan have undoubtedly made efforts to tackle the issues mentioned above. The number of the schools increased from 20 to 807 over the last decade. They achieved significant results through learning the principles of ESD, taking opportunities such as National Meeting of UNESCO Associated Schools, and improving the quality of their ESD practices. It is more than a pleasure to see many good practices being produced through those efforts, including the one by Okayama City Kyoyama Junior High School, the winner of the Education for Sustainable Development Award 2014, which successfully incorporated ESD in their educational activities utilizing the ESD calendar in which abilities to be developed are clearly defined.

Furthermore, MEXT (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) is making efforts to popularize and raise awareness of the ESD calendar to schools throughout Japan, which is a valuable step toward realizing a sustainable society.

However, overall, participation in the ASPnet has not brought about improvement of educational methods in many schools, although it has revitalized school education to some extent, as revealed in a survey regarding what changes were brought about in schools after participation in the ASPnet. (In the survey, 55% of the respondents answered that their schools have been revitalized, while only 26 % answered that their educational methods have improved according to The Education Newspaper, July 2013)

What is most important is to review the role of school education from global perspectives, by which teachers change their attitudes, their attitudes change children, and the changes in children bring about changes in their parents and in the community. Unless we present such changes, no schools will positively promote ESD through participating in the ASPnet. It is essential to show the improvement of educational methods and its results in order to “realize a peaceful, safe and sustainable world,” one of the issues to be tackled by UNESCO Associated Schools.

Only schools that can present their improvements in the educational system and these results as accomplished facts, and those continuously striving to become such schools under the leadership of these principals deserve to be called a UNESCO Associated School.

It is time for UNESCO Associated Schools to place importance on the quality of activities along with its explosive increase in number. To realize this, it is essential that good leaders and those who aim to be leaders work together and deepen their collaboration.
This is why there is a sentence that says “Develop a national network, organized voluntarily, with fellow UNESCO Associated Schools in order to learn from each other and to raise the quality of activities” in the Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan.

Let us promote efforts to realize this declaration by creating a national network during the rest of this year.

Think About Future UNESCO Associated Schools

Yoneda Shinji
Adviser, Institute for International Understanding,
Tezukayama Gakuin University

The World Conference on UNESCO ASPnet, which was held in Okayama City in November, 2014, ended with adoption of the "Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan" ("Declaration"). The Declaration has a strong wish, determination, and hope to further develop UNESCO Associated Schools in the future with this world conference as the starting point.

Although, during the "United Nations Decade of Education for Sustainable Development," the number of UNESCO Associated Schools indeed increased significantly, the number remains small on a national basis. Moreover, there are quite a few problems, such as overemphasis on the community and a qualitative problem, and some have concern about sustainability. However, as I took part in the UNESCO ASPnet (Associated Schools Project) in the early 1960s, and have approached the revitalization of the ASP in Japan and have been involved in the promotion of UNESCO Associated Schools since the beginning of 2000, I couldn't help but have expectations on and feel hopeful for the future of UNESCO Associated Schools in Japan when I saw the excitement and a number of presentations at the UNESCO ASPnet International ESD event (the sixth Japan's National Conference) with over 1,000 participants this time.

Now, I would like to make some comments on my expectation and hope (including issues) for the "future UNESCO Associated Schools," briefly focusing on three points due to the limitation of space, by reference to mainly the Declaration, and the Global Action Programme ("GAP") adopted by this World Conference on ESD as the base of the Declaration, Recommendation for the revitalization of the UNESCO activities in the multicultural era in March 2014 ("Recommendation") by the Japan National Commission for UNESCO and the Good Practices in UNESCO Associated Schools ("Good Practices") summarized this time by the ACCU.

First of all, I would like to mention the transformation of students and the meaning of learning in the community. These are highlighted in the "Outcomes" in the Declaration. In the Good Practices, the transformation of students dominates in the "Outcomes." It is said that in recent years the participation in the UNESCO ASPnet during the UNDESD has been gradually changing from a top-down decision, which had been predominant at the beginning, to a bottom-up decision. It is believed that one of the reasons is the transformation of students. The concerns of general teachers are focused on the transformation of students at seminars that include presentations by UNESCO Associated Schools.

What were the major causes of making students transformed? In the Good Practices, you can find that the major cause of the transformation lies in the students having learned in the community while encountering society, culture, and nature. It is noteworthy that examples where the transformation of students has transformed their school and the community as well are increasing little by little. This shows that learning in the community is by no means a supplement for learning at school. The integration and cooperation of schools and the community is likely to be also an objective of the approach of ESD in the future in the GAP and the Recommendation. What exactly is the transformation of students? What the Good Practices points out varies from the affection to and pride in the community to self-affirmation, problem-solving skills, ability to take actions, communication skills, power of expression, ability to think, and nurturing the ability to imagine.

Meanwhile, learning in ESD focuses on developing "capabilities" for a sustainable society especially including values such as a way of living and that of thinking. Students' self-affirmation, which is fostered during the rich encounter with people, society/culture, and nature in the community, connection to life during various encounters in the community, awareness that others keep you alive, and affection to and pride in the community, namely local identity, serve as a driving force for developing a sustainable society in ESD. I am certain that such "capabilities" in local learning rooted in the community will at the same time be the "capabilities" for global learning. It is also pointed out that some university students have lately generated an inclination to regional revitalization and local perspective. I expect that the "capabilities" of students fostered by learning in ESD is going to be the "capabilities" to change Japan and change the world as well in the future.

Secondly, there is the relation between the Great East Japan Earthquake ("Great Earthquake") and ESD. We should pay attention to the Declaration mentioning this.

The Recommendations makes a proposal to share to the world how the contribution to and experience of the disaster prevention and reconstruction in the aftermath of the Great Earthquake have an impact on the nature of ESD as an approach to the world conference on ESD. The Good Practices introduces all the implementation cases of UNESCO Associated Schools by eight primary schools and lower secondary schools in Kesennuma City, which was affected by the earthquake, mainly with involvement with the communities, regional reconstruction, and development of awareness of disaster prevention based on the experience of the Great Earthquake. They say that students have learned the importance of connections and the dignity of life, and their affection toward their community has become stronger than before. A wide variety of assistance, including volunteer activities, was provided for the affected areas by UNESCO Associated Schools and other schools nationwide. They say that students, in light of their involvement with the affected areas, have acquired confidence and self-affirmation from "doing something for somebody," and in return learned of the dignity of life and importance of living in good earnest.

For a while after the Great Earthquake, various comments on what we have learned from the Great Earthquake crowded the media. They include, for instance, questioning of modern civilization, occasion of revitalization of

Japan, values, reviewing of lifestyles, dignity of life, and reassurance of the importance of connections. I suppose, however, most of them are what ESD has already recommended for us. The Recommendations encourages us to share the experience of the Great Earthquake. To what extent has the World Conference on UNESCO ASPnet shared such learning of students with the world as their own issue? More importantly, how much have we learned from each other in Japan? In these days, where it is said that the Great Earthquake is fading from our consciousness, it seems that how to share what we have learned from the Great Earthquake is deeply related to how to develop ESD in a sustainable manner.

Thirdly, in the Declaration, I take most notice of the proposal to promote ESD as a driving force for changing education. This is because it is the fundamental proposal I expect most in ESD, and enables ESD to carry forward in the education field. Now, however, it is almost the end of this discussion, and I would like to only describe two key points. Firstly, what kind of persons ESD should develop for a global age? Do we recognize ESD's potential ourselves? Secondly, we need to feel responsible whether we have addressed contents and methods as an issue based on the perspective of ESD as a driving force for changing education.

Facts and Figures of UNESCO Associated Schools

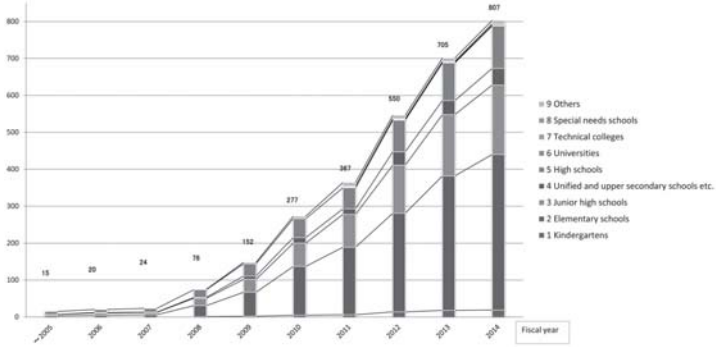
In 1953, UNESCO launched a programme to realize its ideals in schools around the world. It started as an experimental programme with 33 schools from 15 countries in the world including six schools in Japan. Since its outset, UNESCO Associated Schools have developed as a school network that pursues peace and international partnerships in order to help attain UNESCO's ideal, which is enshrined in the Constitution of UNESCO. There are more than 10,000 member institutions of ASPnet in 181 countries around the world.

UNESCO Associated Schools are member schools of the UNESCO Associated Schools Project Network (ASPnet).

These schools are positioned as the focal point for promoting ESD in Japan by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, and the Japanese National Commission for UNESCO.

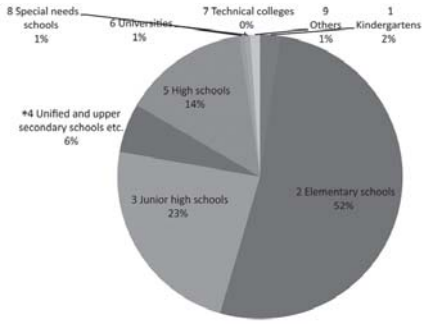
■ UNESCO Associated Schools in Japan

Transition in the number of UNESCO Associated Schools

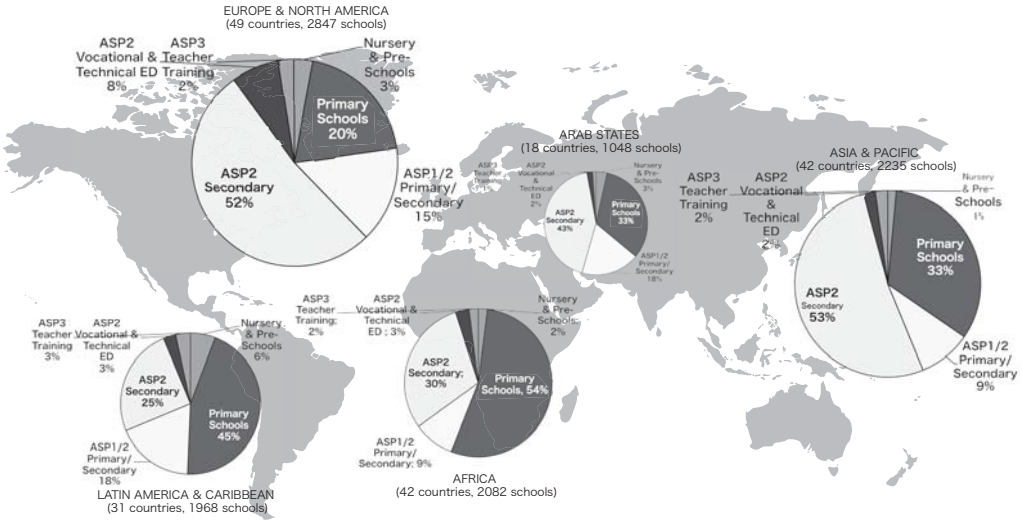


■ UNESCO Associated Schools around the world

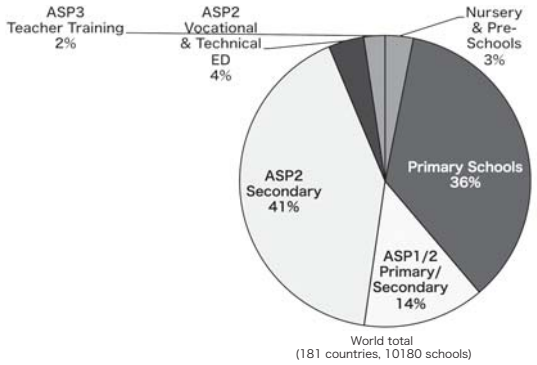
Breakdown by type of institution



The number of UNESCO Associated Schools by region and type of institution



The number of UNESCO Associated Schools by type of institution



Making Use of the Official Website of UNESCO ASPnet (Associated Schools Project Network) in Japan

A window for exchanges
Please make use of the official website of UNESCO ASPnet in Japan.

http://www.unesco-school.jp/

UNESCO ASPnet is a network that spans nationwide and worldwide.

Use the official website of UNESCO ASPnet in Japan for exchanges with other member schools.

● The website provides a means for proactive provision of information and exchanges with other member schools.

UNESCO Associated Schools can use the website for the following purposes:
▶ To post and update their school information.
▶ To link their school websites to the official website.
▶ To provide information on their original educational materials and recommended materials.
▶ To announce upcoming events such as workshops and meetings.
▶ To provide information and exchange ideas.
▶ To send out email simultaneously to other member schools in Japan.
▶ To use a page to find partner schools among overseas UNESCO Associated Schools to start international exchange.

● Information on fellow UNESCO Associated Schools is available.
▶ The list of all the UNESCO Associated Schools organized by prefecture

and type of institution is available.
▶ Annual reports submitted by each school to the Japanese National Commission for UNESCO are available (starting from academic year 2011 reports).

● The website offers useful information for member schools.

▶ Information on training programs and events related to UNESCO Associated Schools and ESD are posted regularly.
▶ Good practices of member schools and useful educational materials are introduced.

● Upon joining ASPnet, the school will be issued a login ID and password.

● Suggestions for new functions to be added on the website are welcomed.

● For questions, suggestions and comments, please refer to the website below.
webmaster@accu.or.jp

The official website of the UNESCO Associated Schools Project Network (ASPnet) in Japan has an English version. If you are interested in the activities of UNESCO Associated Schools in Japan, please visit the website. The functions mentioned above are basically limited to the Japanese version of the website. If you have any comments or requests regarding the website, please let us know at the Japanese UNESCO ASPnet Secretariat.

ユネスコスクールの今　広がり つながる ESD推進拠点

発行日　2015年3月10日
企画・発行　公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
〒162-8484　東京都新宿区袋町6　日本出版会館内
TEL：03-3269-4435　FAX：03-3269-4510
URL　ACCU：http://www.accu.or.jp/
ESD：http://www.accu.or.jp/esd/
ユネスコスクール公式ウェブサイト：http://www.unesco-school.jp/
E-mail：webmaster@accu.or.jp

翻訳・デザイン・印刷・製本　株式会社メディア総合研究所
©ユネスコ・アジア文化センター2015
ISBN　978-4-946438-95-0

UNESCO Associated Schools in Japan as Bases for Promoting ESD – Current Status and Way Forward

Published by the Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)
6 Fukuromachi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8484, JAPAN
Tel: +81-3-3269-4435
Fax: +81-3-3269-4510
E-mail: webmaster@accu.or.jp
ACCU website: http://www.accu.or.jp
ACCU ESD website: http://www.accu.or.jp/esd/index.shtml
UNESCO Associated Schools in Japan official website:
http://www.unesco-school.jp/

Translated, designed and printed by Media Research, Inc.
© Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO 2015